

研究紀要

平成 20年度

第 32号



静岡県博物館協会 研究紀要

第 32号 平成 20年度

表紙 浜松市楽器博物館 ブランシェのチェンバロ

目 次

2	遠江・駿河地域の中世石塔の出現と展開 - 静岡県下における中世石塔の研究 5	袋井市立浅羽郷土資料館 松井一明 見付学校教育資料館 木村弘之 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 溝口彰啓
24	歴史系博物館における体験学習活動の在り方 体験指導員としての活動を通して	静岡市立登呂博物館 稲森幹大
30	【報告】NPO文化財を守る会の活動報告	NPO文化財を守る会 中井喜子
32	【報告】富士・沼津・三島三市博物館共同企画展の歩み、並びに朝鮮通信使 400周年記念展について	富士市立博物館 学芸員 高林晶子
36 (13)	ブランシェのチェンバロ	浜松市楽器博物館 館長 嶋 和彦
36 (13)	アンリ・マティス《赤い屋根のある風景》	上原近代美術館 学芸員 土森 智典
37 (12)	阿弥陀如来立像(鎌倉時代)	上原仏教美術館 学芸員 田島 整
37 (12)	キャニオン・デアプロ隕石	石の博物館(奇石博物館)学芸員 荻原美広
47 (2)	当山派修験 遠州中泉組 月光山神護寺とその資料	袋井市立浅羽郷土資料館 山本義孝
48	静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程	

編集・発行

静岡県博物館協会(事務局)

〒422-8002 静岡市駿河区谷田 53-2

静岡県立美術館

電話・054-263-5857 FAX・054-263-5742

デザイン 有限会社サイズ

発行日 2009年(平成21年)3月31日

印刷 星光社印刷株式会社

遠江・駿河地域の中世石塔の出現と展開 - 静岡県下における中世石塔の研究 5 -

松井一明 木村弘之 溝口彰啓

1.はじめに

遠江中世石塔研究会では、平成 15年より遠江～駿河中部地域の中世石塔の実測調査を継続的に行ってきたおり、研究紀要 28号～ 31号に 4回にわけて古式石塔の実測図による部材まで含めた基礎資料の提示を行ってきた(松井・木村・太田 2005=研究 1、松井・木村・溝口 2006=研究 2 松井・木村・溝口・篠ヶ谷・椿原 2007=研究 3 松井・木村・溝口 2008=研究 4)以後記述する)。前号までに報告した遠江・駿河地域の古式石塔について若干の遺漏はあるかもしれないが、実測調査と個別地域報告をひとまずは完了することができたので、今まで進めてきた分類、分布の傾向と、編年的な位置づけ、さらに歴史的背景についての考察を本号にて総括的に行い、一連の研究成果の総まとめとしたい。

また、前号報告後の調査で判明した古式石塔についても、本号で補遺として報告することにした。なお、用語として古式石塔とは、大型品が多く時期も鎌倉～室町期に該当する古い特徴をもつ石塔で、戦国期以降爆発的に造塔される多数の小型石塔が主体となる時期のものを新式石塔と分けて位置づけている。

つぎに、古式石塔に使用されている石材の説明を冒頭でまとめおきたい。当該地域の古式石塔の石材は、花崗岩製品、凝灰岩製品(緑色・褐色・白色)、安山岩製品(A～D類)、砂岩製品の 4種類にまとめることができた。

花崗岩製品のうち古式石塔に該当するものは、石英や長石などの結晶が大きい特徴をもつ石材に限定できた。遠江の天竜川上流域にも同様の石材を産する露頭地はあるが、分布は遠江に限られ、しかも確認数は非常に少ないため、継続的に生産していると思えない状況を示している。県外地域のうち同様の特徴をもつ花崗岩製品を確認できた畿内の奈良県や京都府の山城地域、あるいは東海地域のうち伊勢や西濃地域などからもたらされたと考えた。

凝灰岩製石塔は、旧岡部町(現藤枝市)と焼津市にまたがって位置している高草山南麓に採石地を知ることのできる緑色・褐色凝灰岩製品と、駿河東部の沼津市域で産すると想定される白色凝灰岩製品の 2種類に大別できた。緑色・褐色凝灰岩製品は、緑色の色調を示し白色の結晶をほとんど含まない石材を緑色凝灰岩(焼津市浜当目山産の所謂当目石)、淡緑色～褐色の色調で白色の粒子を顕著に含む石材を褐色凝灰岩(高草山南麓産の所謂三輪石)と 2種類に細別した。さらに、沼津市域産の白斑と黒斑の結晶を含む軟質の白色凝灰岩製石塔も富士市域と静岡市清見寺で確認できたが、数は少なかった。

安山岩製石塔は遠江でも見られる伊豆東海岸北部～箱根産安山岩製石塔(A～C類、以後東伊豆産と表記する)のほか、富士

川流域～興津川流域に見られる安山岩製石塔(D類、以後富士川流域産と表記する)の 2種類の原産地に分けられた。なお、肉眼識別ではあるが色調や含まれる結晶の具合で A～D類の 4種類に識別したが、具体的な判断基準は前号に示してあるので参照されたい。

砂岩製石塔のなかには、遠く西濃方面から持ち込まれた河戸石と呼ばれる硬質砂岩製宝篋印塔が遠江でも 1点確認できたが、それ以外については確定的な生産地は明らかとなっていない。今のところ 15世紀後葉以降爆発的に生産される戦国期の小型石塔群の石材と同一と見られるものが多く、古式石塔を忠実に模倣している一部の例外を除いて古式石塔には属さないと考えている。

ちなみに、静岡県内の砂岩を肉眼識別できる範囲で分けると、駿河では白色で粒子が緻密な砂岩を駿河西部産砂岩(A類)、遠江では森町や掛川市日坂付近で産する粒子が荒く石英粒子を顕著に含む砂岩を遠江中部産砂岩(B類)、菊川上流～金谷周辺部で産すると思われる泥岩質で小礫粒を顕著に含む遠江東部産砂岩(C類)の 3種類がまず提示できる。このうち砂岩 C類については駿河中部地域でも確認できたが、駿河中部地域のものベースの砂の粒子がかなり荒いので、駿河中部産砂岩 D類として認識した。また砂の粒子が緻密で、小礫を含まない東三河産砂岩製石塔(E類)が浜名湖西岸地域を中心に搬入されている。

個別の資料の分類と編年的位置については各地域の報告編を参照してもらうこととし、本号の編年図ではできるだけ同一個体で編年できるものを代表事例として掲載し、同一個体の部材が揃わないものは複数の部材を組合せたものを提示している。前号まで資料提示できた石塔の実測調査は、石塔が所在する各教育委員会と寺院関係者の支援のもと、遠江中世石塔研究会の松井、木村、溝口、篠ヶ谷、椿原、太田の 6名が主に行った。本号の執筆はそのうち該当地域の全ての実測調査に参加したメンバーである松井・木村・溝口が分担し、石塔の種類別に考察を進め、各項の文末に文責を示し、考察の項目についても 3名が協議して松井が文章化しまとめたものである。

(松井一明)

2.補遺資料の説明

(1)石塔造立の歴史的背景

今回紹介する補遺資料は、第 1図 1の旧大須賀町普門寺、2・3の旧菊川町応声教院、4の旧小笠町神宮寺、5の同善勝寺、6～ 35の藤枝市十二社神社(神入廃寺)、36の静岡市則沢子安観音堂裏、37～ 41の同道白平奥ノ院の 7地点である。すでに報告済みであるが、図に不備のあった第 2図 42・43は旧豊田町池

田宿内の行興寺と 44の旧浜岡町の朝夷氏墓の宝篋印塔、45の偏照寺五輪塔の訂正図を示しておいた。

旧大須賀町普門寺は遠州灘海岸に面した丘陵地に位置する山寺である。付近の中世の段階での様相は良く分らないが、海浜部に近い丘陵中腹に位置していることは確かで、浅羽港経由で東伊豆産安山岩製石塔がもたらされたと思っても不思議ではない。

旧菊川町の応声教院は浄土宗の古刹で、今回報告する五輪塔は法然塚として祭られているものである。神宮寺や善勝寺は旧菊川町から旧浜岡町方面に到る街道に面していた山寺であり、駿河湾方面より何らかの関係をもった寺院であったと思われる。

藤枝市の神入廃寺(現十二社神社)の来歴は良く分らないが、相当比高差のある急峻な丘陵頂部の近い場所に立地しており、典型的な中世山岳寺院に属する山寺である。現在残されている平坦地からはさほど大きな寺院とは思えないが、石塔の内容から見ると山岳密教系の有力寺院であったと思われる。他の山岳寺院や山岳修験集団との関係は不明である。

静岡市則沢子安観音堂裏と道白平奥ノ院の石塔は、古代より霊山と見られていた竜爪山の熊野系山岳修験に關係した山岳寺院や行場に伴う可能性が高いものである。竜爪山の山頂直下には穂積神社が現在でも鎮座しており、山岳修験の中心施設であったと見られる。なお、竜爪山は古代では「しつはた山」と呼ばれており、文珠岳と薬師岳の 2峰を総称した名称で、竜爪山の名称は近世以降の竜爪山信仰のなかで生まれてきたと考えられている(静岡市登呂博物館 1999)。

(2)石塔の説明

第 1図 1は最大径が上半にある水輪で、東伊豆産安山岩 B類の小型五輪塔の部材である。梵字は省略されており、形態から見ても 15世紀後葉以降の新式石塔に該当するものである。

第 1図 2は空風輪が森町砂岩製である以外は同一個体と考えられ、幅の小さな水輪のみに梵字が入る新しい要素に対して、火輪の軒の反りが大きく、地輪も正方形に近い形態の緑色凝灰岩製五輪塔 A類の系譜を引く大型五輪塔である。時期は梵字が水輪に限られる特徴をもつため 14世紀中葉に該当させておきたいが、14世紀中葉段階で緑色凝灰岩製五輪塔 A類の系譜を引くものとしては唯一の資料である。3の中型の部類に属する緑色凝灰岩製五輪塔の火輪の特徴は、梵字はないものの、軒面は狭く、軒の反りも大きく、上端の幅も狭い古い特徴をもち緑色凝灰製五輪塔 B3類の部材と見られるため、15世紀前葉に該当させておきたい。

第 1図 4は浅い彫りの梵字が刻まれるが、最大径が上半にある東伊豆産安山岩 A類の小型五輪塔の水輪である。梵字の彫りは薬研にはならない新しいもので、形態から見ても 15世紀前葉には降ると見られる。

第 1図 5は東伊豆産安山岩 B類の小型五輪塔の空風輪である。梵字も省略され、縦長形態から見ると、15世紀後葉以降になる新

式石塔に該当するものであろう。

第 1図 8～ 12の凝灰岩製五輪塔の火輪のうち、梵字はないものの 12の高さが高く軒面の狭いものが古い形態で 14世紀中葉に、ほかのものも軒面も幅広く、軒の反りも小さくなるため、15世紀代には降ると考えられる。緑色凝灰岩製五輪塔の水輪のうち、大型で小さいが梵字の彫りも深い 16が 14世紀後葉、小型で梵字の彫りが浅くなる 15は 15世紀後葉以降と考えられる。19の地輪も梵字がないもので 15世紀後葉以降になるものであろう。

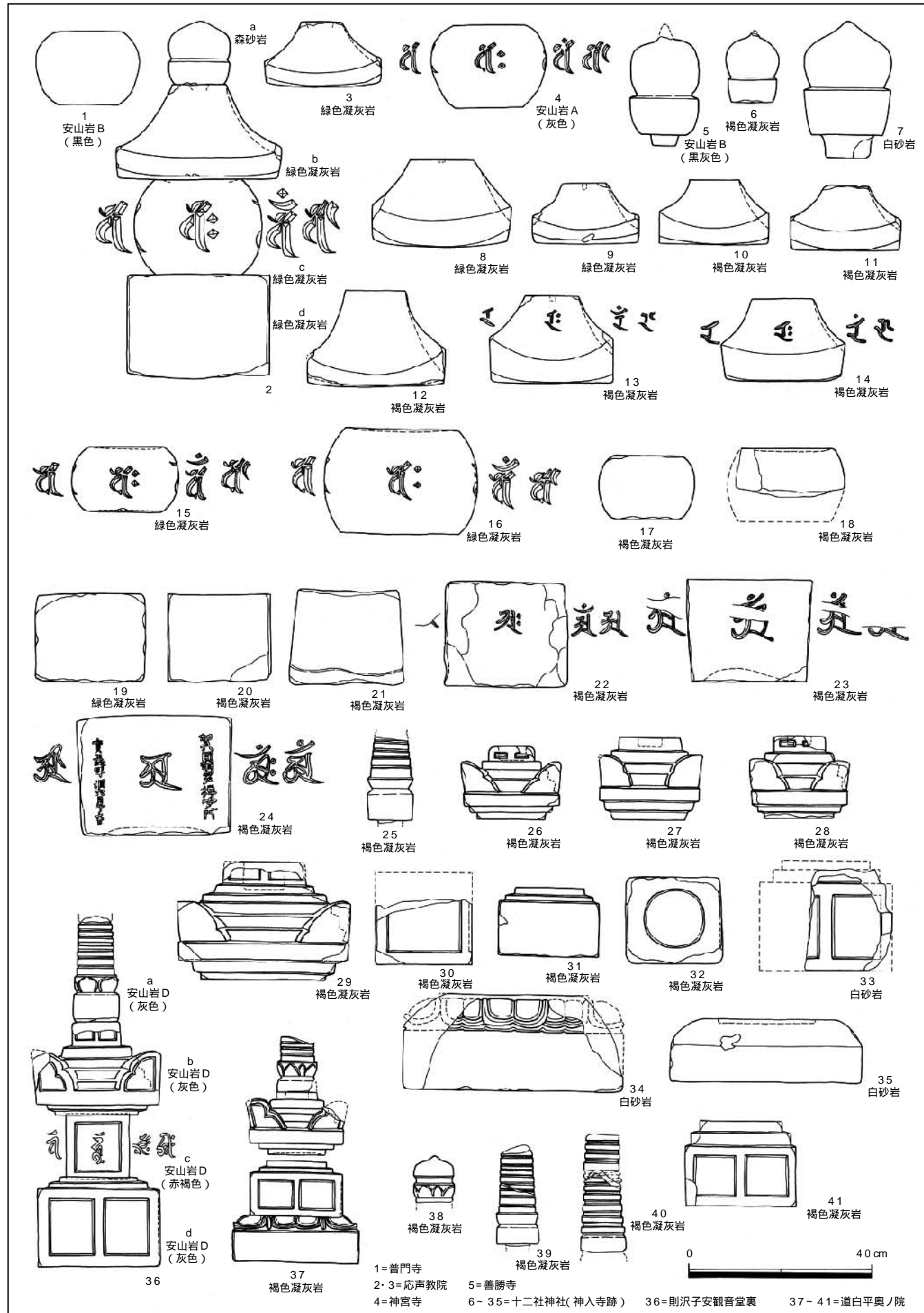
褐色凝灰岩製五輪塔のうち大型の第 1図 13・14の火輪、18の水輪、22～ 24の地輪は五輪塔 C3類の部材である。火輪の軒面は広く、軒の反りも小さく、上端の幅は広い。梵字は線書きに近い省略形態である。地輪も上端の方が広い逆台形で、火輪と同様に梵字は線書きに近い省略形態である。24には賀間静寅祥禪定門の戒名とともに、寛正 3年(1462) 6月 16日の紀年銘が刻まれており、五輪塔の形態から見ると矛盾のない年代を示している。17の水輪、20・21の地輪は梵字が刻まれない小型の部類に属するもので、15世紀後葉以降に該当するものである。

第 1図 29・30の褐色凝灰岩製大型宝篋印塔は、29の笠は軒上 6段、露盤に二窓が刻まれ、30の塔身にも梵字はないが窓枠が刻まれている A類の中でも新しい特徴を示している。25の相輪は下請花の花弁表現はなく、九輪も沈線化した B3類の特徴をもつ。26・28の笠は露盤に二窓が刻まれるが、いずれも軒上 4段と形骸化しており B 3類、31の基礎も 2段の段形をもつが横長形態に変化した B 3類に該当する。時期はいずれも 15世紀前葉になる。

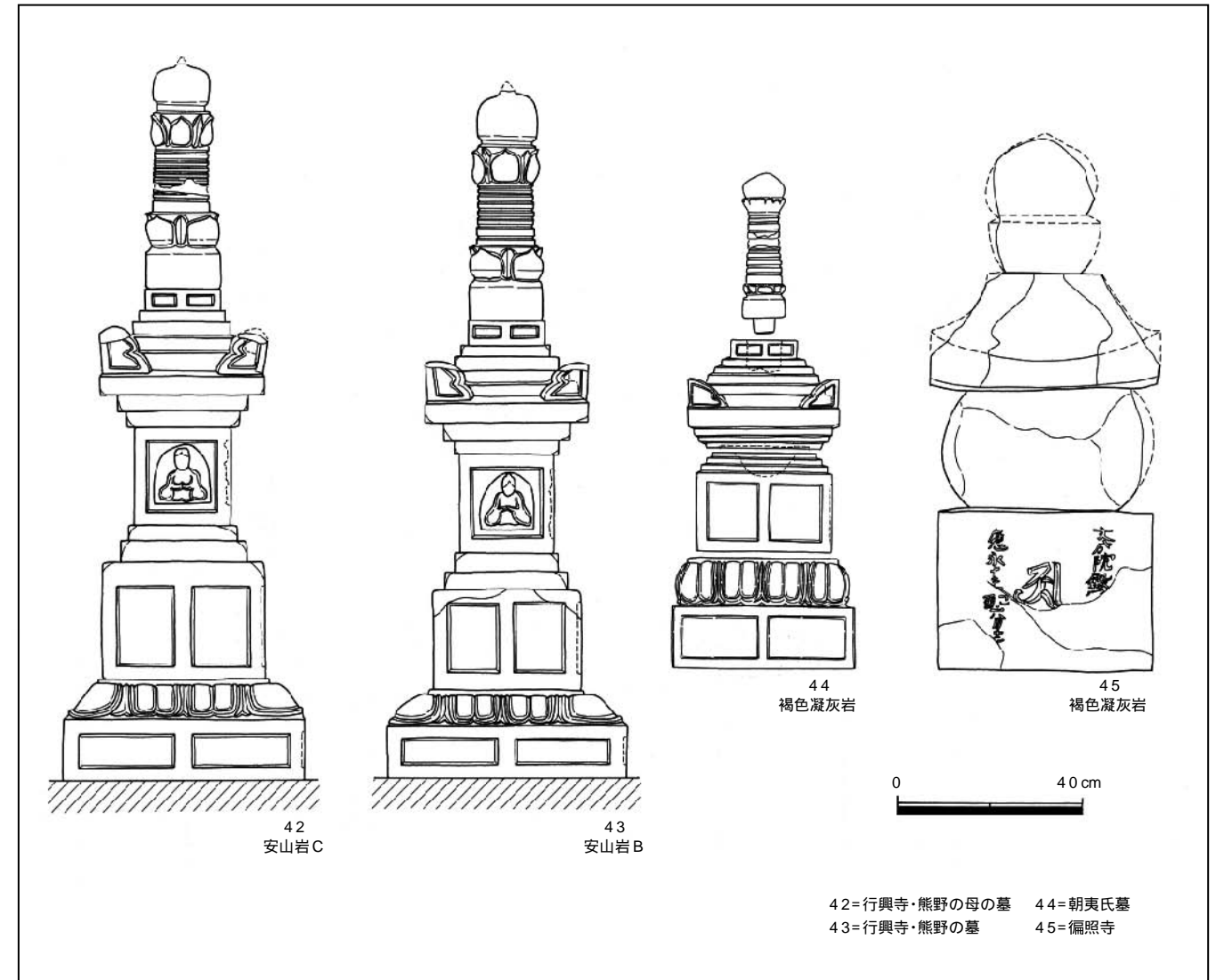
第 1図 32～ 34の砂岩 A類の大型宝篋印塔は同一個体の部材であろう。32の塔身には梵字のない丸窓が、33の基礎にも二窓、34の反花座にも複弁型式の花弁が刻まれている。反花座の花弁は中央の花弁が両脇の花弁に被る関西型式の特徴を示すが、基礎が二窓となる関東型式の特徴も合わせ持っている。丸窓にはなる塔身は新式石塔に見られる特徴であるため、反花座に古い要素も確認できるが、遠江～駿河西部地域特有の 15世紀後葉に出現する在地産砂岩製大型宝篋印塔の部類に属すると思われる。35の無花弁化した反花座も新しい特徴ではあるが、ほぼ同時期としておきたい。

第 1図 36は富士川流域産安山岩の中型宝篋印塔で、石材から見ると塔身以外が同一個体と見られる。相輪の九輪は沈線化しているが、下請花に花弁表現を残し、笠については軒上 5段はあるが、隅飾の軒面との段は省略された新しい形態、塔身は梵字が刻まれた窓枠をもち、基礎も縦長で塔身の受けである凹みをもち二窓が刻まれた古い特徴が見られる。おそらく相輪、笠、基礎は A 2類、塔身は A 1類に該当し、前者は 15世紀初頭、後者は 14世紀末葉に該当するのであろう。

第 1図 37の褐色凝灰岩製宝篋印塔は寸法からは同一個体と見られ、笠は隅飾の枠取りから関西型式であるが、基礎は二窓が刻まれ関西型式、37の反花座も二窓は省略されるが複弁で隅を



第1図 補遺石塔実測図1



第2図 補遺石塔実測図2

第一表 補遺中世石塔一覧表

No	寺院・墓地名	所在地	石塔の内容	備考
211	普門寺墓地	旧大須賀町西大淵	安山岩B五輪塔 1	
212	応声教院法然塚他	旧菊川町中内田	緑色凝灰岩五輪塔 2	
213	神宮寺墓地	旧小笠町河東	安山岩A五輪塔 1	
214	善勝寺墓地	旧小笠町棚草	安山岩B五輪塔 1	
215	十二社神社 (神入麿寺)	藤枝市桂島	緑色凝灰岩五輪塔 5 褐色凝灰岩五輪塔 12 褐色凝灰岩宝篋印塔 6 砂岩宝篋印塔 2	
216	子安観音堂裏	静岡市平山則沢	安山岩D宝篋印塔 1	竜爪山関連
217	道白平奥ノ院	静岡市平山則沢	褐色凝灰岩宝篋印塔 5	竜爪山関連

跨ぐ花卉となる関東型式の特徴を示す。この関東・関西混合型式は富士川流域産安山岩製宝篋印塔A 1類に特有な特徴で、褐色凝灰岩製宝篋印塔でも駿河中部地域に小数確認できる。富士川流域産安山岩製宝篋印塔の逆コピー製品であろうか。基礎は横長となる新しい要素も見られるが、相輪には下請花に花卉が刻まれ、笠も軒上 5段があり、反花座も花卉表現が良く残っているため、B 2類段階に属するものである。38の相輪は上請花に花卉が刻まれるB 1類、39・40は九輪が沈線化しており、下請花の花卉表現がなくなったB3類に該当する。41の基礎は高さの高い2段の段形、窓枠の狭い二窓が刻まれたB 1類に分類される。B1類は 14世紀後葉、B 2類は 14世紀末葉、B 3類は 15世紀前葉に該当する。

28号 34・35で報告した東伊豆産安山岩の第 2図 43(熊野の墓)の反花座の形態が、第 2図 42(熊野の母墓)より古い形態を示すと見て時期差を想定し、どちらも 14世紀後葉の時期と報告した。再調査の結果どちらの花卉表現もさして変わるものではなく、とくに 42は妙法寺の応永年間の宝篋印塔とあまり違わない特徴が見られ、14世紀末葉と見るべきであろう。なお、42・43ともに相輪の上下請花の花卉表現も主花卉間に間弁を入れる型式であったこと、43の仏形の光背表現を入れ忘れていたことを訂正したい。

29号 223で報告した第 2図 44の朝夷氏墓の褐色凝灰岩製A類の宝篋印塔について、基礎部分の段形表現に不備があり1段から3段の段形に訂正した。30号 108で報告した第 2図 45の偏照寺五輪塔のなかに、応永 12年(1357)の紀年銘が刻まれていることが判明したため補筆した。

(3) 小 結

今回の補遺で報告することのできた古式石塔について、気づいた点を述べて小結としたい。まず、応声教院の緑色凝灰岩製五輪塔は、梵字が水輪に限られる新しい特徴をもつが、地輪が正方形に近く水輪幅も火輪、地輪と比べると小さくなる特徴は、緑色凝灰岩製五輪塔A類の特徴で、A類が 14世紀中葉まで製作されていた可能性を示すものである。また、本五輪塔は法然塚の由来をもつ石塔で、浜松市西伝寺とともに浄土宗の寺院に法然由来の五輪塔(西伝寺の場合は東伊豆産安山岩が含まれる)が存在することも注目される。

神入廃寺の石塔群からは、由来の分からない廃寺が石塔から 14世紀中葉まで遡ることが分かった点は大きい。駿河西部地域で 14世紀中葉まで遡りそうな石塔をもつ山岳寺院は、天台宗の古刹である島田市智満寺と東光寺である。とくに駿河中・西部地域で緑色凝灰岩製大型五輪塔A・B類と褐色凝灰岩製宝篋印塔A類がセットで確認できる寺院は、地域でもかなり有力な寺院であることをすでに明らかにしているため、神入廃寺が有力な山岳寺院であったことは石塔から見ると疑う余地がない。駿河西部地域の天台宗寺院には東伊豆産安山岩製石塔が必ずと言っても良いほど搬入されているが、神入廃寺では確認できなかったので、天台宗で

はなくて真言宗の密教系寺院であったのかもしれない。神入廃寺の中世段階での来歴は地元の伝承すら残っていないため良く分からないが、これを機会に今後の調査で明らかにされることを期待したい。どちらにしても、遠江とは異なり駿河西部地域では大井川上流域、駿河中部地域では安倍川上流域の山間部でまとまった古式石塔の分布が確認されている。駿河中・西部地域の中世段階の山間部開発や物資の流通量が遠江より多く、有力な寺院勢力が存在した結果が見取れるため、神入廃寺の存在もこうした動きの中で捉えることが可能なであろう。

(松井一明)

3.五輪塔の分類と編年

遠江・駿河地域の五輪塔の石材は、花崗岩、凝灰岩、安山岩、砂岩に大別される。花崗岩製品は産地として遠江北部の山間部が考えられたこともあったが(桃崎佑輔 2000)、前項でも述べたように県外からの搬入品と考える。凝灰岩製品は褐色・緑色凝灰岩と、沼津市域に原産地があると見られる白色凝灰岩の 2種類に大別できる。安山岩製五輪塔としては東伊豆産は存在するが、今のところ富士川流域産安山岩の古式五輪塔は確認されていない。砂岩製品は在地生産品で古式石塔に属すると考えたものを第3図に示したが、研究 1・2の報告で遠江中・西部地域に分布する産地不明とした明るく緻密な砂岩製品で、水輪のみ、ないし全輪に梵字の入る大・中型五輪塔は、新式石塔に属する東三河産砂岩の可能性があるので本号では除外した。

前号までの報告で明らかになったように、石材ごとに五輪塔の型式変化が追えることが判明しているため、本号でも石材ごとに分類し、編年と考察を進めることにした。

(1) 五輪塔の分類

花崗岩製五輪塔 遠江での花崗岩製石塔は結晶の小さな砂質花崗岩とも呼べる西三河産岡崎花崗岩と、結晶の大きな県外産花崗岩に大別できる。岡崎産花崗岩については今のところ古式石塔に属するものは確認できていない。県外産花崗岩製品についてはすでにA～D類(研究 2)に分類したが、D類についてはB類の系譜の中で追えることが判明したので、従来のD類をB 3類に変更した。以下分類内容を再度確認したい。

A 1類は全輪に大きな薬研彫りの梵字が刻まれ、空風輪は縦長で中央の括れが曖昧で、空輪は団栗形となる。火輪の軒面は狭く、軒の反りが小さく、高さも低いいため扁平な形態となる。水輪は最大径に対して接合部が広く縦長で球形にならないで、地輪もかなり扁平な形態となる。空風輪と火輪はほぞ穴結合となるが、水輪と火・地輪の接合技法はほぞ穴結合とはならない。第 3図の永安寺 24 図中の番号は例えばこの場合 2は研究 2 1は図版番号を指す。以下同じように表記する)と、法多山 252があげられる。

B 1類も全輪に大きな薬研彫りの梵字が刻まれ、空風輪は縦長で中央の括れが明確に削込まれ、空輪は綺麗な宝珠形となる。火

輪の軒面は狭く、軒の反りも大きく、高さも高い形態となる。水輪は接合部は広く縦長となるため球形とはならず、地輪もかなり扁平な形態となる。B 2類の水輪は最大径は上半部にあるとともに球形に近い形態に変化し、地輪の高さも少し高く変化したものである。B 3類はさらに小型化し、梵字も水輪に限られ、火輪の高さがさらに低くなり、軒の反りも小さくなる形態で、水輪は上下端の幅が狭くなったことにより、ほぼ球形になるが最大径は上半部にある。

B 3類のほかは水輪と火・地輪の接合技法はほぞ穴接合にならない特徴がある。B 1類は第 3図に示した岩水寺 1-1のほか照月寺原氏墓塔群 2-74 B2類は第 3図に示した蔵平中世墓 2-6のほか法多山 2-63 長福寺 2-68 B 3類は第 3図に示した相慈院B石塔群 2-170のほか法多山 2-43があげられる。

C類は空風輪と火輪、水輪と地輪が一体化し、水輪と火輪の接合技法はほぞ穴接合となる。空風輪と火輪の一体化した形態は、嚙合式五輪塔(狭川真一 2005)と呼ばれているものであろう。火輪幅が一番小さく、水輪幅が一番広い形態を示すためややバランスが悪く見える。梵字は空風輪は風化のため不明であるが、火輪と水輪には薬研彫りの比較的小さな梵字が刻まれている。第3図に示した法多山 2-44の一例しか確認されていない。

凝灰岩製五輪塔 系統分類としては緑色・褐色凝灰岩製品はA～C類の3種類、白色凝灰岩製品はA・B類の2種類に分類できたので、石材・系統分類ごとに記述を進めたい。

緑色・褐色凝灰岩製五輪塔A 1類は、全輪に大きく深い薬研彫りの梵字が刻まれ、空風輪は縦長で中央の括れが明確に削込まれ、空輪は綺麗な宝珠形となる。火輪の軒面は狭く、軒の反りも大きく、高さも高い形態で、水輪は火輪や地輪と比べると最大幅が小さいのに対して、接合部が広がるため杏形の縦長形態に見える。なお、火輪と地輪幅はほぼ同じになる特徴を示す。地輪は正方形というより横長形態の印象となる。A 1類の梵字の中には瑞龍寺 4-68のように月輪が併せて刻まれた例もある。

A 2類の梵字は水輪に限られ、水輪は幅が増すため杏形というより球形に近い形態に変化し、地輪も高さが少し高くなるため正方形に近いものとなる。

A類は空風輪と火輪の接合技法は、ほぞ穴接合とならないか、両方に小穴が穿たれる木ほぞ接合のものが見られる。水輪と火・地輪の接合技法はほぞ穴接合にはならない特徴がある。A 1類は第 3図に示した永安寺 2-2と、部材で確実とはいえないが法林寺 3-3 瑞龍寺 4-68 A 2類は第 3図に示した応声教院 5-2の事例しかあげられない。A類の石材は現在確認されているものは、すべて緑色凝灰岩である。

緑色・褐色凝灰岩製五輪塔B 1類は全輪に大きな深い薬研彫りの梵字が刻まれ、空風輪は縦長で中央の括れが明確に削込まれ、空輪も綺麗な宝珠形となる。火輪の軒面は狭く、軒の反りも大きく、高さも古いものほど高く、下端面も平らではなくてより湾

曲するものが古い形態を示している。水輪は最大径に対して接合部は広いが、球形に見える。水輪幅は火輪や地輪と比べるとほぼ同じ数値を示すため、バランスは良く見える。地輪は縦長形態になるものが多く、縦長のものほど古い形態を示していると思われる。B 1類の中には学園寺 1-12 十輪寺 1-50 慈眼寺 2-121 羽島庚申塔 4-46のように月輪が併せて刻まれた梵字もあるが、今のところ4例のみしか確認されていない。なお、B 1類は第 3図 1-6に示した報恩寺のような総高1m前後になる大型品と、第3図 1-69の積雲院源朝長供養塔のような総高 70cm前後になる中型品が存在する。形態から見ると中型品と大型品は何ら変わらないので、若干の時期差は認められると思われるが、本号ではほぼ同時期としておきたい。

B 2類は空風輪の形態変化はないが、火輪の軒面は狭く、高さも高いが、火輪の下端面の反りが少なく平らに近いものも存在する。水輪に限られ刻まれるようになる梵字は、深い薬研彫りではあるが、やや浅く一回り小さくなる。水輪の形態は球形ではあるが、接合面がさらに広がるため横長の球形に見えるものも存在する。地輪の高さも高いもののほか、低くなり正方形に近く変化した形態となっているものもある。つまり、B 2類のなかでも第 3図 2-131の小堤城石塔のように水輪と地輪が縦長に見えるものは、より古い形態を示しているもの、地蔵原中世墓 3-40のような横長形態の水輪となるものは新しい傾向があると見成したい。しかしながら、複雑な分類になるので、本号ではとくに時期差をもった分類としなかった。B2類も第 3図 1-3に示した大屋敷中世墓のような総高 1m前後になる大型品と、確実な組合せは示せないが、第 3図 3-38・39・43などの東光寺の部材を見ると、総高 70cm前後になる中型品が間違いなく存在する。形態から見ると中型品と大型品は何ら変わらないので、B 2類なかではほぼ同時期の製品と考えておきたい。

B 3類となると小型化が進むため部材資料が多く確実な組合せは示せないが、第 3図鬼岩寺 3-54・68に代表させたように、総高は 1m以内となり、火輪の軒面は狭く、下端の反りも大きい、高さが低くなるため軒の反りが大きくなるように見えるものに変化している。梵字は無梵字となるか、水輪に限られた浅い薬研彫りはかなり小さくなった梵字に変化する。水輪は球形であるが接合部が広がることで横長形態に見えるようになる。地輪の高さもほぼ正方形に変化した形態となっている。なお、大型品でも小型化が進むようで、部材資料から判断すると、大型品と中型品の大きさの差は限りなく少なくなっている。

B類の接合技法は空風輪と火輪はほぞ穴接合にならないか、両輪に径 2cm程度の小穴を穿つ木ほぞ接合が採用される。確認できた範囲では、前者のほうが多く採用されているようである。火輪と水輪、水輪と地輪に、ほぞ穴接合は今のところ確認されていない。B 1類は第3図に示した報恩寺 1-6のほか遠江では岩水寺 1-2 龍雲禅寺 2-10・11 鎌田兵衛供養塔 1-60・61 積雲院源朝長供養

塔 1-68~ 70 用福寺橋逸勢供養塔 1-71・ 72 慈眼寺 2-120 駿河では万松院岡部氏墓 3-124 梶原堂 3-210に良好な資料を確認できるが、とくに遠江側に部材が揃ったものが多いようだ。B2類は第3図に示した大屋敷中世墓 1-3のほか、遠江では宝太寺 1-81、観音寺跡 2-96 小堤城塔 2-131 地藏原中世墓 3-4 駿河では組合せのわかる良好な資料はない。B3類は確実な代表事例を示すことはできないが、遠江中・西部より遠江東部・駿河に多いようだ。石材はB1・2類は緑色凝灰岩に限られるが、B3類になると緑色と褐色凝灰岩製品の両方があることが確認できており、後者のほうが多そうである。

緑色・褐色凝灰岩製五輪塔 C1類は梵字が全輪刻まれることはなく、空風輪は火輪と比べると大ぶりで、中央の括れが明確に削込まれ、空輪も綺麗な宝珠形となる。火輪の軒面は広く、軒の反りも大きく、高さはさほど高くないで、上端面の幅は広く、下端面は平らとなるため、A・B類とは明らかに系統差が大きいことが看取される。水輪は接合部が広い横長形態となるが、球形となっている。水輪幅は火輪よりやや小さい数値を示すが、ほとんど差はない。地輪は明確なものは確認できていないが、C2類から推定すると正方形に近いものを想定しておきたい。大きさは第3図に示した鬼岩寺 3-55のような推定総高 1.3m前後となる、A・B類より一回り大きな大型品が知られているが、B類に見られたような同時期の中型品は存在しないようである。

C2類も全輪無梵字のもので、形態はあまり変化はないが、第3図に示した法泉寺 2-87を代表事例とするように、高さ 1m前後になる小型化が見られる。水輪は最大径に対して接合部がより広くなることで横長形態となり、幅は火輪幅が一番広くなりややバランスが悪くなる。地輪はB1類と同様に正方形に近い。

C3類も第3図の加納家墓地 3-158を代表事例とすると、C2類と同じく高さ 1m前後のサイズを保つものがある。空風輪は中央の括れは明確ではあるが削込は小さくなる。火輪は高さに対して幅が狭くなるため軒の反りが大きくなったよう見え、下端面は反るように変化している。地輪も正方形というより逆台形となり、幅も水輪が最大幅をもつものに対して、水輪と地輪が小さくなるためバランスはかなり悪い。また、梵字は線彫りの特殊な梵字が地輪に刻まれる事例が出現し、B2類までの無梵字の原則は崩れる。

C類は空風輪と火輪の接合技法はほぞ穴結合にならないものが基本であるが、3-70のようにほぞ穴結合のものもごく少数存在する。水輪と火・地輪の接合技法はA・B類と同じくほぞ穴結合とはならない。C1類は第3図に示した鬼岩寺 3-35のほか同寺に7個体分が存在しているのみで、遠江では確認できない。C2類となると第3図に示した遠江の法泉寺 2-87のほか中田家裏山墓地 2-281・ 282がある程度、駿河では鬼岩寺 4-53 徧照寺 3-108・ 112 万松院 3-124に部材がある程度で、全輪の形態のわかる良好な資料はない。C3類は第3図に示した加納家墓地 3-158以外では、本号で報告

のできた十二社神社 5-13・ 14・ 18・ 22~ 24の部材が知られている程度で、遠江では確認できない。C1類は鬼岩寺の資料が最も古く良好な資料で、分布は藤枝市域に限られ、C2・3類については遠江や駿河に散在的に分布するようになるが、いずれも面的な分布を示すのか明らかではない。石材は褐色凝灰岩製品に限られるようであるが、例えば宝珠院 2-122のように無梵字で軒面が広くなり、空風輪とほぞ穴結合になる火輪のように緑色凝灰岩の中型品もあるため、C類の系統を引く新式石塔初期製品の中に、緑色凝灰岩が再使用されるようになる。

白色凝灰岩製五輪塔 A1類は第3図に示した沼津市霊山寺 1号塔を代表事例とする。全輪梵字は刻まれず、空風輪は火輪と比べると大ぶりで、中央の括れが明確に削込まれ、空輪も綺麗な宝珠形となる。火輪の軒面は広く、軒の反り先大きく、高さはさほど高くない、上端面の幅は広く、下端面は平らとなる。水輪は接合部が広い横長形態に見えるが、綺麗な球形となっている。水輪幅が最大で火輪、地輪と続くため見た目のバランスはあまり良くない。地輪は正方形に近い。霊山寺 1号塔の大きさは復元総高 2.72mと県内最大の五輪塔となっており、同形態の五輪塔で霊山寺 2号塔の総高は 1.71m、霊山寺 3号塔は空風輪は欠失しているが復元高で 1.76mと報告されている(吉澤悟 1998)。

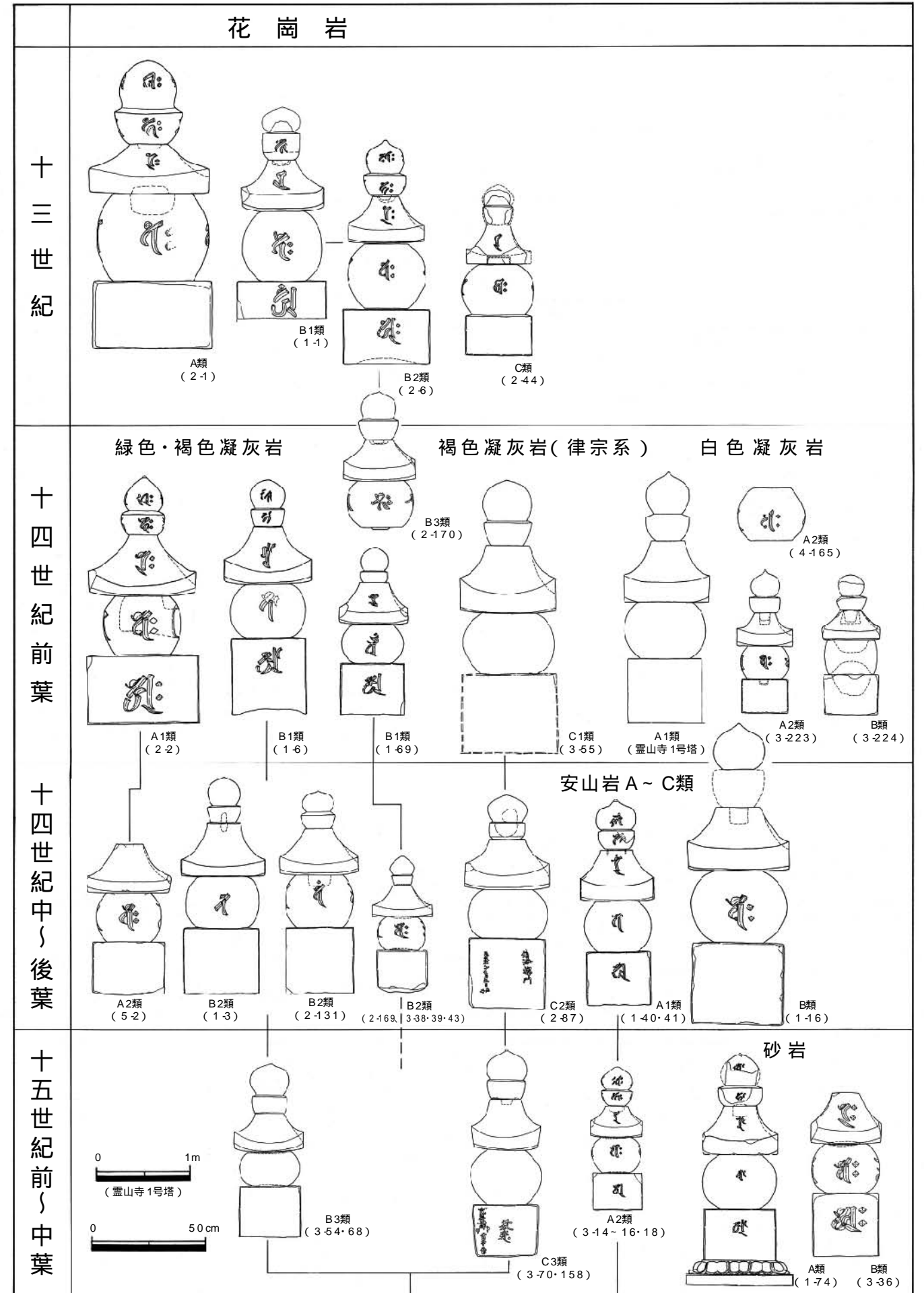
A2類になると形態からはほとんど変化を讀取することはできないが、今井中世墓 3-223の事例からは、水輪に限られた小ぶりの梵字が刻まれた総高 60cm程度の小型品と、清見寺 4-165のような水輪に梵字が刻まれた総高 1m前後となる大型品もありそうである。A1類からA2類のなかでの変化は、小型化した製品がある点や、水輪に限って梵字が刻まれている点は、A1類と比較すると新しい特徴と見られる。

B類の今井中世墓 3-224はA類と全くの別系統の製品で、空風輪と地輪の形態はさほど違わないが、全輪無梵字で、火輪は軒面の狭い扁平なもの、水輪も上下接合部がかなり広い球形には見えない形態となっている。一見すると花崗岩製五輪塔A類の火・水輪に通ずる古式の形態を示している。

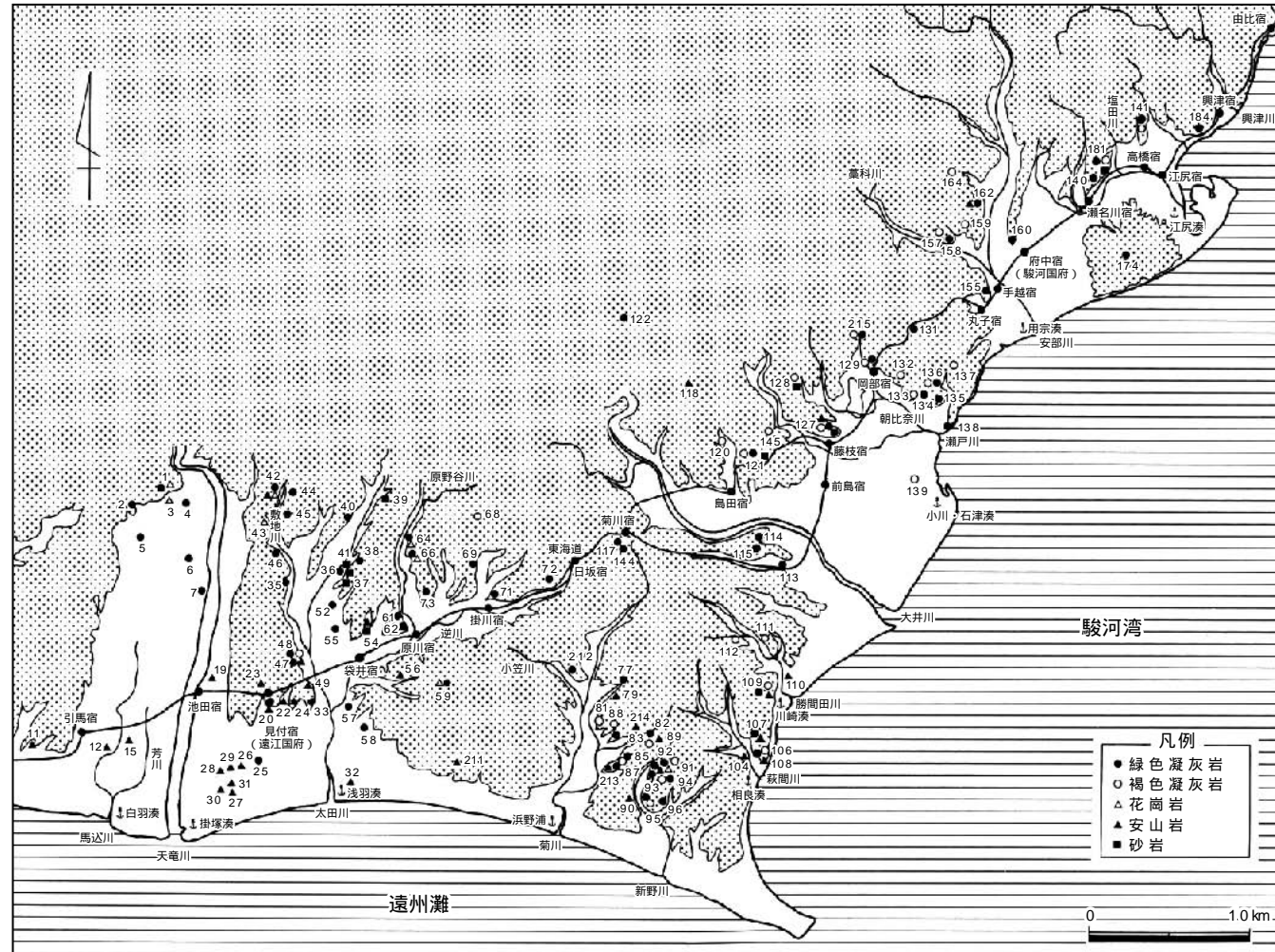
A・B類の空風輪と火輪の接合技法はほぞ穴接合で、A2類のみに水輪と地輪にはほぞ穴接合が確認できた。A1類の火輪以下の接合技法は不明である。

安山岩製品 東伊豆産安山岩製五輪塔はA・B類の2種類の系統が確認できた。

安山岩製五輪塔 A1類は見性寺 1-40・ 41を代表事例として示すと、浅い薬研彫りの梵字が全輪に刻まれ、空風輪は中央の括れが明確に削込まれ、空輪は綺麗な宝珠形となる。火輪の軒面は広く、軒の反り先大きく、高さはさほど高くないで、上端面の幅は広く、下端面は平らとなる。水輪の接合部は広いが球形に見え、地輪は正方形に近いものである。大きさは総高 80cm以下の中型品が主体となる。



第3図 五輪塔編年図 (カッコ内数字は図版番号と一致する)



第4図 五輪塔分布測図 (数字は表番号と一致する)

A 2類は代表事例を智満寺 3-14~ 16に示したように、小型化が進み、線彫りに変化した梵字が全輪に刻まれている。空風輪の形態はA1類からさほど変化はないものが多いが、慶岩寺 147のような縦長となるものもある。火輪は高さは減じるため、軒の反りが大きくなったように見え、水輪も最大径が上半分にあるもの多くなる。地輪は正方形に近いものである。大きさは総高 70cm 以下の中・小型品が主体となる。

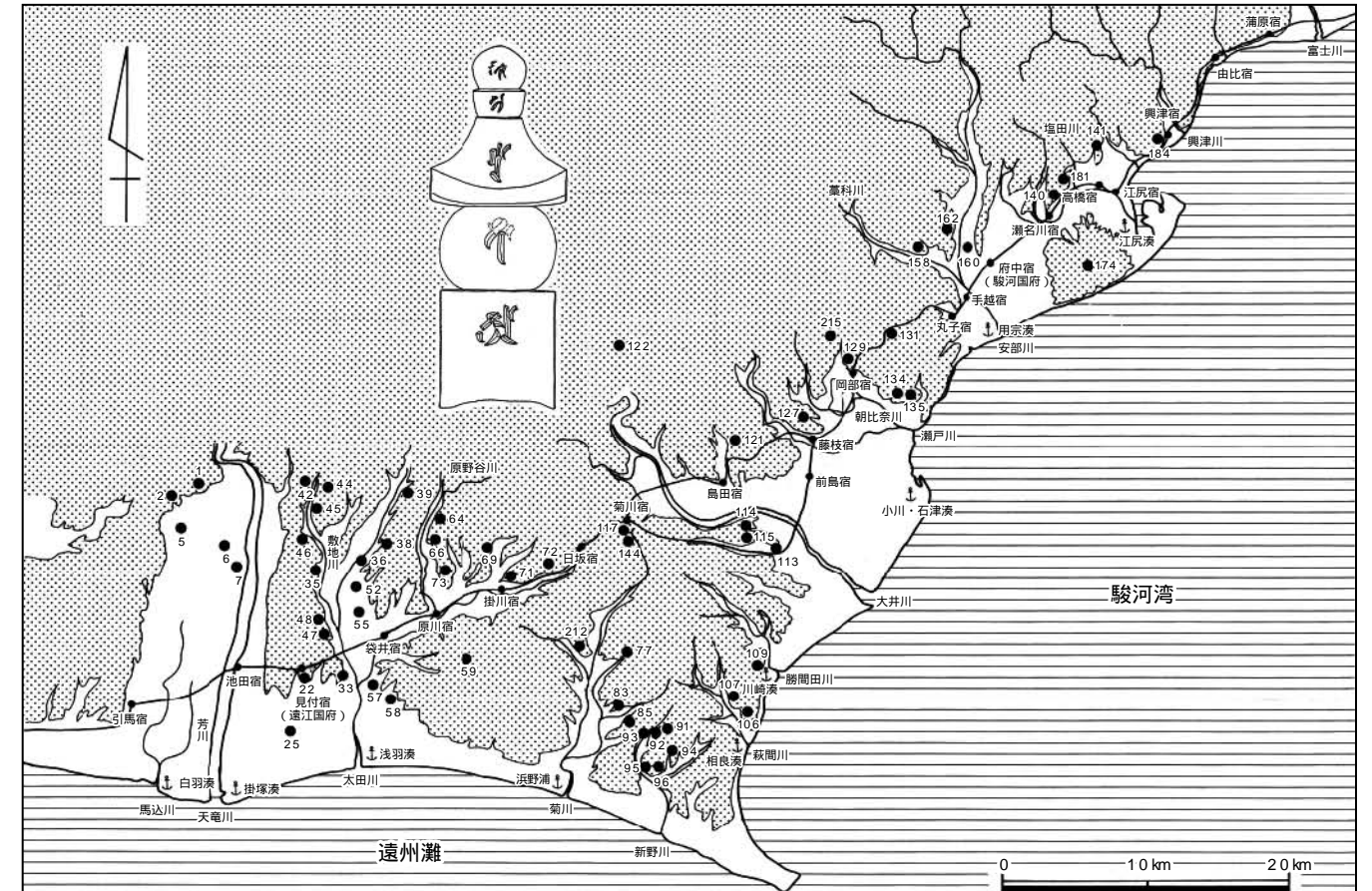
B類は龍雲寺 1-16の事例が1点あるのみである。深い薬研彫りの梵字が水輪のみに刻まれる以外、A 1類と比較するとB類のほうが各部材はシャープな造りで古く見える特徴を示している。大きさは風輪が欠失しているが、復元総高 13mの大型品である。

A・B類の空風輪と火輪の接合技法はほぞ穴接合であるが、火輪と水輪、水輪と地輪にほぞ穴接合が確認できたものはない。

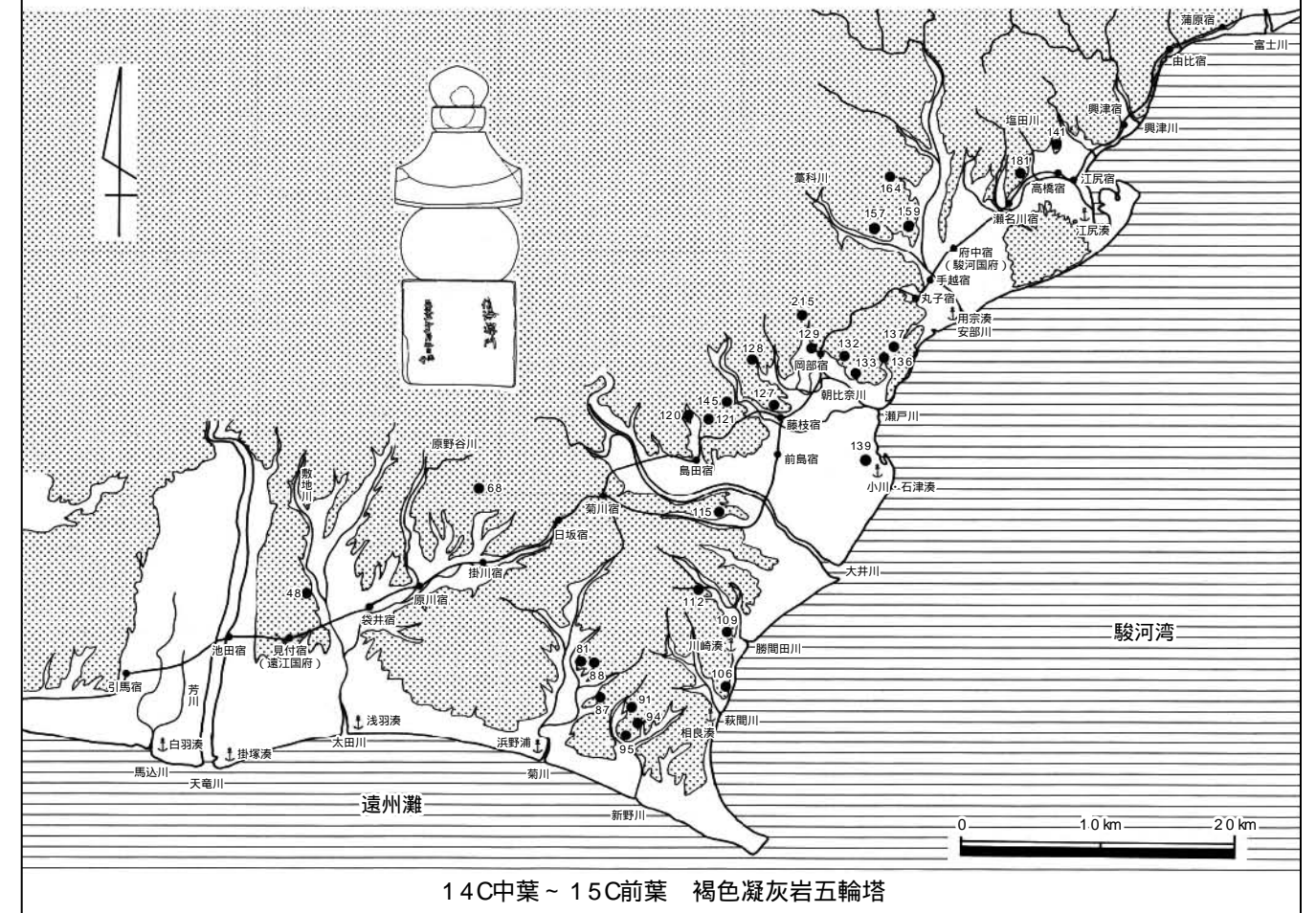
砂岩製品 砂岩製五輪塔A類は全輪に小ぶりの線彫りの梵字が刻まれ、空風輪は縦長で中央の括れが明確に削込まれ、空輪は綺麗な宝珠形となる。火輪の軒面は広く、軒の反りも大きく、高さはあまり高くなく、上端面の幅は広く、下端面は平らで、褐色凝灰岩C類や白色凝灰岩A類の火輪に通ずる特徴を示している。水

輪は接合部は広いが球形に見える。水輪幅は火輪や地輪と比べるとほぼ同じ数値を示すため、バランスは良く見える。地輪は正方形に近いもので、反花座は下半に窓は刻まれず、複弁の花弁は隅で跨ぎ、中央の弁が両脇弁に被らせる畿内でも山城周辺の五輪塔の反花座に近い特徴を示している。第 3図に西楽寺 1-74を代表事例として示したが、周辺の橘逸勢供養塔 1-73 本立寺 1-83 ~ 85などに集中的に分布しているが、面的な広がりはない。石材は明るい緻密な砂岩で東三河産砂岩と類似するが、今のところ東三河で類似品は確認されていない。

砂岩製五輪塔B類は全輪に大ぶりの薬研彫りの梵字が刻まれたものである。空風輪は欠失しているが、火輪の軒面は狭く、軒の反りも大きく高さも高いもので、上端面は然程狭くはないが、下端は湾曲するものである。水輪幅は火輪や地輪と比べるとほぼ同じ数値を示すため、バランスは良く見える。地輪は縦長形態となる。形態や梵字の特徴からは、緑色・褐色凝灰岩製五輪塔B 1類に類似する。石材は遠江東部産と見られる泥岩質砂岩で、第 3図に示した東光寺 3-36の 1例しか知られていないため、分布範囲も不明である。



14C前~中葉 緑色凝灰岩五輪塔



14C中葉~15C前葉 褐色凝灰岩五輪塔

第5図 凝灰岩製五輪塔分布図 (数字は表番号と一致する)

(2) 五輪塔の編年

前項で分類した五輪塔は、各型式組列のもと時期差をもち、変遷していることは明らかであるため、本項ではその編年と年代観についての案を示したい。

花崗岩製五輪塔には紀年銘資料はないので、畿内の五輪塔との平行関係を求めることにより編年したい。A類は縦長な空風輪で空輪が定形的な宝珠形にならないこと、扁平な火輪と地輪、縦長の水輪、深い葉研彫りの大ぶりな梵字の特徴から見ると、京都市神護寺伝文覚上人五輪塔と類似すると見られ、研究 2の段階では13世紀前～中葉の年代を与えてみた。しかしながら、文覚上人五輪塔の年代がはたして上人没年とされる13世紀前葉と確定できるものなのか、何ら根拠があるものではない。つまり、現状では漠然と13世紀代の年代を与えることしかできないが、本号でもA類をあえて13世紀中葉程度には遡るものとしておきたい。

B 1・2類も全くの同形態の紀年銘資料はないが、空輪が綺麗な宝珠形をなし、火輪の高さが高く、軒の反りが大きく、水輪が球形となるもので、最も近い特徴が看守できるのは飯田市文永寺五輪塔(第9図5)である。この五輪塔が納められた石室の天井に弘安6年(1283)の紀年銘が刻まれており、13世紀後葉に位置づけられる。とくに、文永寺五輪塔の水輪の形態は最大径が上半にある球形に近いもので、B 2類と類似する特徴を示すため、B 1類は13世紀後葉の古いところ、B 2類は13世紀後葉の新しいところに位置づけられようか。その後のB 3類は、13世紀末葉～14世紀前葉の中に収まると考えたい。

C類については高野山に存在する町石のなかに花崗岩製の啗合式五輪塔があり、初期町石の整備が文永・弘安年間(1267～1287)であることから、13世紀後～末葉の年代を与えることが可能となっている。ただし、確認事例としては1点しかないので、A・B類との関係は良く分からない。

凝灰岩製五輪塔A・B類の年代も、初期製品に紀年銘資料がないため確実な年代は良く分からないが、全輪大ぶりな葉研彫りの梵字が刻まれること、A 1類の扁平な火輪、B 1類の高い火輪の系譜は、花崗岩製五輪塔A・B類に対応するとも見られる。すなわち、花崗岩製五輪塔が遠江に搬入が終了した後に静岡県で生産の始まったと想定されるならば、14世紀初頭にA 1類とB 1類の生産が始まったと考えたい。ちなみに初期の緑色凝灰岩製品として延慶3年(1310)の紀年銘が刻まれた平田寺の大型宝塔(第6図2-245)があり、良質な緑色凝灰岩を使用するA1・B1類の年代を考えるうえでの参考資料としてきた。しかしながら、宝塔としては特異な形態で他に類を見ないものであり、基礎の格狭間の窓枠が沈線化しているなど新しい要素も見られるため、この宝塔の年代が緑色凝灰岩製五輪塔の初期製品の年代の決手となるかは、今後の検討課題としておきたい。

B 2類は梵字が水輪に限られるなど、B 1類と比較すると明らか

に新しい要素が見られる。B 2類の部材と見られる掛川市観音寺跡2-96に貞和2年(1346)の年号が刻まれていること、B3類の部材と見られる島田市医王寺3-2の梵字が刻まれない緑色凝灰岩製五輪塔の地輪に応永24年(1417)の年号が刻まれていることから見て、B2類を14世紀中～後葉、B3類を15世紀前葉に位置づけておきたい。ほかに、緑色凝灰岩製五輪塔の地輪の中に、鬼岩寺3-83の延文3年(1358)銘、同3-84の明德4年(1357)銘、一乗寺3-219の延文4年銘(1357)銘などがあるが、何れも無梵字の小型五輪塔の部材なので、緑色凝灰岩製大型五輪塔の参考資料になるかどうか分からない。

C 1類の鬼岩寺五輪塔3-55には紀年銘資料がないため確実な年代をいえない。しかしながら、五輪塔基段石から元亨3年(1323)と律宗僧と見られる成真大徳の名前が刻まれた納骨容器が出土した霊山寺1号塔(白色凝灰岩製五輪塔A 1類)との類似点から、14世紀前葉の年代を与えたい。なお、C 1類の全輪無梵字の五輪塔はA・B類とは明らかに系譜の隔たりが大きなもので、各輪の接合技法(本来はほぞ穴結合)は異なるが、西大寺観尊塔を嚆矢とする西大寺律宗系五輪塔の系譜に連なると位置づけた(松井一明2008)。

C 2類の法泉寺2-87の五輪塔には延文5年(1360)、鬼岩寺3-53では応安6年(1373)の紀年銘資料があるため、C 2類は14世紀中～後葉に編年される。C 3類の加納家墓地の五輪塔には寛正5年(1464)、本号報告の十二社神社のB 3類の地輪の中にも寛正3年(1462)の紀年銘資料があること、加納家墓地と類似した梵字が刻まれた偏照寺の大型五輪塔の地輪3-108(第2図45)に応永12年銘(1405)の紀年銘が刻まれていることから、B3類は15世紀前～中葉の時期幅のなかで編年しておきたい。

白色凝灰岩製五輪塔A 1類は、すでに述べたように14世紀前葉に編年ができる。A2類の年代はよく分からないが、小型化や水輪のみに梵字を刻むことが新しい要素ならば、14世紀中葉以降に降らせることも考えたい。B類の3-224は、同じ今井中世墓で出土したB類の地輪3-227に、文保2年(1318)の紀年銘が刻まれ、B類の火輪が花崗岩製五輪塔A類に類似することからも考え合わせると、A 1類に先行する可能性も指摘しうる。しかしながら、小型五輪塔にこの紀年銘から年代を与えるべきか、今後の検討課題としておきたい。

東伊豆産安山岩製五輪塔は、古い型式のA 1類でも総高が小型化していることや、梵字も小型化し葉研彫りも浅いものしか確認できない。この特徴から見ると、東伊豆産安山岩製五輪塔の初期製品である箱根の虎御前墓と呼ばれる永仁3年(1296)銘が刻まれた五輪塔や、修善寺町金剛庵寺の鎌倉極楽寺三世長老善願上人(1326年没)に関係した五輪塔と比較するならば確実に新しい要素で、A 1類は14世紀後葉に編年すべきものと考えている。さらに新しいA2類は15世紀前～中葉に位置づけておきたい。

砂岩製品については、関西系の特徴が見られるA類、緑色凝灰岩B 1類を模倣したと見られるB類があるが、確認数が少ないうえ、紀年銘資料もないためどこに編年したらよいか何ら根拠をもたない。ただし、B類は新式石塔によく見られる遠江東部産の泥岩質の砂岩で、島田市虎御前墓3-2と呼ばれる新式石塔の特徴を持つ大型宝篋印塔が同じ石材を使用しており、B類の五輪塔も15世紀後葉以降の新式石塔が出現する契機となった大型石塔との位置づけが可能ならば、15世紀前～中葉に編年しておきたい。A類についても何ら根拠はないが、B類との関係で15世紀中～前葉に編年しておきたい。しかしながら、当該地域の初期の新式石塔の分析と位置づけによっては、変更を迫られると考えている。

(3) 考 察

以上のように遠江・駿河地域の五輪塔を編年し、年代観を与えたものが、第3図の編年図である。まず、最古式の五輪塔は遠江のみに分布する花崗岩製五輪塔である。さらに最古式なのはA類で永安寺に存在し、付近の蔵平中世墓にもB 2類の五輪塔がある。永安寺と蔵平中世墓は一連の仏教遺跡群と捉えられ、古代においては遠江国分寺の山林寺院である岩室庵寺との関係から考えると、これらの石塔は遠江国府に関係した天台系密教寺院にもたらされと見られる。同様にA・B類が確認できた掛川市の原川中流域の長福寺や照月庵寺なども天台系密教寺院と考えられている。これに対して、高野山系の啗合式五輪塔が発見された法多山や、B 1類の所在する岩水寺は真言密教系寺院である。つまり、畿内と直接関係のありそうな天台宗と真言宗の両方の有力密教系寺院に、花崗岩製五輪塔が存在することが明らかとなったわけである。ただし、遠江に分布する多くの花崗岩製五輪塔は、火輪と水輪、水輪と地輪の接合技法のほとんどは、直接高野山と搬入関係のありそうなC類を除き、ほぞ穴接合にならない特徴がある。これが畿内との13世紀代の花崗岩製五輪塔と合わない特徴になるならば、中間地域の岐阜県や三重県に最近確認されている13世紀代の花崗岩製五輪塔(小野木学、竹田憲治氏らご教示)との比較検討が必要となってきている。この点については後項で検討を深めたい。

緑色・褐色凝灰岩製五輪塔A・B類は、花崗岩製A・B類に類似した点もあるが、B 1類の縦長地輪の特徴は明らかに花崗岩製品からは直接の系譜は追えない。よって、何をモデルにして造られたのかよく分からないが、以前の論考で木製五輪塔との関係を指摘しておいた(松井一明2008)。この点も後項でさらに考察を深めたい。第5図に示した古手のB 1類の分布は、遠江中・西部地域では東海道より北側、遠江東部地域では牧之原台地の菊川流域、西・中駿河では東海道沿いに多数確認できる。特に良品は遠江に多く、有力な密教系寺院が多数存在する遠江側の需要に応えてB 1類が造られたことが分かる。

褐色凝灰岩製五輪塔C類は、県内における律宗系五輪塔の導

入が契機となって出現するもので(松井一明2008)、ほとんど駿河西部地域中心に分布していることが分かる。つまり、駿河の拠点律宗寺院である鬼岩寺で最初に造られたC 1類の律宗系大型五輪塔がモデルとなり、C 2類段階以降になると律宗寺院以外の寺院にも供給されるようになったことが分かる。律宗寺院の全くない遠江にはC 1類の分布がないこと、C 2類以降の供給も少ない点は十分に理解できる状況である。

同じ律宗系五輪塔が契機となって成立した白色凝灰岩製五輪塔も、A 1類段階では霊山寺のような律宗寺院に供給することを目的としていたが、梵字が刻まれたA 2類以降は律宗寺院以外にも供給されたと推測できる。B類は祖形(花崗岩製五輪塔A類との関係は?)が分からないため、伊豆地域での分布範囲や系統内容を見てから結論づけられるものであろう。

東伊豆産安山岩製五輪塔は14世紀後葉以降のものが大半で、宝篋印塔に少し遅れて東伊豆地域から運ばれてきたことが分かる。第8図に示した分布から見ると、遠江では東海道より南の海岸部に近い有力寺院、牧之原台地では菊川流域と駿河湾の海岸部に位置する寺院に見られる。遠江の場合は明らかに海路東伊豆から運ばれてきたことが示されている。さらに、遠江中・西部地域の場合は宿場の湊や遠江国府域に集中し、前者は密教系寺院、後者は時宗に関係した寺院と考えられる。遠江東部地域の駿河湾の海浜部に位置する寺院のうち、清浄寺は遠江国府の在庁官人である勝間田氏が係わる有力時宗寺院で、内陸部の横地氏の係わる三光寺と共に時宗が造塔に関係した事例と見られる。つまり、遠江国府域の有力寺院に東伊豆産安山岩製石塔が搬入されたことから見て、遠江国府の有力寺院が勝間田氏や横地氏など東遠江の在庁官人層を巻き込み、時宗勢力との関係を構築していたことを読取ることができた。

駿河地域では伊豆から近いにもかかわらず、緑色・褐色凝灰岩製石塔の生産地を含むせいか、東伊豆産安山岩製五輪塔は宝篋印塔とともに数少なく分布も限られる。すなわち、島田市智満寺、藤枝市鬼岩寺(律宗以前は天台宗で兼学か)、焼津市吉津墓地や法華寺などの有力天台寺院のみに供給が確認できる。つまり、東伊豆からの安山岩製石塔の搬入からは、遠江西部地域では密教系寺院、遠江国府域と遠江東部地域では時宗勢力、駿河は西部地域の天台宗の勢力が関与していたことが判明したのである。

(松井一明・木村弘之)

4. 宝篋印塔(宝塔・層塔)の編年と分類

遠江・駿河地域における古式宝篋印塔に使用される石材は、褐色(緑色)凝灰岩、東伊豆産・富士川流域産安山岩に3大別され、少量の砂岩製品が認められる。研究3・4でも述べてきた通り石材ごとに宝篋印塔の系統が追えることが判明しているため、本号では宝篋印塔の分類と編年について再整理を行うとともに、造塔年代にも言及し、分布範囲や歴史的背景の考察も試みたい。

(1) 宝篋印塔の分類

凝灰岩製品 石材は基本的には褐色凝灰岩により製作されるが、古手のA類のなかに、緑色凝灰岩を使用するものがある。緑色凝灰岩で製作される五輪塔A・B類とA類、褐色凝灰岩で製作される五輪塔C類とB類が石材のうえでは密接に関係していることが分かる。褐色凝灰岩製宝篋印塔は関東型式になるA・B類と、関西型式の特徴を見出せるC・D類の4系統に分類できた。

A類は高さ15m以上の大型品が主体であるせいか、歴史的人物の由来のある墓塔(供養塔)となっており、分布域や数も限られている。A類の相輪はタガ状の九輪、上下請花が丁寧に彫出され、大型の笠は軒上5段以上、軒下も2段以上となっている。塔身は輪郭の彫込みが見られ、基礎は上部段形が2段以上で、二窓が刻まれている。反花座は別造りの框部に二窓が刻まれ、花卉は縦長に変形している。部材の検討で2細分でき、A1類の笠は軒上6段、軒下も3段、基礎は上部段形が3段となり、反花座の花卉表現は膨らみをもった立体的なもので、第6図に旧浜岡町朝夷三郎墓塔2-223(塔身は推定)を代表事例として示した。A2類はA1類と同形態ではあるが、九輪が沈線に近いものとなり、笠が軒上5段、軒下2段と段が減じ、露盤の窓が省略されるものがある。基礎は上部段形は2段となり、反花座の花卉表現は平坦な形態に変化している。第6図に示した旧本川根町小長井長門守墓塔3-48のほか妙日寺貫名氏墓塔2-60、掛川市宗塔庵伝曾我十郎供養塔2-73が代表事例としてあげられる。A類と同形態となるが、笠の露盤が別造りになる系統があるため、A類と分けて考えてみた。A1類と同形態の古い様相のものをA1類とし、第6図に紀年銘資料の梶原堂3-211・212を示しておいた。ほかに島田市智満寺3-12や旧相良町大聖寺2-240、袋井市正福寺2-20、山梨県旧南部町浄光寺4-258などをあげたい。掛川市長福寺伝曾我五郎供養塔2-70は反花座や露盤などがさらに縦長傾向が進んだもので、これを新しい特徴と認めるとA2類に分類される。

B類は高さ1m以内の中・小型品が主体となるもので、遠江中・東部～駿河地域で最も普遍的に見られる宝篋印塔である。形態から時期差の見られる変遷が辿れ、B1～3類に分類できた。B1類は相輪の九輪が沈線化し、上下請花に花卉が丁寧に彫出され、笠には二窓の露盤が刻まれ、軒上5段、軒下2段、隅飾りの杵が全周する関東型式の特徴をもつ。塔身には梵字はないが輪郭の彫込みが見られ、基礎は上部段形が2段以上で、二窓が刻まれている。反花座の花卉は隅を跨ぐ複弁型式で框部に二窓が刻まれ、基礎と反花座は関東型式の特徴を示している。B2類はやや短くなった九輪で、上部の請花の花卉が省略されたものと、花卉の彫り先沈線化したものが見れる。笠は二窓の露盤が残るものは多いが、軒上4段、軒下2段と段が減り、隅飾りの杵は省略され素面となる。塔身も輪郭の彫込みと基礎の二窓は省略され、反花座の花卉は同形態であるが、花卉表現も線彫りに近く平坦化が進んだもの

となり、框部の二窓も省略される。B3類はさらに短くなった九輪で輪の数も減少し、省略されるものすら現れ、上下部ともに請花の花卉表現は省略される。笠の露盤の二窓も省略され、軒上3段になるものも出現する。塔身、基礎、反花座の窓枠は全て省略され、反花座の花卉も省略されるものが見れる。第6図にB1類は静岡市安養寺4-30・34、B2類は焼津市横添墓地3-141、B3類はセツを示せる良好な資料はないが藤枝市鬼岩寺や徧照寺の部材である相輪3-86、笠3-88、塔身3-92、基礎3-121、反花座3-87を組合わせて示しておいた。

C・D類は基礎と笠に関西型式の特徴を見出すことのできるもので、基礎に反花のあるものをC類、階段式になるものをD類とした。C・D類ともに全ての部材が確認される事例は少ないが、C1類として第6図に示した鬼岩寺3-87は、沈線化した九輪はB2類と共通する特徴となるが、笠は露盤の二窓がなく、隅飾りの杵が軒に接しないこと、基礎の狭座間は省略されるが、一窓型式で隅を跨ぐ立体的な複弁の花卉が刻まれたものは関西型式の特徴を示す。C2類になると鬼岩寺3-94の部材に示したように、笠はB3類と何ら変わらない隅飾りが素面となっており、基礎の花卉表現も単弁と省略化が進んだものとなっている。確実なC類はこの2点しかないが、C2類に含まれる事例と見られる智満寺3-10・11の基礎にはかなり退化・変形した反花が刻まれ、10のように笠の露盤に二窓はなく隅飾りに二段の切込みがあり、基礎の狭座間の中央に開蓮華のある関西型式のうち近江式の特徴を示すものがある。さらに、砂岩製品で藤枝市駿河大納言墓塔4-12の笠にも同じ特徴を見出すことができ、砂岩製品にも影響を与えていることが分かる事例である。

D類は第6図に示した島田市谷畑塔3-49のような、隅飾りは素面となる笠ではあるが、露盤の二窓のない軒上4～5段となるもので、狭座間が省略された一窓で階段式になる基礎がある。ただし、静岡市道白平奥ノ院5-37のように笠は関西型式であるが、基礎と反花座は関東型式となるD類の範疇に属さないものがある。同様に大型品であるが静岡市松野阿弥陀堂4-96のように笠は露盤の二窓がなく、隅飾りの下端の杵がない関西型式の特徴を示すのに、反花座は框部の二窓は省略され、沈線化した複弁で隅を跨ぐ花卉表現となる新しい要素の見られる関東型式の特徴を示す反花座を組合せたものがあり、D類に含まれるのか、道白平のタイプになるかは分からない。ほかにはD類として旧浜岡町石切様2-238、旧相良町笠名庚申塔2-222があげられる程度である。

緑色凝灰岩製宝塔としては平田寺宝塔2-245の1点のみが確認できる。笠は軒面と上端面が広い褐色凝灰岩製五輪塔C類の巨大化した火輪に見える。塔身は通常の宝塔が筒状をなすのに対して方柱状をなし、二仏の光背を表現すると見られる火灯窓の表現が見られる。前項で検討した通り延慶3年(1310)の紀年銘が刻まれた関西型式の狭座間には、新しい傾向を讀取ることができた。

東伊豆産安山岩製品 関東型式の典型例となるもので、A・B類

の2系統が確認できた。A類は高さ1m前後の中型品、B類は高さ1.5m前後はありそうな大型品である。A類は時期差のある形態変化からA1～4類に分類できたが、B類の詳細は不明である。

A1類は相輪の九輪が沈線化し、上下請花に間弁の入る花卉が丁寧に彫出され、笠には二窓の露盤が刻まれ、軒上5段、軒下2段、隅飾りの杵は全周し軒と接しない関東型式の特徴をもつ。塔身には線彫りに近い梵字が刻まれた輪郭の彫込みが見られ、基礎は上部段形が2段で、框部に二窓が刻まれている。反花座の花卉は肉厚で隅を跨ぐ複弁型式で、框部に二窓が刻まれている。A2類はA1類と比較しても笠、塔身、基礎にさほどの変化は讀取れないが、反花座の花卉の表現は平坦化が見られるようになる。A3類となると相輪の九輪は短くなり、反花座の花卉表現もさらに平坦化が進行し、沈線で花卉を表現するようになる。A4類になると、相輪の九輪の本数が少なくなり、上下請花の花卉表現がなくなり、笠も隅飾りの杵が消失し、軒面と一体化する新式石塔に通じる形態に変化する。第6図に示したA1類の旧菊川町三光寺2-115は組合わせが明らかな事例で、旧榛原町清浄寺2-262～266に紀年銘資料を含むA1類の良好な資料が残される。これら三光寺、清浄寺のほか旧榛原町では鈎学院2-273、大井家墓地2-280のなかに「阿弥陀仏」と刻まれた時宗信徒に対する仏号が見られ、時宗との関係から造塔された石塔群であることは間違いない。第6図にA2類としては旧浜松市本光寺1-22、大型品の旧豊田町行興寺熊野御前塔5-43、A3類は紀年銘のある旧豊田町妙法寺1-33のほか大型品の行興寺熊野御前母塔5-42、A4類は良好な組合せの分かるものはないが、吉津墓地などで確認された相輪の3-168、笠の3-176、塔身3-181を示しておいた。

B類は笠が1点しか確認できていないが、掛川市観音堂2-98の笠の露盤に二窓はないが、小さな隅飾り先素面で、軒上6段、軒下3段、下端面に塔身を受ける凹み面があり、明らかに褐色凝灰岩製宝篋印塔A類と共通する特徴が見出せる。

東伊豆産安山岩製品のなかにも遠江で宝塔や層塔が確認できるので、ここで紹介しておきたい。磐田市西光寺宝塔1-42は鎌倉佐介ヶ谷やくら出土の嘉暦2年(1327)宝塔(鎌倉国宝館他1980)との比較から、本間岳人氏が指摘するように14世紀中葉に比定しておきたい(本間岳人1998)。浜北市自徳院層塔1-13は2層分の笠と、塔身、基礎が残るのみであるが十三重塔であった可能性が高い。箱根の糞の河原所在の正和3年(1314)銘の層塔と比較すると狭座間が省略される点から、14世紀中葉頃の時期になるものであろうか。

富士川流域産安山岩製品 笠は関西型式、塔身以下は関東型式の特徴をもつ特異な系譜の宝篋印塔で、大型品も少量存在するが、1m以内の中・小型品が主体である。基礎の形態でA・B類の2系統に、さらにA類は1～3類に細分類できた。

A1類の相輪の九輪は沈線化しており、上下請花に花卉が肉彫

りされており、笠は縦長の露盤に二窓が刻まれ、軒上5～7段、軒下2段、隅飾りの杵取りの下端は設けない特徴のみに関西型式の特徴が見出せる。塔身には窓枠のある線彫りに近い梵字が刻まれ、基礎には二窓のが刻まれた上二段の階段式、反花座は框部に二窓のあるものもないものがあり、平坦化の見られる隅を跨ぐ複弁の花卉が刻まれる関東型式の特徴が見出される。A2類になると上下請花の花卉表現は沈線化し、笠は露盤の二窓は残すが、隅飾りの窓枠を残しつつも軒面と一体化し、軒上4～5段に変化し、塔身の窓枠は残すが梵字が省略されたものが増加する。基礎も二窓を残すが、扁平化が進むようで、反花座の花卉表現は沈線化したものとなる。A3類となると、相輪の九輪の本数は少なくなり、請花の花卉表現が省略するものが見れ、塔身、基礎とも窓枠は残すが、横長傾向がさらに進む。反花座の花卉表現も省略されている。A1類は旧清水市穴原阿弥陀堂4-174が組合せの分かる好例であるが、形態の分かり易い相輪4-214、笠4-227、塔身4-177、基礎4-250、反花座4-81の組合せを典型事例とし第6図に示した。数は少ないと見られるが、大型品として山梨県側の建忠廃寺4-262～265も存在している。A2類は旧富士川町円通寺4-244が組合せの明らかなもので、A3類は紀年銘資料となる山梨県旧南部町正行寺4-220・251などの部材を示しておいた。

B類としては1点のみであるが、旧由比町西山寺4-209の基礎に線彫りの一窓に狭座間の刻まれたものが存在する。

砂岩製品 砂岩製品は、西濃地域からの搬入品である硬質砂岩(河戸石)製品と、駿河中・西部産砂岩(A・D類)製品の2系統の宝篋印塔が確認できた。

第6図の1-24に示した遠江のかなきんさま塔は、相輪の請花の花卉表現や、笠の露盤の二窓はなく、隅飾りの窓枠特徴、反花をもつ基礎は典型的な関西型式の特徴を示すものである。隅飾りの傾きと、基礎の肉厚な花卉表現に古い傾向を讀取ることができる。

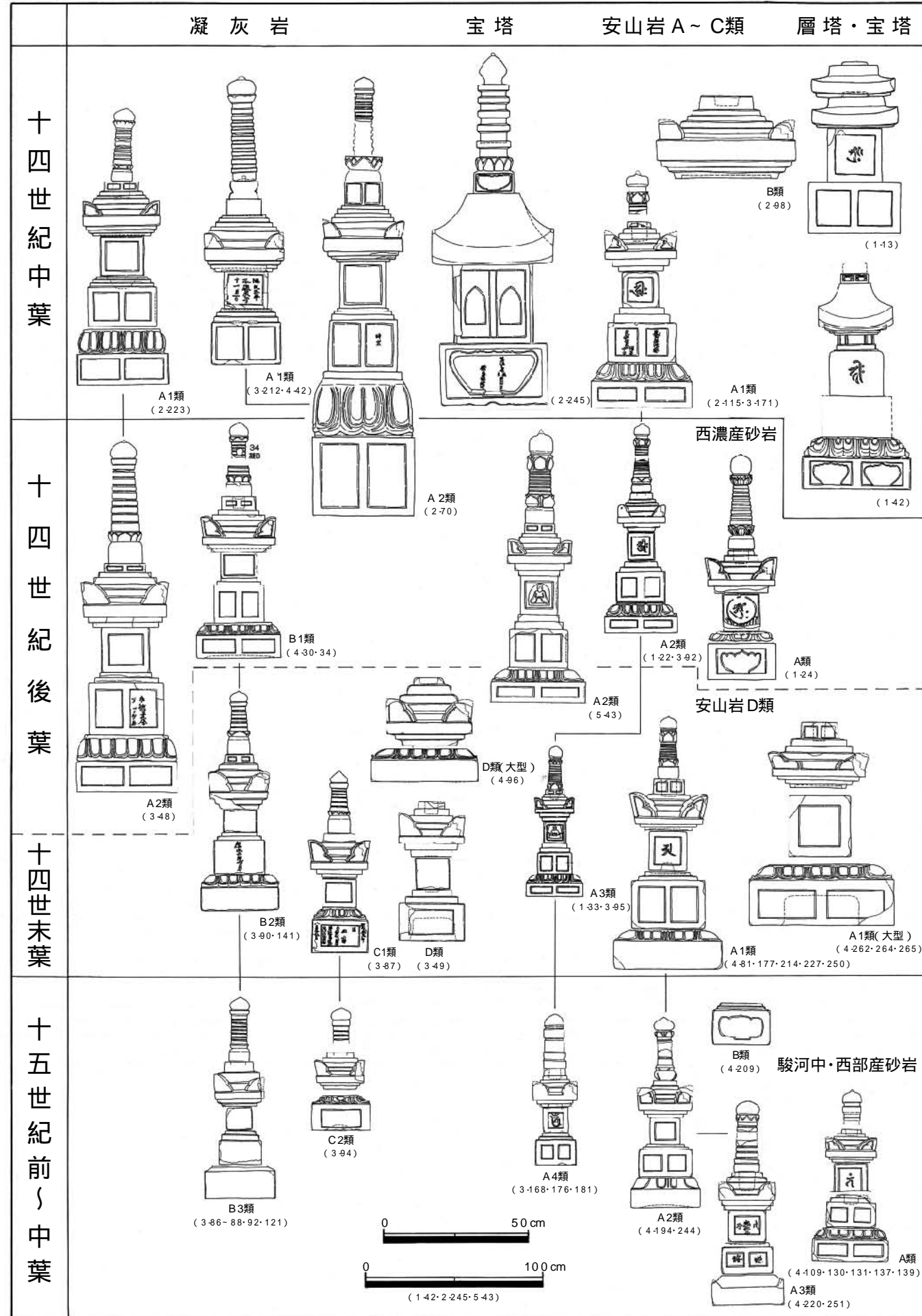
砂岩A・D類のなかに笠は関西型式、塔身～反花座が関東型式になる富士川流域安山岩製宝篋印塔を模倣したような一群の宝篋印塔が存在する。相輪4-137、笠4-109、塔身4-139、基礎4-131、反花座4-130の組合せを典型例として図示したが、数は少なく分布も駿河中・西部の一部地域に限られるようだ。

池宮神社2-226は凝灰岩と砂岩製品を組合わせた層塔で、2層分の笠と反花座が残されている。石材から見ると産地不明で、時期も不明と言わざるをえないが、反花座に花卉表現がないものであるため、14世紀中葉以前に遡るものとは思えない。

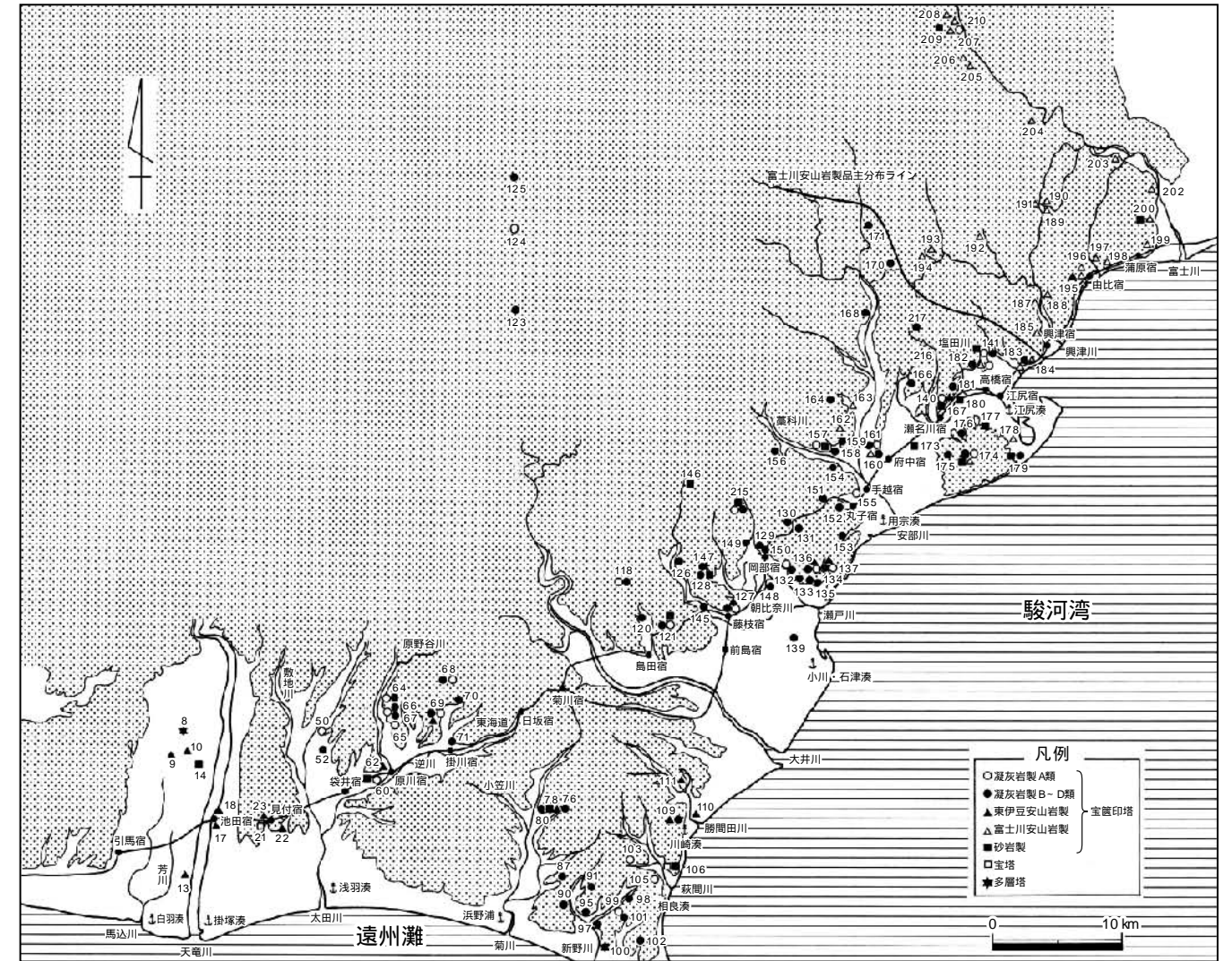
(2) 宝篋印塔の編年

前項で各石材ごとに分類し系統を明らかにできたので、第6図に編年案を示してみた。

褐色凝灰岩製宝篋印塔は大型のA類が最も古く、B類の中・小型品が後続するものと見られる。最も古いA1類(A1類)は梶原堂3-221・222に延文5年(1360)の紀年銘があるため14世紀中



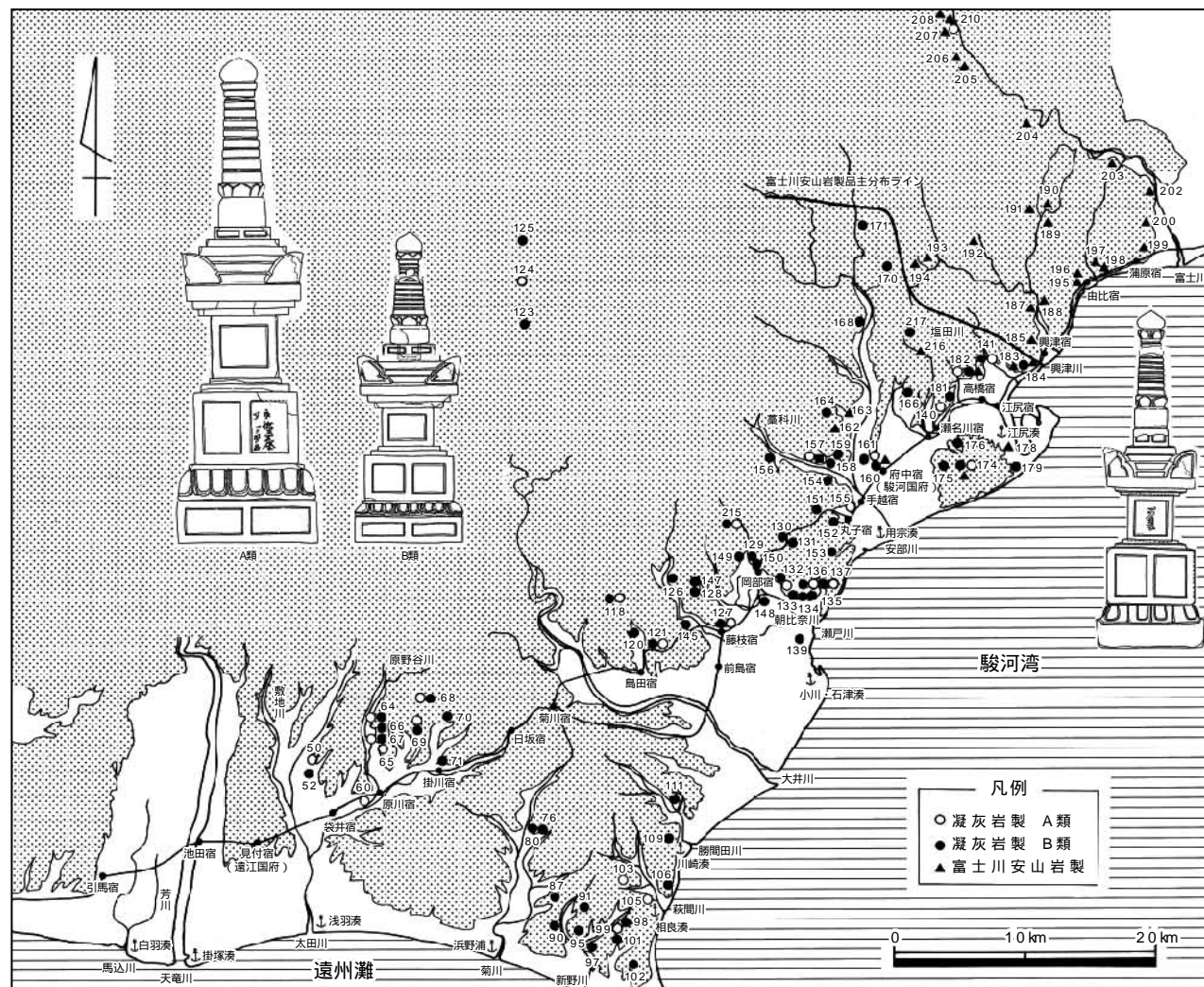
第6図 宝篋印塔(宝塔・多層塔)編年図 (カッコ内数字は図版番号と一致する)



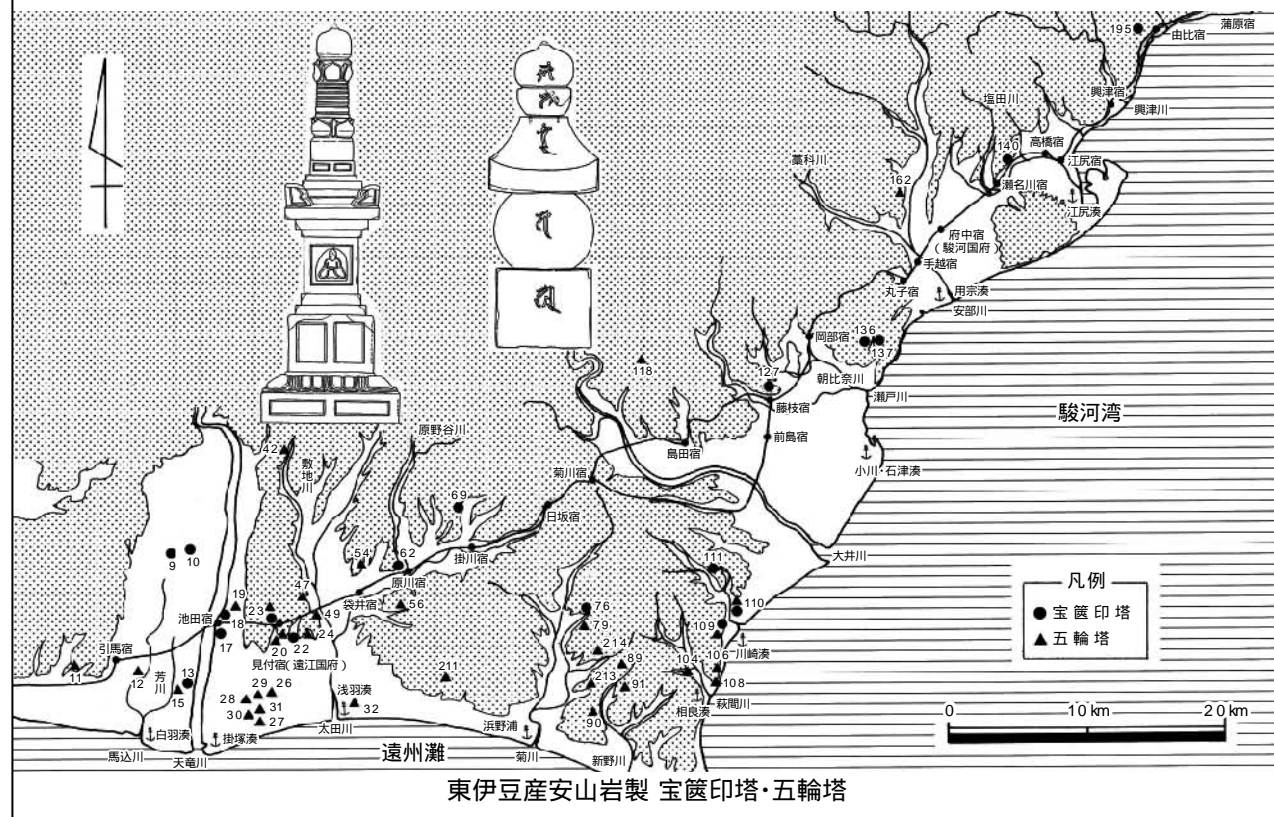
第7図 宝篋印塔分布測図 (数字は表番号と一致する)

葉、A 2類の長福寺曾我五郎供養塔 3-70は反花座の形骸化から14世紀後葉の古い時期には降るとしておきたい。A 2類は小長井長門守供養塔 3-48に永徳 3年(1382)の紀年銘があり、A 2類を14世紀後～末葉に編年する根拠としたい。A 1類は関東型式の特徴をもつもので、先行する東伊豆産安山岩製宝篋印塔B類を模倣して製作されたことはほぼ間違いないであろう。軒上6段以上となる笠は伊豆の旧葦山町観音堂などでも部材が確認でき、B類は数少ないが伊豆地域にも確実に存在している。さらに、より古い律宗系宝篋印塔とも呼べる嘉元 2年(1304)の紀年銘が刻まれた神奈川県大井町余見塔(第9図 11)などから派生して東伊豆産安山岩製宝篋印塔B類が製作されたと推測しておきたい。褐色凝灰岩製宝篋印塔B 1類の特徴も関東型式を示し、東伊豆産安山岩製宝篋印塔A 1類を模倣して製作されたことは間違いないだろう。B 1類は三光寺基礎 2-115に応安 6年(1183)、徧照寺基礎 3-119に永徳 3年(1383)、正福寺基礎 2-234に至徳元年(1183)の紀年銘が確認できることから14世紀後葉に該当させておきたい。B 2類は横添墓地 3-141に永徳 2年(1394)、吉津墓地

基礎 3-169に永徳 6年(1399)の紀年銘の存在から14世紀末葉、B 3類は紀年銘資料を欠くが、15世紀前葉の時期を与えておきたい。褐色凝灰岩製宝篋印塔C類は省略が著しい関西型式の特徴を示すが、鬼谷寺基礎 3-85・87に永徳元年(1381)と応永元年(1394)の紀年銘資料があるため14世紀後～末葉、その後のC 2類は15世紀前葉に編年しておきたい。D類にも笠名庚申塔 3-238に永徳 5年(1398)の紀年銘が知られているため、C 1類と同様に14世紀後～末葉に編年しておきたい。東伊豆産安山岩製宝篋印塔A 1類には清浄寺基礎 2-262と2-262に観応 2年(1351)と文和 3年(1354)、釣学院基礎 2-273に文和 3年、三光寺基礎 2-115に文和 4年(1355)の14世紀中葉に集中する紀年銘資料が知られているので、14世紀中葉に編年できる。A 2類は紀年銘資料を欠くが、A 3類の妙法寺塔 1-33に永徳年間(1394~1427)が確認できるので、A 2類を14世紀後葉、A 3類を14世紀末葉～15世紀初頭、その後に編年できるA 4類は15世紀前～中葉に編年することが可能であろう。富士川流域産安山岩製宝篋印塔A 1類は、笠の隅飾りのみが



凝灰岩製・富士川産安山岩製 宝篋印塔



東伊豆産安山岩製 宝篋印塔・五輪塔

第8図 宝篋印塔・東伊豆産安山岩製 五輪塔分布図 (数字は表番号と一致する)

関西型式、塔身以下が関東型式となる特異な形態で、紀年銘資料がないため時期の決定ができない。縦長の露盤の形態から見ると褐色凝灰岩製宝篋印塔A2類、框部に二窓が刻まれ、平坦化が見られる複弁の花弁が隅を跨いでいる反花座からは東伊豆産安山岩製宝篋印塔A2類や、褐色凝灰岩製宝篋印塔B1類からの模倣とも見られる。笠の隅飾りの形態から見るとハケ岳産安山岩製品としては初期作品である観応3年(1352)の紀年銘がある棲雲寺(第9図12)の開山塔の笠と共通する特徴があるため、複数の塔からの模倣で成立していると考えられる。笠の隅飾り形態と関東型式の基礎・反花座の組み合わせを重視すると、ハケ岳系安山岩製宝篋印塔と共通する山梨タイプの宝篋印塔の一種とも見られる。このような特徴から見ると、14世紀後半～末葉の時期にA1類を編年しておくのが妥当だろう。A2類も紀年銘資料を欠くが、A3類は西山寺基礎4247に康正3年(1457)と、正行寺塔身4251・252に応仁2年(1468)の紀年銘資料があるため15世紀中葉に編年できるので、A2類には15世紀前葉の製作年代が与えられる。

砂岩製のうちなきさま塔は、恵那市染戸石塔群の永徳4年(1393)銘の硬質砂岩(河戸石)製宝篋印塔と比較すると、基礎の反花座の表現がうちなきさま塔のほうが退化していないこと、14世紀後半に編年される紀年銘資料が西濃にも存在している(小野木学氏ご教示)ため、14世紀後半の時期としておきたい。砂岩A・D類製宝篋印塔は富士川流域産安山岩製宝篋印塔A1類を忠実に模倣しているものが多いため、14世紀末葉以降の時期は確実であるが、前項でも述べた在産砂岩製大型五輪塔の成立時期と同じ15世紀前～中葉の時期に降らせることもできようか。

(3) 考察

本項では3種類の石材別に編年できた宝篋印塔ごとの分布の傾向と、歴史的背景の一端の考察を進めたい。なお、宝篋印塔の石材ごとの分布は第7～9図を参照されたい。

褐色凝灰岩製宝篋印塔A・B類は原産地である焼津・旧岡部町にまたがる高草山を中心に西は袋井市、東は興津川まで主体的に分布しており、とくに数の多いB類は面的な広がりで分布することが判明した。A類は数が少ない特注品が多いせいかわ、分布に偏在傾向が認められる。すなわち、太田川東岸の袋井市正福寺を西限として、遠江では原川中流域の袋井市妙日寺、掛川市長福寺と関連寺院である照月寺や宗塔庵跡(地域1)、倉見川上流域である掛川市法泉寺や観音寺跡(地域2)、駿河湾に近い遠江東部の旧浜岡町朝夷氏墓、旧相良町大聖寺と正福寺(地域3)である。駿河では島田市智満寺と東光寺(地域4)、藤枝市鬼岩寺と旧岡部町十輪寺から焼津市法華寺と吉津墓地(地域5)、静岡市域の泉秀寺、龍津寺、瑞龍寺、平沢寺(地域6)、旧清水市梶原堂と一乗寺(地域7)、山間に孤立するが大井川上流域の小長井長門守、富士川流域の山梨県旧南部町浄光寺(地域8)があげられる。この分布傾向からは、まず指摘できるのは地域1・4・

5に有力な天台系密教寺院が存在する点である。地域6には駿河国府周辺の有力寺院(天台宗?)や有力な真言密教系寺院である建徳寺の周辺に集中し、地域7・8においては庵原氏、小長井氏、南部氏などの有力国人層の菩提寺に造塔されたと考えられる。つまり、時期が先行するA類の天台系密教寺院を軸に造塔が行われ、平行して各地の有力な真言密教系寺院をも含めて造塔活動が拠点的に進められていったことが看取される。

B類はA類の造塔による布教活動の後を追うように、面的な広がりを示す。B類は14世紀中葉から搬入される東伊豆産安山岩製宝篋印塔A1類と同様に、中・小型品が主体になる。東伊豆産安山岩製宝篋印塔A1類は、三光寺横地氏墓塔群や清浄寺勝間田氏墓塔群のように一族墓の様相を呈するものが多いことから、14世紀中葉から一族墓を構成する有力国人層に対する供養塔とすることを目的として搬入された可能性が高いと思われる。続いて一族墓を導入する国人層の増加に伴って、14世紀後半以降、遠江東部～駿河中部地域を中心に、褐色凝灰岩製宝篋印塔B1類、14世紀末葉になると興津川以東でも富士川流域産安山岩製宝篋印塔A1類がこの地域での一族墓の成立と共に造塔され始めたと考えたい。さらに富士川流域産安山岩製宝篋印塔A1類は、褐色凝灰岩製宝篋印塔A2類、東伊豆産安山岩A2類、山梨県のハケ岳系安山岩製宝篋印塔といった複数の特徴が組合わされ成立していることを動案すると、従来考えられる関東型式や関西型式といった単純な分類でこの地域の宝篋印塔は理解できないのではないだろうか。つまり、定義されている関東型式の宝篋印塔は、鎌倉で造塔活動が一時的に認められた余見塔などの律宗系宝篋印塔と、その後の系譜に連なる相模～伊豆地域に分布する東伊豆産安山岩製宝篋印塔A類に対して相模タイプとても命名されるべきであることを指摘しておきたい。

遠江地域での東伊豆産安山岩製宝篋印塔の搬入状況は、遠江国府域や池田宿の行興寺、遠江東部では勝間田氏の清浄寺や横地氏の三光寺といった遠江国府の在庁官人層の菩提寺に認められる点に特徴がある。こうした寺院は有力な時宗寺院であり、遠江国守護である北条得宗家の一族である大仏氏が、遠江国府を中心に時宗寺院を保護育成したことを物語る石塔群といえ、遠江を中心として優品である東伊豆産安山岩製の宝塔や層塔が認められる存在理由もうなずける。これに対してより伊豆に近いはずの駿河中部地域ではほとんど東伊豆産安山岩製宝篋印塔の分布は認められず、駿河西部地域では藤枝市鬼岩寺、焼津市法華寺と吉津墓地といった天台系密教寺院に集中的に見られ、褐色凝灰岩製宝篋印塔A類とともに、駿河西部地域での天台系密教寺院の教線の拡大状況を知ることができた。

このように、遠江・駿河地域で認められた宝篋印塔の様相は複雑なものがあるが、概ね系統論から各石材の宝篋印塔の成立や搬入状況は明らかにし得たと思われる。さらに、中・小型宝篋印

塔からは一族墓に石塔が導入される状況を解明できる可能性を指摘したが、とくに遠江・駿河地域では五輪塔よりも先行して宝篋印塔がなぜ採用されたのか大きな疑問点として残った。今後の検討課題としておきたい。

(溝口彰啓)

5. 遠江・駿河地域の中世石塔の出現と展開 (古式石塔のモデルとコピー)

今回の一連の研究の目的は古式石塔の資料を公開すること、考古学の最も基本的な方法である分類と編年を行うことにより、その歴史的背景に迫ろうと言うものであった。その中で一番の問題点として浮かび上がってきたことは、石塔が製作されるにあたって何を規範としたかを解明すること、すなわち考古学の分野で言うモデルとコピーの関係を石塔でも証明することである。紙面の都合もあるため五輪塔では花崗岩製品、緑色凝灰岩製五輪塔A1・B1類の成立の問題、宝篋印塔での凝灰岩製品と安山岩製品の関係について考察を行い、最終のまとめとしたい。

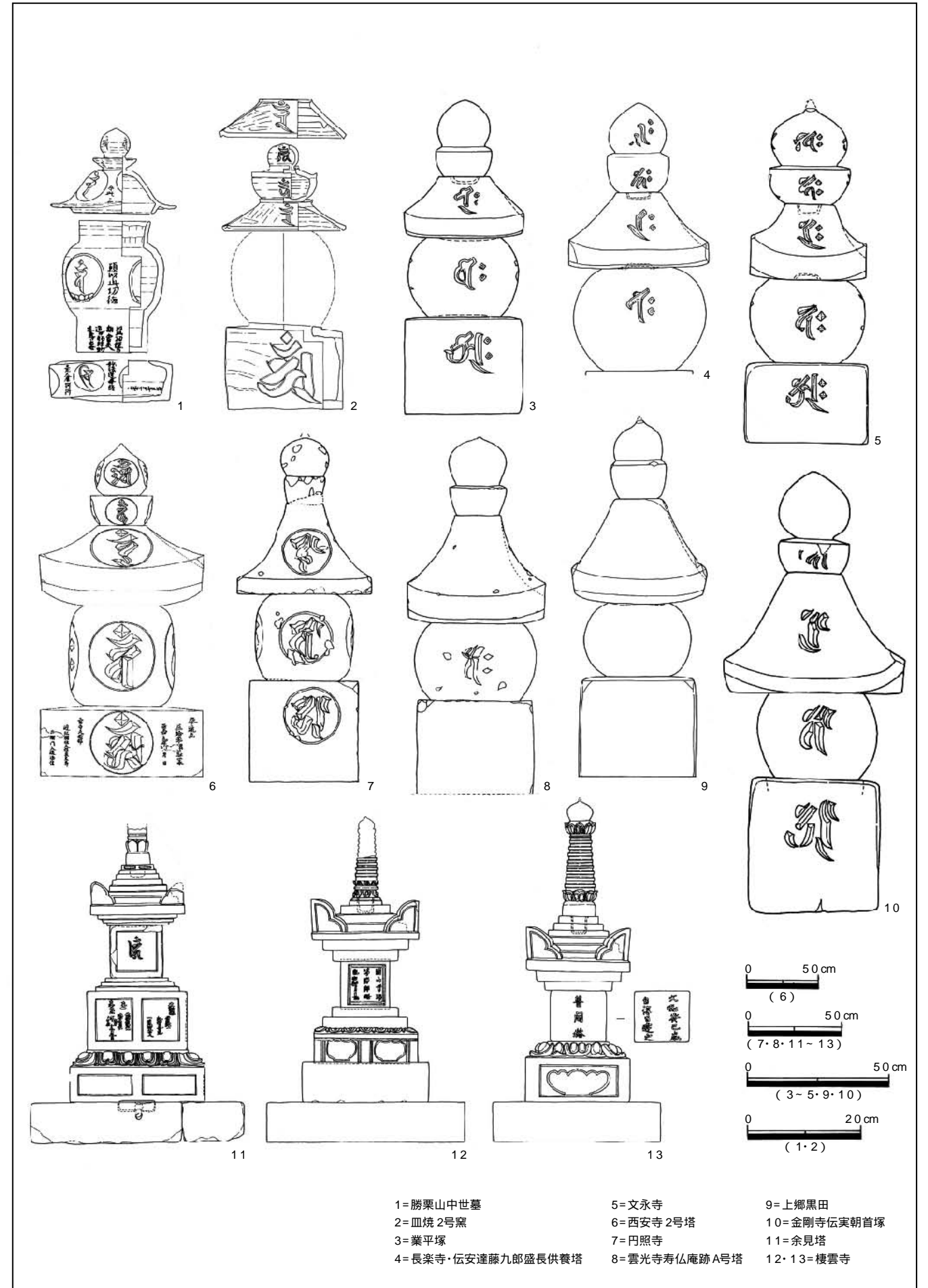
まず、県内最古式の花崗岩製五輪塔A類のモデルとして、石造塔以外の参考資料として第9図1の久安2年(1146)の紀年銘が陰刻された勝栗山中世墓と、2の12世紀末葉(渥美・湖西山茶碗期)操業の皿焼2号窯から出土した陶製五輪塔形経筒外容器(舍利容器)を示しておきたい。空風輪はどちらも風輪と比べると小さな空輪が綺麗な宝珠形となるので、空輪の特徴だけから見るとB類に近い形態である。1の火輪は丸形で天井が上方に湾曲する石造塔には見られない特徴もつ。反対に2の火輪は四角の扁平な形態で、狭い軒面をもち、軒は小さく反るため、A類に類似した特徴をもつ。1の水輪はほぞ穴結合につながりそうなソケット状になる接合技法で、水輪幅の狭い縦長形態となるため、接合技法は別とすると、形態はA類やB1類の水輪と似ている。2の地輪の接合部の穴と、火輪内部に1と同様な受部となる突帯のあるものが見られるため、1と似たような形態の水輪をもつと推測される。1の地輪はかなり扁平なもので、2をやや高さは増すが扁平なものといえ、1・2の地輪は静岡県の永安寺塔や畿内の文覚上人塔に近い特徴を示している。このように1・2の特徴からは石造五輪塔のA・B類に通ずる特徴が見出されたため、こうした遺品と同形態の石造や木造五輪塔が12世紀代にすでに存在し、石造五輪塔であるA・B類が造られた可能性はあると見たい。

遠江の花崗岩製五輪塔のA～C類の内、東海全域を見渡すとC類は確認できないが、愛知・岐阜・三重県にはA・B類が存在することが判明した(竹田憲治、小野木学、野澤則幸ら各氏のご教示による)。愛知・長野県のものをご代表事例として、第9図に3の東海市業平塚五輪塔、4の蒲郡市長楽寺伝安達藤九郎盛長供養塔、5の飯田市文永寺五輪塔の3基を示した。一別して分かるとおり、3・4はA類、5はB2類である。ただし、4と5の火輪と水輪の接合技法は明らかにほぞ穴接合であるのに対して、3は地輪

と火輪の接合を含めてもほぞ穴接合にはならない。前者は畿内的で遠江のA・B類とは異なる接合技法が採用され、反対に後者と遠江のA・B類は関連すると見られる。ちなみに、文永寺五輪塔が納められた石室の天井には弘安6年(1283)の紀年銘と共に伊派に連なる人物とも目されている南都石大工菅原行長の名前が見え、奈良からの石大工が直接招かれ製作したことが判明している。つまり、接合技法から畿内色の強弱が見え、ひいては畿内から直接石大工が派遣されて製作された石塔か、畿内からの搬入品かどうか解明できることを指摘しよう。東海地域で実見した範囲では後者のほぞ穴結合をもたないものがA・B類の主流になるように見受けられるので、静岡県の五輪塔A・B類は東海地域からの、D類は高野山周辺部からの搬入品となるのであろう。しかしながら、すでに比較資料とした京都市神護寺文覚上人供養塔のほか、畿内の古式石造五輪塔の火輪と水輪の接合技法が、はたしてすべてほぞ穴接合になるかどうか証明の前提条件となる。

つぎに、緑色凝灰岩製五輪塔A1・B1類の類品をあたってみよう。A1類の類品は隣接地にはないため、第9図6に示した熊本県玉東町西安寺2号塔を俎上にあげ検討したい。2号塔は正嘉元年(1257)の紀年銘が刻まれた阿蘇安山岩製大型五輪塔で、肥後型五輪塔の祖形と位置づけられている(狭川真一2008)。空輪が綺麗な宝珠形、火輪は扁平な形態で下端面が湾曲し、火・地輪と比べるとかなり幅の狭い杏形の水輪、扁平な地輪の形態はA1類と共通する特徴として看取できるが、空風輪はほぞ穴接合となっている。2号塔の銘文に刻まれた山北相良氏は、遠江相良荘から九州に移住した所謂西遷地頭で、西安寺塔と相良氏の本拠地である緑色凝灰岩の初期製品と目されている旧相良町平田寺宝塔との関係も指摘しようが、平田寺塔と同じ特徴をもつ宝塔は相良氏の支配した熊本県側の領域には存在しないため証明のしようがない。2号塔の紀年銘をそのまま信用できるかどうかの問題はあるが、少なくとも2号塔が製作された13世紀後～末葉以前に、1号塔を生み出したモデルの五輪塔が熊本県には存在していたのは確かなことであろう。つまり、A1類もこのモデルの五輪塔を参考にして製作されたのではないかと推測されるのであるが、それが山北相良氏の関係者によって当地域にもたらされた確証はない。

緑色凝灰岩製五輪塔B1類は、山梨地域の13世紀代と報告されている凝灰岩製五輪塔のなかに多数あり、B1類の特徴と合致する第9図7の円照寺塔、B2類の特徴をもつ8の雲光寺寿仏庵跡A号塔を代表事例としてあげたい。また、花崗岩製ではあるが長野県飯田市上郷黒田五輪塔も俎上にあげておきたい。何れも空輪が綺麗な宝珠形をなし、火輪は高さが高く、軒面が狭く、下端面が湾曲し、球形に近い水輪、地輪も縦長のものが主体となつたままにB1類と共通する特徴を示している。ただし、7の火輪の下端面は水平で、水輪もA1類に近い幅の狭い杏形をなしていることと、第9図9の接合技法は全てほぞ穴接合にはならないが、7・8は空



第9図 関連石塔実測図

風輪がほぞ穴結合となる以外はほぞ穴接合にはならないようである。つまり、7～9は接合技法で異なる特徴もあるが、おおむね同一のモデルから製作されたと考えられるのである。第9図10の鎌倉国宝館に所蔵されている金剛寺の木製五輪塔の特徴と比較すると、火輪幅が最大になる点以外は、それぞれの輪の形態の特徴、大ぶりの梵字が全輪刻まれる点はB1類と共通する特徴である。10の木製五輪塔がB1類や7～9に先行して13世紀代に製作されたものと言えるならば、このモデルで静岡県、山梨県、長野県飯田市の五輪塔が製作されたことは容易に想定できるであろう。さらに火輪幅が最大になる五輪塔は、実見した範囲では神奈川県や埼玉県にまで見られるため、10のタイプの五輪塔が関東地域において律宗系五輪塔以外の関東タイプの五輪塔の成立に、深く関係していたと言えるのではあるまいか。今後の検討課題としておきたい。

褐色凝灰岩製宝篋印塔はA・B類に分類でき、前者は大型品、後者は中型品に多く、A類が先行すると見られる。どちらも、前項で述べたように相模タイプ(関東型式)と呼べる第9図11の余見塔(律宗系宝篋印塔)などより系譜をたどれる東伊豆産安山岩製宝篋印塔をコピーして製作されたことは明らかである。ちなみに、富士川流域産安山岩製宝篋印塔の祖形は、棲雲寺で確認された第9図12の観応3年(=文和元年1352)に没した業海上浄禅師の供養塔(開山塔)に見ることができる。この塔は甲府盆地の14世紀中葉以降生産が確認される八ヶ岳系安山岩製宝篋印塔の初期製品で、笠が関西型式で、基礎と反花座は一体化する特殊な形態ではあるが、下半に格座間をもつ二窓が刻まれ、花卉は隅の弁を跨ぐ関東型式の特徴をもつ。このような宝篋印塔が成立した要因は、12の観応3年銘塔と隣接して立塔されている第9図13の文和2年(1353)の紀年銘が刻まれた普同塔は、同寺の裏山で産する花崗岩で製作されたかなりオリジナルに近い関西型式の宝篋印塔で、京都からきた道石なる石大工により製作されたことは明らかである(松井一明2009)。普同塔と開山塔の紀年銘をそのまま信用すると時期は前後するものの、山梨県にはこのような関西型式のオリジナルに近い宝篋印塔が14世紀中葉には造塔されており、それを参考として富士川流域産・八ヶ岳産安山岩製の山梨タイプとでも呼べる宝篋印塔が成立したと考えられる。

さて、褐色凝灰岩製宝篋印塔A類の祖形となった東伊豆産安山岩製宝篋印塔は伊豆でも大型品で、B類に対応する塔も伊豆では大型品と中型品が製作されているようである。遠江・駿河地域における東伊豆産安山岩製品は14世紀中葉以降主体的に伝播することは確実で、旧榛原町清浄寺の宝篋印塔群(研究3)などで検討する限りでは、大型品ではなくて中型品が主体となることはずでに前項で指摘したように、一族墓の成立が大きく関与したと考えられる。同様に褐色凝灰岩製宝篋印塔B類も静岡市安養寺土肥七騎供養塔(研究4)などを見る限り中型品が主体であり、さらに富士川流域安山岩製宝篋印塔も複数の部材が確認できる旧蒲原

町海宝寺の石塔群を見る限り中型品が主体で、これらも一族墓の成立に大きく関与していたと見られる。つまり、東伊豆産安山岩製宝篋印塔A類をいち早く導入した遠江国府の在庁官人層である横地氏や勝間田氏クラスの武家層が14世紀中葉に一族墓を成立させ、14世紀後葉になると褐色凝灰岩製宝篋印塔B類を主体とする駿河中・西部地域を中心に次のクラスの武家層に一族墓が広がり、14世紀末葉になると富士川流域でも富士川流域産安山岩製宝篋印塔A類を使用した武家層の一族墓がさらに成立したと見たいのである。同様に山梨県下では八ヶ岳系安山岩製の中型宝篋印塔が、14世紀後葉以降甲府盆地に広く分布する。岐阜県でも西濃産砂岩(河戸石)の中・小型宝篋印塔が14世紀中葉以降に美濃・尾張に主たる分布域をもちつつ、東限は浜松市のかなきんさま(第6図1-24)、南限は伊勢地域まで広域的に確認されるようであり、東伊豆産安山岩製宝篋印塔とともに広域分布する中型宝篋印塔の動きは、一族墓の成立と拡散現象に密接に関係していると思われる。今後、東海地域における14世紀中葉以降の中型石塔の実態解明のための検討課題となろう。

(松井一明)

謝 辞

静岡県内の中世石塔の実測調査は浜北市史のため2003年から始めて5年以上(松井・木村2004)、古式石塔の見通しを示して3年以上も経過してしまった(松井一明2005)。当初は膨大な数と色々な系統の石塔に出会い困惑したが、次第に新しい発見に感動すら覚えたこともあった。本号でこれらの古式石塔のもつ問題点を、全国の石塔研究と比較しても遜色なく明らかにしようと自負している。これらの調査を今まで継続してこられたのも、溝口彰啓・木村弘之両氏の無報酬の献身的作業によるものであることを明記しておきたい。最後になりましたが、今回の考察にあたっての現地調査を快諾して頂きました各寺院と、情報提供を頂きました各市町村教育委員会の関係者の皆様方にはたいへんお世話になりました。とくに、遠江中世石塔研究会の太田好治、清水尚、戸塚和美、椿原靖弘、篠ヶ谷路人の各氏と山本宏司・前田利久氏には県内資料のご教示、元興寺文化財調査研究所の狭川真一氏には関西方面の石塔全般にわたり興味深いご教示を頂きました。また、東海地域の石塔については三重県の竹田憲治・濱辺一機、岐阜県の小野木学・三宅唯美、愛知県の野澤則幸、増山禎之、天野敏規、飯田市の石塔では山下誠一、山梨県の石塔では保坂康夫、畑大介の各氏に多数の情報提供をして頂きました。この場を借りて関係者に深く感謝いたします。

(松井一明)

執筆者所属

松井一明 = 袋井市教育委員会(袋井市立浅羽郷土資料館)
木村弘之 = 磐田市教育委員会(見付学校教育資料館)
溝口彰啓 = (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

【参考文献】

- 狭川真一 2005「囃合式五輪塔考」『日引』第6号 石造物研究会
狭川真一 2007「西安寺五輪塔群の形態的位置」『肥後国西安寺五輪塔群』玉東町教育委員会
本間岳人 1998「遠江における石製塔婆の様相」『立正考古』第37号 立正大学考古学研究会
松井一明 2005「静岡県における中世石塔の様相(2005年版)」『日引』第7号 石造物研究会
松井一明 2008「鬼岩寺中世墓・中世石塔群から見えてきた歴史的背景」『駿河国鬼岩寺中世墓・中世石塔群調査報告書』藤枝市教育委員会
松井一明 2009「東海」『日本の中世墓』高志書院
松井一明・木村弘之 2004「浜北市内にのこる中世の石塔」『浜北市史』資料編原始・古代・中世 浜北市
松井一明・太田好治・木村弘之 2005「遠江西・中部地域の中世石塔の出現と展開-静岡県下における中世石塔の研究 1-」『静岡県博物館協会研究紀要』第28号 静岡県博物館協会
松井一明・木村弘之・溝口彰啓 2006「遠江中・東部地域の中世石塔の出現と展開-静岡県下における中世石塔の研究 2-」『静岡県博物館協会研究紀要』第29号 静岡県博物館協会
松井一明・木村弘之・溝口彰啓・篠ヶ谷路人・椿原靖弘 2007「駿河西・中部地域の中世石塔の出現と展開-静岡県下における中世石塔の研究 3-」『静岡県博物館協会研究紀要』第30号 静岡県博物館協会
松井一明・木村弘之・溝口彰啓 2008「駿河中部地域の中世石塔の出現と展開-静岡県下における中世石塔の研究 4-」『静岡県博物館協会研究紀要』第31号 静岡県博物館協会
桃崎祐輔 2000「横地周辺における中世石造物の展開とその意義」『横地城総合調査報告書資料編』菊川町教育委員会
吉澤 悟 1998「沼津市霊山寺の中世石塔群の調査」『沼津市史研究』7 沼津市教育委員会
鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館 1980『鎌倉国宝館展示図録 32集 鎌倉の石仏・宝塔』
鎌倉国宝館 2000『鎌倉国宝館和文案内書 6版』(第9図10は写真よりトレースして作成)
静岡市立登呂博物館 1999『竜爪山の歴史と民俗』(図録)
玉東町教育委員会 2007『肥後国西安寺五輪塔群』(第9図6出典文献)
浜北市 2004『浜北市史』資料編原始・古代・中世(第9図1出典文献)
山梨県 2004『山梨県史』資料編7(中世4考古資料)(第9図7・8出典文献)

歴史系博物館における体験学習活動の在り方 体験指導員としての活動を通して

静岡市立登呂博物館 稲森幹大

はじめに

近年、社会の博物館に対する目はかなり厳しいものとなっている。特に公立の博物館では、入館者数の減少に伴う予算の削減など、館の維持存続を危うくする問題も起こっている。そのような中で多くの博物館では、博物館資料をただ展示、公開するだけでなく、入館者に博物館を親しんでもらうため、また博物館資料をより深く理解してもらうために簡単な体験学習活動を取り入れている。歴史系博物館では、当時のものづくりや実際に復元された道具を使うことが主な体験学習活動となっている。

私は、平成 16年 4月から 1年間、静岡市立登呂博物館（以下、「登呂博物館」）の体験指導員（非常勤嘱託職員）として、博物館 1階の常設展示室である参加体験コーナー内で入館者に体験学習活動を勤める業務に従事した。

登呂博物館は、社会科見学や修学旅行の学校団体、家族連れ、観光客、近所の子どもたちや社会福祉施設の団体など、様々な人たちに利用されており、全国的にも弥生時代を学習する中心的な施設である。しかし、時の流れとともに施設の老朽化や入館者数の減少など、他の施設と同じような課題も生じてきた。

そのような中、登呂遺跡を核とした魅力ある空間を創出するという 1つの目的の下、遺跡の再整備とあわせ、平成 22年度のリニューアルオープンを目指し建替事業を進めている。新登呂博物館は、これまでの博物館の特徴である参加体験コーナーを有し、さらに遺跡内でも常時体験学習活動ができるような設備を設ける予定となっている。

今後、登呂博物館をはじめ、歴史系博物館の体験学習活動において目指すべきこととは何なのだろうか。私自身の体験指導員としての経験をもとに、その活動においての必要な要素を探ってみようと思う。

今回、博物館での体験を中心とする活動については、「体験学習活動」という用語を統一して用いることとするが、博物館側からの立場として「体験」をする活動ではなく、「体験学習」をする活動という観点で述べるためである。

1. 登呂博物館の参加体験コーナー

最初に、旧登呂博物館の参加体験コーナーが誕生した経緯と施設の内容について述べる。

旧博物館は、昭和 47年 4月に特別史跡登呂遺跡に隣接した遺跡博物館として開館した。1階に稲作農耕文化を伝える民俗資料、2階に登呂遺跡出土遺物を中心とする考古資料の、2つの常設展示室を有する博物館であった。開館当初年間 20万人以上であっ

た入館者は、休館となるまでの約 35年間で、通算して約 700万人を数えている。しかし、全国各地での大規模遺跡の発見や、多岐にわたる文化施設の増加、少子化による学校団体参加者数の減少などにより、年々減少傾向であった。

そうした状況の中で、教育普及活動のメインとして、体験学習を取り入れた活動を実施してきた。それは、館内、館外を問わず、様々な角度からの活動であった。昭和 57年から、「夏休み登呂遺跡学習室」の中で体験のできるコーナーを手作りし、「弥生人になってみよう」をキャッチフレーズに、体験学習活動を展開してきた。昭和 59年から体験の中で作った丸木舟を活用し、博物館敷地内にある池での丸木舟乗りを取り入れた。昭和 62年には、復元住居を活用した 1泊 2日の宿泊体験を行った。

これら過去の様々な活動実績を参考とし、平成 6年 3月、登呂博物館は 1階展示室を旧来の稲作農耕文化を中心とする民俗資料の展示から、「登呂村のくらしと米づくり」をテーマとした、弥生時代の登呂村の生活を体験できる参加体験コーナーへとリニューアルを行った[写真 1]。



写真 1 参加体験コーナー 入口の案内看板

このようにリニューアルされた参加体験コーナー内の展示は、背景画を中心としたジオラマと体験に参加できるステージから成り立っている。背景画には弥生時代の人々の生活場面が表現されている。登呂地域周辺の東西南北の地勢や四季の変化、また朝から夜までの時間の経過を描写した生活場面はストーリー性を有しており、弥生時代の 1年間を通した米づくりと 1日の生活の様子が流れの中で表現されている。ここに表現されている人々は、それぞれが「絵解¹」の意味を持っており、体験に参加してもらう仕掛けとなっている。壁に描かれた風景と、復元住居、倉庫、水田などの各コーナー、土器や木製品などの道具類、そして、貫頭衣を着て弥生人になりきった体験指導員や体験指導ボランティアによって、登呂村の生活シーンが再現されている。そして、その「舞台」をさらに

活性化させているのが、参加体験コーナーの主役であり、実際に展示物の 1つであるかのように体験に取り組む多くの入館者である。

リニューアルを担当した大村和男氏は、博物館展示に求められるものとして、暮らしをする人間の動きが具体的にわかる「生活再現展示」をあげている。この背景には、ただ展示資料を見るだけという「受身」の姿勢では面白くないといった、従来の展示に対する批判の声があったという。当時の暮らしぶりをリアルに実感したいというニーズに応え、新しい展示は入館者を展示の主役とし、展示室全体を生活体験のできる体験学習の場として位置付け、入館者に自発的なパフォーマンスを促す仕組みを取り入れた。

当時、常設展示室全体を体験学習活動スペースとする前例はなく、この新しい展示手法は革新的なものであり、弥生時代の暮らしぶりを五感を通して体感してもらうことを可能としたのである。

2. 体験指導員の役割と効果

体験指導員は常時 2人体制で勤務しており、当時着用していたと考えられる貫頭衣を実際に着ながら弥生人を演じ、入館者に体験学習活動を促す役割を担っている。鉄の刃物で木を削る。矢板を打ち込む。田下駄を履いて歩く。石包丁で稲刈りをし、杵と臼で脱穀をする。火起こしをする。土笛を吹く。このような弥生時代の生活体験を入館者に勤めること、体験指導、簡単な質問への対応、道具の製作や補修、小学校等団体への入館前のガイダンス[写真 2]などが主な業務である。



写真 2 小学生へのガイダンス風景

体験指導員の主な役割と効果として次の3点があげられる。

(1) 展示の一部として実際に弥生人を演じていること

体験指導員は、弥生時代の生活シーンを作り出すために、貫頭衣を着ている。貫頭衣は古代中国の史書、魏志倭人伝の中に「男子皆露紵 以木綿紹頭 其衣横幅 但結束相連 略無縫 婦人被髪屈紵 作衣如単被 穿其中央 貫頭衣之」とあり、女性の服装とされている。男性は横幅衣となっているが、登呂博物館では貫頭衣のみを復元し、実際に入館者も試着できるようになっている。

貫頭衣を着用することによって、入館者が体験指導員を弥生人

と錯覚し、まるで弥生時代にタイムスリップしたかのような気分を味わう効果をもたらす。つまり、静止した人形からは演出できない臨場感を生み出すのである。入館者からは「びっくりした!」という反応も多く見られ、生身の人間が展示の一部になることで、タイムスリップ感を高める演出効果をあげているといえるだろう。

また、弥生人を演じることで、体験指導員自身が弥生人であるという錯覚がおこる。この錯覚により、体験指導員の意識が弥生人に近づき、自らが道具の製作などを行う行動につながる。体験指導員自身が、ただそこにいるのではなく、弥生時代の生活体験をしていた方がより効果的な演出となり、動態展示としての効果も生まれる。それにより入館者の理解度・満足度もアップするのである。

(2) 入館者との直接的コミュニケーション

コミュニケーションの種類には3つある。まずは、体験指導員から入館者への言葉かけである。言葉かけの主な目的は、入館者に体験してもらうこと、その上で自由な発想でものについて考えてもらうことである。体験コーナーがあっても、何をどのように体験すれば良いのかわからなければ意味をなさない。そこで、体験指導員は考えるきっかけを与える役割を担うのである。入館者は様々な年齢層の方々であるため、言葉かけも一様ではなく、相手により変える必要があるが、会話することにより相手の興味を引き出すことができるのである。

次に、入館者が抱く疑問への対応である。入館者の多くは、自分の持っている知識やその場で感じた疑問を、その場で話したいと感じるようだ。博物館は敷居が高く、気軽に質問が出来ないといった声や、学芸員が近くにいないなどという声がよく聞かれる。体験指導員とのコミュニケーションは、この物足りなさを解消し、交流サービスを向上させ、入館者の気持ちを満足させるのである。

加えて、体験指導員を介した入館者同士のコミュニケーションの発生である。



写真 3 脱穀体験

1つ次のような例をあげよう。一組の家族連れが来館した。木の臼と杵を使い、脱穀[写真 4]を行っていたところへ、年配の夫婦がやってきた。年配の夫婦は、戦時中の杵を使ったもみずりの方法が、弥生時代の脱穀作業と同じであることを説明してくれた。弥

1 絵解とは、描かれた絵で意味を説明すること（静岡市立登呂博物館1994）で、ここでは壁に描かれた弥生人により、道具の使い方や生活の様子が説明されている。

生時代の生活文化とほんの数十年前の生活文化の共通点を具体的に説明してくれたのである。この家族連れにとって、年配の夫婦との交流はものに対する理解をより深めることとなった。このように体験指導員は、「ひと」と「ひと」とをつなぐ役割も果たしているのである。

(3) 展示室内の維持管理と入館者の危機管理

通常の展示室とは異なり、入館者が展示物を直接手に取り、扱うことから、展示物の管理は大切な仕事である。体験指導員は、体験道具の取り扱いの注意を促し、破損した際には次に体験する人に影響しないよう、迅速に修理を行う必要がある。また、ふさがながらの体験は周囲に迷惑をかけ、展示室を乱雑な状態にしてしまうため、体験の仕方にも注意しなければならない。しかし参加体験コーナーは、自由な発想で体験を行う場であるため、その妨げとまらない程度の制約に留めなければならない。制約を増やすことによって、それだけ多くの自由な発想を奪うことになるからである。

また、入館者自身が展示の一部になることから、安全面の管理も体験指導員の重要な仕事のひとつとなる。特に鉄の刃物で木を削るコーナー〔写真 〕では、入館者が鉄の刃物を実際に手に取り、体験を行うことから、体験指導員が必ず対応するといった管理体制が求められる。入館者にいかに安全に楽しく体験をしてもらうかということを常に頭に置いておかなければならないのである。

以上、体験指導員の役割と効果について述べた。登呂博物館の参加体験コーナーは、答えを教える場所ではなく、言葉や文字による解説を最小限にし、入館者が主体的に答えを導き出す場所である。その中にいる体験指導員は展示解説員ではなく、あくまでも入館者が答えを導き出す作業を手伝う立場にある。自分自身が体験を通して展示空間にいることを楽しむことにより、入館者自身に展示を楽しんでもらうことを第一の目的とし、展示の魅力やものの価値を伝えていくのである。



写真 鉄の刃物で木を削る

3 登呂博物館体験学習活動の現状と課題

旧博物館の活動の中心は体験学習活動であり、その手法は大きく2つに分類できる。1つは参加体験コーナーにおける日々の活

動であり、もう1つは長期休暇などに行われるイベントなどである。今後の体験学習活動の在り方について述べる前に、まずこの2つの活動の現状と課題について考えていきたい。

(1) 日常的な活動

まずは、参加体験コーナー内での日常的な活動である。先に述べたようにこのコーナーは特徴として体験指導員や体験指導ボランティアを配置し、入館者が様々な体験をしながら弥生時代についての理解を深める場となっている。

館内で行っているアンケート調査の回答によると、「体験コーナーが楽しかった」、「実際に手に取ることが出来て良かった」など、参加体験コーナーという「場」に対する評価は非常に高い。これは、リニューアル当時には革新的であった「静」から「動」への変換を行ったことへの1つの評価と言ってもいい。リニューアルから10年以上経過した現在でも、他に類をみない四季の変化や時間の経過などを演出したストーリー性のある展示空間は高い評価を受けていると言えるだろう。

しかし一方で、いくつかの課題も浮かんでくる。現在、生活再現や実体験を求める声は、より具体的かつ実践的なものに変化している。アンケート調査の中には、「もっと体験コーナーを広くしてほしい」、「実際に火を起こしたい」、「赤米を食べてみたい」、「田んぼに入りたい」などの意見もあり、博物館館内での制約のある模擬体験では満足できない入館者がいることがわかる。しかし、この要望に答えるには博物館館内での体験学習活動では限界があることも事実である。

また、先に述べたように展示空間にはストーリーがあるのだが、入館者による体験は、1つ体験しては次へ、また体験しては次へと、1つ1つが全くながりを持たず、いわゆる「ただやって終わり」となってしまうことが多い。体験指導員としてはそのストーリーを伝えた上での体験を勧めたいところだが、全ての入館者に対し同じだけの言葉かけを行うことは難しいというのが現状である。

その他の課題として、本来の体験以上に別の作業の方がインパクトを持たれてしまうこともある。



写真 矢板を打ち込む体験

例えば、田んぼを作るコーナーで、実際に矢板を打ち込む体験が行われていた〔写真 〕。木槌を使い、復元された矢板を溝の

中に打ち込む作業である。この体験で大変なのは、打ち込むことより先打ち込んだ後、次の人のために矢板をぬくことであった。体験者の声の中にも「ぬくのが大変だ。」という声がよく聞かれた。後片付けをすることにより、矢板を打ち込むという本来の体験以上に抜くという作業の印象が強くなってしまふ結果となるのである。しかし、体験学習の成果を考えた場合、どうであろうか。博物館側の主旨とは異なることを体験の中で感じ取ってしまうのは、体験学習活動の手法として改善の必要があると考えられる。

(2) イベント的活動

旧博物館では、常設的活動の他、発展的な体験学習の機会として、いくつかのイベントを行ってきた。5月の「弥生人グルメ」、夏休みに行く「登呂遺跡おもしろゼミナール」、「弥生人スタンプラリー」、「弥生人のタベ」がその代表例である。また、リニューアルを前に「夏休み登呂遺跡学習室」を開催し、手作りの参加体験ミュージアムを先駆的に行っている。

これらに共通する目的は、日々参加体験コーナー内で行っている体験学習活動をさらに発展させ、屋外で遺跡を活用した実践的な活動として行うことである。



写真 弥生人グルメ(復元住居内での土器炊飯)

例えば、弥生人グルメ〔写真 〕では、舞きり式火起こし器を使っている火起こしから始まり、赤米を弥生土器を使って炊飯をし、石の刃物を使って魚や肉を切り、手でご飯を食べるといった、まさしく弥生時代の生活体験を行う。参加者は、「弥生時代の苦労がわかった」、「弥生人の知恵を知った」など、館内の体験では得られない満足感を感じていたようだ。

これは、当時の生活の一端を点ではなく線として感じることが出来たからではないだろうか。火を起こした後にご飯を炊き、魚や肉を焼く。つまり、火を起こすという点の作業で終わらず、それを活用し次の作業を行うというこうした線としての流れが、参加者に満足感を与えるのではないかと。それによって、火は何のために必要なのか、そのためにどのような苦労をしたのかなど、具体的な疑問を抱くようになる。線としての実体験が興味関心を高め、より発展した学習効果を生み出していると考えられる。

しかし、イベントによる体験学習活動は1年のうちのわずかな日数

に過ぎず、参加者も限られてしまうことが多い。また、博物館側の人手や経費の負担も多く、日々の活動として行うことは難しい。

以上述べたように、10年以上の時間の経過に伴い、はつきりとしたいくつかの課題が見えてきた。また、博物館を取り巻く社会情勢の遷り変わりに伴い、体験するスペースそのものを何らかの形で設ける施設が増加し、全国的に見ても珍しいものではなくなってきた。歴史を学習する社会教育施設としての性質を持つ博物館ならではの、特徴のある体験学習活動の手法の検討が求められている。

4. 今後の体験学習活動の模索

ここまで、登呂博物館の今まで行ってきた体験学習活動の現状と課題について述べた。実際に手に触れ、五感を通して歴史を感じるといふリニューアル当時の考え方は、新しい展示手法や活動内容にも活かされていこう。これらの過去の実績を参考とし、新しい時代に向けた今後の体験学習活動へとつなげていく必要がある。

現代の博物館展示の変遷を考える上で、第一段階のテーマは従来の「静」から体験型の「動」への転換であった。その流れの中で、ハンズオンを取り入れた展示手法が各施設で展開されるようになった。そして、第二段階のテーマとして今後追求すべきことは、「点」から「線」への「つながり」のある体験学習活動ではないかと考えている。

「点」から「線」と言ってもいくつかの要素が考えられる。

1つめは、1つ1つの体験がつながりを持つことである。例えば、木製の臼と杵を使って脱穀を行う体験がある〔写真 〕。この作業の前には、本来石包丁で稲穂を収穫する作業があり、後には箕を用いて籾殻をとばす作業がある。これらの作業をひとつの流れとして組み立てて実施してみると、ただ脱穀だけの体験の時とは入館者の目の輝きが変化してくるのがわかる。

ものづくり活動についても、今まではただものを作るという行為だけで満足することが多かったように感じる。しかし、ものの材料、使われ方などそこから付随する情報を知ることによって、ものに対する理解が更に深まる。そのためには、材料を採取したり、実際に使用するなど、発展的な展開が必要となってくる。

また、活動内容により、長期的な時間を必要とする場合には、1年通して参加できる活動などを企画運営することも必要ではないだろうか。

平塚市博物館を例にとると、館主催の教育普及活動の核として年間会員制行事を開催している。「平塚の古代を学ぶ会」、「古文書購読会」、「石仏を調べる会」など全16サークルが、週1回から月1回程度で活動を行っており、活動発表の場も設けられている。体験学習活動を中心に据えたものではないが、「つながり」を意識した活動の手法として非常に参考になるものである。

2つめは模擬体験と実践的・本格的体験が「つながり」を持つこと

である。これらは、入館者アンケートでもよく意見として聞かれたものであり、入館者の多くが求めていることであるといえよう。

例えば、旧博物館の参加体験コーナーには、田下駄を履いて歩くコーナーがある[写真]。このコーナーでは田んぼに見立てたマットの上を田下駄を履いて歩くのだが、実際の田んぼではないため、泥に埋まる感覚がなく、少しだけ履いて終わってしまうことも多く見られた。



写真 田下駄を履いて歩く体験

この体験に本格的な体験を組み合わせるとどうだろうか。まず模擬体験として、マットの上で田下駄を持ち上げて一歩一歩を確実に歩くということを体験する。その後、実際の田んぼの中で歩いてみるのである。模擬体験だけの場合と比べて、何のために、田下駄が必要であり、どのように使用されたのかを具体的に考えるきっかけを与えることになるのではないだろうか。



写真 土器を作る

また、復元した土器に触れる体験がある。ここでは、体験指導員が目の前で実際に粘土を使って、土器を作る作業を見せようとするだろうか。さらに、粘土に触れ、土器ではなくても形を作る作業をせよ[写真]。作った土器の焼成を行う[写真]。こうした展開により、粘土の触感や焼成する前と後との色の違いなどを入館者に実感してもらうことができるのである。

模擬体験は模擬体験として展開しつつ、本格的かつ具体的な体験を取り入れていくことが重要である。

3つめは、復元資料と実物資料がつながりを持つことである。旧

博物館の館内の配置は1階で復元資料によって使い方がわかり、2階の実物資料を見学することでものに対する理解が深まるという流れを意図していた。しかし、実際の入館者の流れは、1階で体験してから2階の実物資料を見学するばかりではなく、2階を見学してから1階の見学をする場合や、体験コーナーは子どもの遊び場という先入観からただ通過するだけで2階へ行ってしま入館者も多く見られた。せっかくの博物館の意図が反映されていないことがわかる。



写真 作った土器を焼成する

入館者は「本物」を見ることを目的として博物館を訪れる。例えば入館者にとって、土器は欠片でも本物は本物であり、成果品であっても模造品は模造品なのである。「本物」の持つ力に入館者は魅力を感じるのである。体験を行う場の近くに実物を置いたり、欠片などを実際に触られるようにするなど、利用者と実物との距離を出来るだけ縮め、よりわかりやすく実感できるような取り組みが必要であろう。

以上、3つの「つながり」をキーワードとした視点から体験学習活動の在り方について述べた。

つながりのある体験は、1つの体験と比べ異なる楽しさを感じる。「線」としての体験学習活動が、今まで以上に五感を使ったものなるからである。体験をすることを楽しいと感じる気持ちが、学びへの意欲に発展していくのである。それこそが、博物館における体験学習活動の意義であるように思う。

では、その膨らんだ意欲を持続させるために、博物館側のすべきことは何であろうか。博物館職員自ら体験を試みることで、体験学習活動の中心に据える博物館側の主旨を明確にする必要がある。そして、その軸をぶれさせることなく、体験する人々が主体的に感じ、動き出すことが出来るような体験学習活動の場を与えることが重要である。博物館からの伝えたいことが明確であれば、入館者のものに対する理解度もアップするに違いない。

おわりに

今回は私自身の体験指導員として活動した経験を通して、博物館の教育普及活動の1つである体験学習活動について、述べ

せていただいた。

博物館という場における学習、特に体験学習は「楽しい」ものでなくてはならない。楽しいという魅力が、「学び」へとつながっていくのである。楽しさを追求し、様々なものとの「つながり」をもたせることにより、その成果がより効果的なものになるのである。

そのような「学び」の場にするためには、まず職員が楽しんで体験学習活動を行うことが、非常に重要なことのように思う。体験の成果を利用者に伝えること。利用者と一緒に体験をしていくこと。この2つが、博物館活動の基礎である調査研究活動へとつながっていくのだと思う。このような意味でも今述べさせていただいた「つながり」が、博物館活動全体の中で求められているのではないだろうか。

また、ここまで述べてきたような体験学習活動を展開していくた

めには、博物館ボランティアの存在は欠かせないものである。登呂博物館でも体験指導ボランティアを活用し、体験指導員と同じように入館者への対応を行っていただいた。ボランティアの方々の協力なしでは、日々の活動でさえ展開できなかったと感じている。博物館ボランティアの在り方は、体験学習活動と一体のものとして考えていかなければならない。これについては、今後検討を重ねていきたい。

私は体験指導員として勤務する中で、日々の活動、また当時の学芸員の方々と一緒に体験指導員として勤務した教員経験者の方々と交流を通して、様々なことを肌で感じる機会に恵まれた。そして、ボランティアの方々にも様々なことを教えていただき、感謝の気持ちでいっぱいである。お世話になった方々皆様に対し、この場を借りてお礼を申し上げたいと思う。

【参考文献】

- 青木 豊 1997『博物館映像展示論 視聴覚メディアをめぐる』雄山閣
- 稲森幹大 2006「入館者数の変遷とその要因」『静岡市立登呂博物館研究紀要7』静岡市立登呂博物館
- 大村和男 1994「登呂博物館における常設展示の更新 「参加体験型ミュージアム」の導入とその評価をめぐって」
- 大村和男 1994「静岡市立登呂博物館 参加体験型ミュージアムへの改装」『Museum Data No.26』
- 小笠原喜康；チルドレンズ・ミュージアム研究会編著 2006『博物館の学びをつくりだす その実践へのアドバイス』ぎょうせい
- 佐々木和世 1994「登呂博物館の参加体験型事業について～「登呂で体験！弥生人グルメ」アンケートの集計から～」
- 『静岡市立登呂博物館館報4 平成5年度』静岡市立登呂博物館
- 静岡市立登呂博物館 1992『静岡市立登呂博物館20年の歩み 21世紀への展開をめざして』
- 静岡市立登呂博物館 1994『参加体験ミュージアムへの誘い-体験して学ぶ登呂村のくらしと米作り』
- 静岡市立登呂博物館 1994『参加体験ミュージアムセルフガイド 登呂村のくらしと米づくり 体験学習のねらいと手引き』
- 静岡市立登呂博物館 2005『静岡市立登呂博物館館報15-平成16年度-』
- 武光誠・読売新聞調査研究本部 1998『読売ぶっくれっとno.10 魏志倭人伝と邪馬台国』読売新聞社
- 中野 宥 1995「登呂遺跡発見50周年記念事業 弥生人体験ムラ・「登呂村」の開設」
- 『平成5年度弥生人体験クラブ活動記録 登呂の弥生人3』静岡市立登呂博物館
- 中野 宥 1997「体験指導での体験ばなし」『平成7・8年度「弥生人体験クラブ」の活動記録 登呂の弥生人5』静岡市立登呂博物館
- 中野 宥 2006「新聞報道に見る登呂遺跡の動向(下)」『静岡市立登呂博物館研究紀要7』静岡市立登呂博物館
- 布谷知夫 2005『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』雄山閣
- 浜口哲一 2000『放課後博物館へようこそ 地域と市民を結ぶ博物館』地人書館

【報告】 NPO文化財を守る会の活動報告

NPO文化財を守る会 中井喜子

はじめに

平成16年度より任意の団体として活動を始め、また、特定非営利活動法人となり、今年度で5年目を迎え、節目の年となりました。また昨年度には、発足時の事務所である焼津市より、静岡市に移転致しました。そのようなこともあり、少しずつ活動の幅を広げております。その活動の中で、昨年度、今年度を中心に行った活動を報告致します。

【静岡市職員研修】

日時：平成20年1月16・17日

会場：静岡文化財保存修理センター

静岡市文化財課の職員19名を対象として、文化財の保存と修理について研修会を開きました。文化財修理の概要や文化財修理を行っている工房を見学して頂きました。実際に文化財の修理で使用している材料に触れてみたり、修理の調査で使用する最前線の機器について知って頂くほか、普段は見ることの出来ない解体中の文化財の作品などを見て頂きました。



文化財修理の説明を聞く

【大庭家文書整理協力事業】

日時：平成20年2月6・7日

会場：静岡文化財保存修理センター

大庭家所蔵の文化財の整理事業を、ボランティアを募り、行いました。多数の所蔵品を文書・書画に分類し、それぞれナンバリング目録整理をしました。また写真撮影をし、デジタルデータとして閲覧出来るよう、写真と内容のデータ入力作業を行いました。全体で2日間、9人のボランティアの方に参加して頂き、作業が完了しました。



文化財の分類作業

【六所家資料調査整理事業】

日時：平成20年7・8・9月の6日間

会場：富士市立博物館

昨年度に引き続き行われた、郷土資料の調査・整理です。何万点とある書状を撮影、採寸しました。そして内容を読むことが出来るよう、虫損等で開封しにくい文書を少しずつ開いていきました。毎回、多くのボランティアの方に集まって頂きました。全日程では53人となり、富士近郊の方が多数を占める中、遠くは静岡市からも何度も来て頂きました。



写真の整理

【文化財ボランティア入門講座】

日時：平成20年9月～11月（全5日間）

アイセル21葵生涯学習センターとの共催で、文化財のボランティアとして積極的に活動していく方を育成するための入門講座を開きました。古文書修理の体験実習を含め、文化財ボランティアとして必要である、洋書・和書などの紙や染織品についての学習や、美術館・図書館のバックヤードを見学しました。受講生は40人で、

9項目に渡る講習を受けました。この講座に参加して頂いた方を中心に、今後はさらに一歩進んだボランティア活動に参加して頂きます。また来年度も行う予定です。



古文書の修理体験にて

【歴史を巡る文化財ウォーク】

日時：平成20年12月7日

例年行っている文化財ウォークですが、今年度は浜松市から新居町を歩きました。静岡大学の高松良幸先生を講師として、計23人で寒い中、舞阪宿、新居関所や応賀寺等を巡りました。次回も県内の旧東海道を巡ることが出来ればと思います。



道中で説明を聞く

【文化財を守り隊】

日時：平成20年12月20日

会場：安東小学校

事務所の近所にある安東小学校の児童6人グループが「文化財を守り隊」を結成し、小学校の行事にて古文書修理体験講座を開きました。児童が中心となり古文書修理の説明を行いました。何十人もの児童や、その保護者の方々も興味を持ち、古文書の修理体験をしていきました。子供達の文化財を守りたいという気持ちは、皆様に伝わったのではないのでしょうか。



下級生に修理のやり方を教える

【文化財防災訓練】

日時：平成21年1月24日

会場：建徳観音堂・建徳公民館

静岡市葵区建徳を中心とする町内会の皆様と、静岡市の協力を得て、観音堂裏山で火災が起きたことを想定した防災訓練をしました。町内会の方々を中心に総勢200人にも及ぶ方々が集まり、仏像の搬出、バケツリレー、消火器、消防隊による放水など、非常時における行動を確認しました。訓練後は市の消防署の講評や、仏像修理の専門家の講義があり、さらに文化財の防災について知識を深めていきました。



模擬の仏像の搬出

おわりに

被災にあった作品を修理したことをきっかけとして、被災地に実際赴いて調査やボランティア作業をすることから始まり、年々活動の幅が広がっているように思います。最近では、災害に遭う前の事前準備や対策などについても、少しずつ広めていっているように思います。

これからは、今年度開催の文化財ボランティア講座のように、文化財の専門家でなくても、自らが文化財を守ることが出来るよう、少しでも多くの方が文化財に興味を持ち、当会の活動に参加して頂ければと思います。

【報告】富士・沼津・三島三市博物館共同企画展の歩み、並びに朝鮮通信使400周年記念展について

富士市立博物館学芸員 高林晶子

はじめに

この共同企画展は、富士市立博物館、沼津市歴史民俗資料館、三島市郷土資料館の3つの博物館が共同で行っている企画展である。平成8年に組織がつくられ、平成9年から20年度までに12本の共同企画展を開催してきた。本展のこれまでの歩みを報告することにより、博物館の広域連携の在り方について再検討する機会となれば幸いである。

また、平成19年度の本展は、朝鮮通信使400周年にあたり、静岡県が主催した朝鮮通信使400周年記念事業に参加したことから、その報告もあわせて行う。

共同企画展の運営について

平成20年現在の三館の概要をご覧いただきたい(表1)。本展の会場となる特別展示室の面積は、各館かなりばらつきが見られるので、毎回調整を行っている。

表1：三館施設概要(平成20年)

	富士	沼津	三島
開館年	昭和56年	昭和49年	昭和46年
延床面積	1,734m ²	870m ²	893m ²
特別展示室面積	67m ²	238m ² ¹	128m ²
職員数(学芸員)	11名(2)	5名(1)	5名(2)
入館料	100円	100円 ²	300円 ²

1 この内半分のスペースを使用 2 公園入園料

この共同企画展を企画運営するにあたり、共同組織「富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会」をつくった。三館相互の連絡調整をはかり、親しく調査研究・情報交換を行い、また共同や巡回の展示会を開催する組織として位置付けられている。

この協議会では、平成12年度より負担金を徴収し、共通経費のポスター・パンフレット印刷費に充ててきた。これは、共通の画像やテキストの使用が多く見込まれる印刷物を、各市が個別に印刷するより、一つの業者に一括で依頼した方が安価で、手間も少なく、共通性も高められるといったメリットが多く見込まれるためである。表2のように、この負担金は当初、各館必要な印刷部数に応じた負担割合とした。その後、使途範囲を企画展の準備にかかる様々な経費に拡大させたのと同時に、負担割合を同率にした時期を経て、17年度からは、より厳密に印刷部数に応じて負担割合を見直し、現在にいたっている。

表2：負担金負担割合の変遷

		富士	沼津	三島
十一年度	負担割合	40%	30%	30%
	ポスター部数	1000部	300部	300部
	パンフ部数	3000部	2500部	2500部
十六年度	負担割合	33.3%	33.3%	33.3%
	ポスター部数	500部	500部	200部
	パンフ部数	2500部	2500部	2000部
十七年度	負担割合	40%	32%	28%
	ポスター部数	500部	400部	200部
	パンフ部数	2500部	2000部	2000部

負担割合の見直しの際には、各館の館長が協議し、その都度変更してきた。負担金の支出内訳は、印刷費のほかに、展示室内の解説板、写真パネルや大型写真パネルなどの制作費、食品サンプルなどの展示効果品制作費、借用品にかかる展示品動産保険料、講演会や講座講師への謝礼、共同調査の経費などである。協議会の会計は規約により単年度とされているので、これら共通経費を支出した後は、各市の負担割合に応じて分配し、調湿材や展示クロス、写真印刷用のインクや用紙など、次年度企画展の準備費用に充てている。



写真1 パンフレットの表紙

企画展ごとに作成するポスターはA2判のフルカラー、パンフレットはA4判フルカラーで8ページ構成、テーマによって冊子形式や観音開き形式としている(写真1)。ポスターとパンフレットの表紙は、各市それぞれ写真や文字の位置、色・構成を替えてデザインしているが、テーマにより共通デザインとすることもある。パンフレット本文はすべて共通とし、執筆は内容によって各館に担当を割り振る。



写真2 パンフレットの共通マップ

パンフレットには、テーマによって三市共通の広域マップやイラストを作成する場合もある。写真2は、食をテーマにした企画展の三市周辺の食文化マップで、富士・富士宮の茹で落花生、沼津の干物やみかん、三島の鰻や箱根大根などの名産品を写真で紹介している。なお、この共同企画展の発端や初期の活動については、静岡県博物館協会の研究紀要23号に「富士・沼津・三島三市博物館共同企画展のあゆみ」と題して報告しているので、併せて参照されたい。

表3：これまでの共同企画展の概要

企画展タイトル	会期	内容
第一回 目いっぱい腹いっぱい 東海道	H9.7/1~8/24: 沼津市歴史民俗資料館 H9.9/14~11/9: 三島市郷土資料館 H9.11/18~H10.1/18: 富士市立博物館	三市をつなぐ東海道を紹介する展示。各市予算を確保し、三島市の三島宿・沼津市の沼津宿・富士市の吉原宿それぞれの本陣の模型を制作。印刷物も、構成は同じながらも各市が発注し、制作した。また、会期中に各館で講演会を開催した。
第二回 海・サト・山・マチの 民間信仰	H10.10/3~11/15: 三島市郷土資料館 H10.11/23~H11.1/31: 富士市立博物館 H11.2/9~5/30: 沼津市歴史民俗資料館	富士・沼津・三島市域全域を「海・サト・山・マチ」という呼称で象徴し、それぞれの地域で培われてきた信仰や素朴な願いが託された神々を紹介。また、会期中に各館で講演会を開催し、富士市では三島の杉村館長に講演を依頼した。
第三回 富士・愛鷹・箱根山麓の 縄文時代	H11.9/7~10/31: 富士市立博物館 H11.11/9~12/19: 沼津市歴史民俗資料館 H12.1/3~2/27: 三島市郷土資料館	富士市の天間沢遺跡、沼津市の吹上遺跡、三島市の千枚原遺跡の出土遺物を中心に紹介した。富士・愛鷹・箱根山麓の縄文土器を時期ごとに比較するなど、広い地域を領域とする展示としては大変効果的な内容となった。会期中に各館が行った講演会では、沼津の学芸員・瀬川氏が講師を務めた。
第四回 暮らしを支えた職人	H12.7/2~9/3: 三島市郷土資料館 H12.9/12~11/12: 富士市立博物館 H12.11/21~H13.2/25: 沼津市歴史民俗資料館	鍛冶職人、桶職人、籠職人など、かつての暮らしに欠かせない存在だった職人の技術を紹介。また、沼津の船大工や三島の和傘職人、富士のだるま職人など各市ならではの職人も紹介。曲げ職人や桶職人、竹籠職人の実演も行った。
第五回 水と生きる水にあそぶ	H13.7/8~9/2: 三島市郷土資料館 H13.9/11~11/11: 富士市立博物館 H13.11/23~H14.2/24: 沼津市歴史民俗資料館	飲料水や洗濯などに使われる生活用水、田畑を耕す農業用水など、非常に密接な水と人々の暮らしを紹介。三市の広域性を活かして、豊かな湧水に恵まれた地域や、天水に頼る水不足の地域などを比較して紹介した。
第六回 石は語る一祈りと想い	H14.7/9~9/1: 沼津市歴史民俗資料館 H14.9/10~11/10: 富士市立博物館 H14.11/17~H15.2/23: 三島市郷土資料館	路傍にあり、今もなお人々の祈りを集める石造物をテーマに取り上げ、富士・沼津・三島といくつかの駿河から伊豆にまたがる地域の人々の祈りや願いの姿を紹介。
第七回 竹の今昔物語	H15.7/12~9/7: 沼津市歴史民俗資料館 H15.9/13~11/9: 富士市立博物館 H15.11/16~H16.2/22: 三島市郷土資料館	古来、生活用具や食料として用いられてきた竹をテーマに、漁業、製茶、みかんなど、生業とともにあった竹製の道具や、暮らしの中で使われた竹製品を紹介。現在注目されている竹の新たな活用法にも目を向けた。会期中、富士・三島で講演会を開催し、沼津は沼津垣の実演を行った。
第八回 暮らしの中の食文化	H16.7/3~9/5: 沼津市歴史民俗資料館 H16.9/11~11/7: 富士市立博物館 H16.11/14~H17.2/27: 三島市郷土資料館	生きる者にとって欠かせない食の世界を、食の場や道具の移り変わりといった時系列を軸に紹介。出土品に見られる古代や近世の食の道具や、近代の鍋・釜・飯櫃など諸資料をはじめ、模型や再現展示、食品サンプルなどを展示。
第九回 子どもの風景 ~教育のいま・むかし~	H17.7/3~9/4: 三島市郷土資料館 H17.9/17~12/18: 富士市立博物館 H17.12/24~H18.3/12: 沼津市歴史民俗資料館	教育・勉強の場であり、子ども社会が凝縮された場所でもある学校をメインに、学校外での教育や習い事、各市の教育黎明期などについて紹介。会期中に街頭紙芝居の実演を各館で開催した。
第十回 米・コメ・こめ ~米に囲まれた暮らし~	H18.6/18~8/6: 三島市郷土資料館 H18.8/26~12/10: 沼津市歴史民俗資料館 H18.12/16~H19.2/25: 富士市立博物館	日本人の食生活を支える「米」について、米が食されてきた歴史や食文化、米の加工品などを紹介。また、稲作で使われた農具や稲作に関わる年中行事、信仰などもあわせて紹介。会期中に富士市立博物館では羽釜で炊いたおにぎりを食べる体験学習を実施。なお、10回目の記念の開催だったので、展示の最後にこれまでの企画展を振り返るコーナーを作った。過去のポスターやパンフレットを置いて、ご覧いただいた。
第十一回 遥かなる東海道 ~富士・沼津・三島の記録~	H19.7/7~9/30: 沼津市歴史民俗資料館 H19.10/6~12/2: 富士市立博物館 H19.12/9~H20.2/24: 三島市郷土資料館	東海道をテーマとし、それぞれの宿場はもとより、静岡県内の街道名物を紹介。平成19年は江戸時代に日朝両国間の平和の礎となった朝鮮通信使が派遣されてから400年を迎えるということで、東海道を通った朝鮮通信使の様子についてあわせて紹介。本展の詳細は後述する。
第十二回 あそび歳時記	H20.7/19~9/23: 富士市立博物館 H20.10/1~12/7: 沼津市歴史民俗資料館 H20.12/14~H21.2/22: 三島市郷土資料館	子どもの遊びをメインテーマに、季節の遊びや伝統の遊びを紹介。また、郷土玩具研究グループ・日本雪だるまの会の協力により、全国の郷土玩具も紹介。

これまでの共同企画展の概要

平成20年度までの間に開催した企画展の概要は、表3の通りである。展示構成では、会場となる館において、なるべくその地域の独自性を示す資料を多く出品するように努めている。そのため、巡回のたびに展示品を取捨選択している。また、食品サンプルなどの展示効果品やイラストを依頼するなど、単独館では割高になりがちなものも制作しやすいため、展示に広がりが見られる。

共同企画展のメリットと課題

本展のメリットとしては、単独館ではなしえない広範囲の地域情報が共有できるという点がある。共通マップの作成、所蔵資料や写真の相互交流、人材や業者の紹介など様々な場面で力を発揮している。この共同企画展は、いつも多くの資料や写真が展示され、これは、3つの博物館が互いの収蔵庫を共有するという感覚に近い。培われてきた最も大きな財産は、強力なネットワークといえる。博物館活動という大きな意味でも、職員の交流という面でも、3つの博物館は、気軽に相談できる同志的な心強い存在である。

また、体験事業においても、各館新しい体験事業を研究してい

る中で、その成果を話題としたり、講師として行き来するなど、情報を共有化している。

一方、課題となる点だが、まず各館所蔵品やふさわしい展示テーマが限定されるため、今後開催可能なテーマの選択肢が狭まりつつある点である。

また、打ち合わせに割かれる時間が移動時間も含めて長くなってしまいう難点もある。

さらに、半年近くにわたる長期の展示になるので、三館以外の博物館や個人から資料を借用することが難しいという点も挙げられる。

いずれにしても、10年の節目を越え、今後共同企画展以外に、例えば共同調査報告の発行であるとか、巡回展の開催など、新しい方向性を持った活動を模索し始めるべき時期に来ているように思う。

新たな試み～朝鮮通信使400周年記念展～

平成19年度に行った第11回目の「遙かなる東海道」展では、朝鮮通信使が到来してから400周年という記念の年であり、静岡県が主導して朝鮮通信使400周年記念事業推進委員会が結成されたことから、新たな試みとしてこの記念事業に参加した。

展示構成と内容

(1) 東海道の名物(静岡県内の街道名物)

東は三島から西は白須賀までの各宿場と宿の間宿の、名物・名産とされるものを食品サンプルや写真などをもとに紹介。岩淵の栗の粉餅、宇津ノ谷の十団子、小夜の中山の子育て飴、袋井宿のたまごふわふわなどの名物を、食品サンプルで制作した(写真3)。



写真3 「東海道の名物」コーナー(三島)

(2) 吉原宿

伝馬朱印状のレプリカや、災害により江戸時代に2度の移転を行った経緯、移転により生まれた名勝・左富士などを浮世絵や古写真で紹介。また、吉原と蒲原の間にあった間の宿・本市場名物の富士の白酒作りの様子を、葛飾北斎の浮世絵から取材した模型により紹介。

(3) 原宿

浮世絵などに描かれた、街道随一の美しい風景を誇る原宿の様子を紹介。また、臨濟禅中興の祖・白隠が、原宿にあった松蔭寺を営み、名園と名高い植松家の帯笑園があったことから、大名や絵師など文化人の交流の場となったことを紹介。

(4) 沼津宿

沼津宿は、沼津城下であり、城下町の性格も併せ持つ宿場だった。浮世絵や本陣模型、絵図などをもとに紹介。

(5) 三島宿

三島宿は、三嶋大社の門前町であり、箱根山を東に控えることから、旅人の宿泊地として賑わった。浮世絵などと共に、本陣料理の再現(食品サンプル)や、宿の名所ともされた千貫樋の模型、箱根旧街道模型などを紹介。

(6) 東海道を通った朝鮮通信使

第11回目の宝暦14年(1764)、三島宿と吉原宿に泊まった朝鮮通信使に、漢詩の交換を求めた沼津・三島の知識人たちがいた。この時に交わした漢詩をまとめた『青丘傾蓋集』(個人蔵・沼津市明治史料館保管)や、筆談集『韓客筆語』(沼津市・島津家蔵)、日本三大急流で知られる富士川に渡された舟橋図の写真、朝鮮通信使が宿泊した三島宿に残された宿場文書から来朝前の準備や施設整備の様子などを紹介。また、「静岡に文化の風を」の会の協力のもと、正使、副使、従事官の再現衣装やチマチョゴリを展示(写真4)。このほか、朝鮮通信使400周年記念事業推進委員会が作成した「朝鮮通信使と静岡県」シリーズのパネルを展示した(写真5)。



写真4 正使・副使・従事官の衣装(富士)

講演会・講座等の実施状況

朝鮮通信使400周年記念事業推進委員会の組織のうち、市町交流事業実行委員会により企画された日韓交流イベントを、本展においても活用させていただいた。

(1) 「韓国の伝統音楽 サムルノリ」

講師：静岡チャンゴ教室

日時：平成19年9月23日(日) 11:00～ 14:00～

会場：沼津御用邸記念公園屋外舞台

参加者：300名

チャンゴ(鼓)、ブク(太鼓)、ケンガリ(鉦)、チン(銅鑼)の4つの打楽器を用いた、韓国の色鮮やかな民族衣装に身を包んだ静岡チャンゴ教室による演奏会。

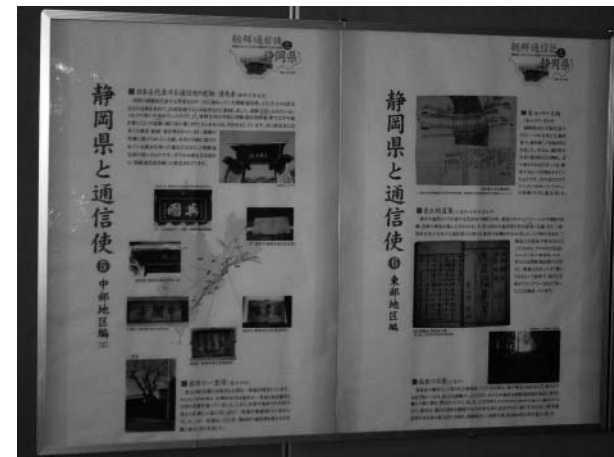


写真5 「朝鮮通信使と静岡県」のパネル(富士)

(2) 講演会「韓流ブームのルーツは朝鮮通信使

～通信使400年の歴史と意義を知る」

講師：金両基氏

日時：平成19年11月24日(土) 14:00～ 15:30

会場：富士市文化会館(ロゼシアター第1会議室)

参加者：73名

朝鮮通信使の歴史についてより深く知っていただくため、金先生をお招きして講演会を開催。

(3) 「チマチョゴリを着てみよう」

日時：平成20年1月20日(日) 13:00～ 15:00

会場：三島市郷土資料館玄関ロビー

参加者：35名

大人用と子ども用のチマチョゴリを用意し、各自気に入った衣装を試着してもらった。

(4) 講演会「三島と朝鮮通信使」

講師：北村欽哉氏

日時：平成20年2月9日(土) 13:30～ 15:00

会場：三島市民活動センター第1会議室

参加者：32名

江戸時代の鎖国の概念と通信使の概要を三島との関係を織り交ぜながら紹介していただいた。

(5) 料理講座「本場韓国のキムチを作ろう」

講師：ユン・インスク氏

日時：平成20年2月16日(土) 9:30～ 12:00

会場：三島市生涯学習センター料理講習室

参加者：17名

韓国人講師が本場韓国のキムチ作りを直接伝授。

その他、各館にて展示説明、ビデオ上映などを開催。

おわりに

平成20年度は、「あそび歳時記」として開催している。今回はA2サイズのパンフレットの片面に実際遊べる双六(写真6)をデザインし、これを内側にして折りたたむとA4判の冊子状になる、というスタイルとした。双六は江戸時代に流行した「飛び双六」で、サイコロで出た目の数が記された所へ駒を進め、最終的には「上がり」欄に書かれた目の数を出さない限り上がることができない、焦燥感を煽るゲームである。この双六を介して、心温まる出来事があった。最後に、そのエピソードを紹介することにより、本活動の意義をお感じいただければ幸いである。

富士市立博物館を見学したある少女は、この「双六体験」を夏休みの体験作文として提出した。

「パンフレットの双六を家族で行ったところ、なかなか上がりに辿り着かない。皆、すぐに終わるといふ軽い気持ちで双六に参加したので、苛立った。しかし、最後まで続けて祖父が最初に上がり、皆笑顔で終わることができた。昔はテレビゲームもなく、のんびりした気持ちで家族や友達と過ごせる遊び道具が良かったのかな。」

後日、彼女は家族全員で再び来館した。敬老の日だからと、小さな財布から家族全員分の入館料を出して。

数ヶ月にわたり、三館の学芸員が集結して構想を練ってきた企画展が、実を結んだ、と感じた瞬間だった。



写真6 パンフレットの「子どもあそび双六」
上部に帯状に印刷された駒とサイコロを切り、組み立てて遊ぶ。構想とイラストは沼津と三島が担当(力作!)。裏面は表紙・裏表紙・見開き2ページ分のページ割がなされている。

阿弥陀如来立像（鎌倉時代）

上原仏教美術館学芸員 田島 整



昨秋、上原仏教美術館は、鎌倉時代の阿弥陀如来立像を収蔵しました。総高 131.5 cm、像高 99.7 cm、髪（髪際高）の長さ（髪際高）92.5 cm、髪際高でおよそ三尺（約 90 cm）の阿弥陀立像。阿弥陀如来は、無限の光と寿命を体現し、信仰者を死後、極楽浄土に迎え取るとして信仰された仏です。

像の構造は、主要部分を一本で造った上で前後に割り（木割彫造）、材の干割れ防止のために内割を施した上、別製の両肩以下、両手首先、足先、衣の袖などを寄せています。頭部は表情の微調整のために度胸から割り離し、前後に割って内部を割り抜いて、内側から玉眼を嵌入します。玉眼とはレンズ状の水晶をはめ込むもので、生けるが如き表情を仏像に与えます。玉眼は平安末期にすでにありますが、鎌倉時代、運慶・快慶ら慶派仏師が好んで多用し、以降普及した技法です。

本像は、自然な肉付きで写実的に肉体を表現し、着衣も現実の衣を写すように、造形的な破綻がありません。一方、頭上の盛り上がり（肉髻）が低く、面長で理知的な表情には、中国・宋彫刻の影響が見られます。写実と宋様式の影響は、鎌倉彫刻の特徴であり、本像は典型的な鎌倉彫刻です。ところで、鎌倉時代の新様式を確立したのが、運慶・快慶らで知られる慶派仏師です。本像の螺髪（巻毛）は後頭部で逆V字型に並んでいますが、これは慶派の特徴。また、本像の像底は内割を施しながら、底から数センチの位置で、上げ底式に、柵のように材を一枚分割り残していますが、これも慶派独特の技法で、像内に納める納入物を保持するための工夫とも言われています。とりわけ本像は、快慶が多く手がけた三尺の阿弥陀立像であり、秀麗な面貌や、入念で装飾的な衣文には、快慶に通じる美意識が感じられます。本像の作者は快慶に学んでいる可能性が高いと思われま



一方、鎌倉時代の立像は、足の裏に柵をつくり、台座上面の穴に差し込んで立てるのが通例であるのに対し、本像は逆に、台座上面に二本の様を立て、像底にうがつた穴に差し込んで固定しています。また、ほとんどの如来像が膝前に縦の衣文を表すのに対し、本像ではU字型をくり返す衣文とするのも特殊で、それぞれ例はあるものの、稀な技法・造形です。本像は、鎌倉時代の慶派仏師の優れた作例であると同時に、特異な造形や技法が見られる、学術的に興味深い仏像です。

ブランシェのチェンバロ

浜松市楽器博物館 館長 嶋 和彦

チェンバロとはピアノの前身になった鍵盤楽器で、フランス語ではクラヴサン、英語ではハープシコードと言います。1700年頃に発明されたピアノが1800年代に鍵盤楽器の主流になるまで、ヨーロッパの音楽界においてはこのチェンバロが花形の鍵盤楽器でした。王侯貴族のたしなんだ楽器であります。浜松市楽器博物館はチェンバロを6台所蔵していますが、中でも白眉がこのブランシェ作のチェンバロです。全長は233cm。66鍵の2段鍵盤で、音域はF₁-f³。弦は8フィート2本と4フィート1本です。カブラー（上下の鍵盤を同時に演奏する機構）とバフストップ（弦にフェルトを押し当ててミュートする機構）が付いています。ピッチはA=400くらい。外観は金色に塗られ美しい絵が施されていますが、この絵は19世紀に描かれたものようです。音色は繊細この上なく、今作られたチェンバロでは出せないような優雅な響きを備えています。

ブランシェ家は17世紀末から19世紀中頃まで続くチェンバロとピアノの製作家一族で、18世紀中頃にはフランス王室御用達の製作家となった名門。18世紀フランスの大百科事典「百科全書」には、フランソワ・エティエンヌ・ブランシェ1世（1700頃～1761）は、パリで最も名声の高いチェンバロ製作家であったと述べられています。一族の製作したチェンバロで現存するものは世界で8台が確認されているようです。1世の作ったチェンバロはヴェルサイユ宮殿に保管されています。彼の息子フランソワ・エティエンヌ・ブランシェ2世（1730頃～1766）もまた優れた製作家で、当館所蔵のチェンバロはこの2世の手になるものです。一族の楽器の中でもひととき豪華なもので、1992年にアメリカの個人コレクターから浜松市が入手しました。2世は1766年に37歳という若さで亡くなり、弟子のタスカンが技術を伝承しますが、ブランシェ一族の作という点では、この楽器が最後の楽器となります。



博物館ではこの楽器を演奏会で使用できるようにと97年より修復を始め、小さなコンサートを何回か開いたりCDの録音をしながら、徐々に楽器を目覚めさせていきました。そして2007年12月にアクティシティ浜松・中ホールにて「18世紀ヴェルサイユ・クラヴサン音楽の美の世界」というタイトルでコンサートを開きました。このコンサートは各方面から注目され、NHKが収録、BSハイビジョンのクラシック倶楽部とFMラジオのベスト・オブ・クラシックで全国放送され、その麗しく貴重な音色を全国に発信することができました。

キャニオン・デアプロ隕石

石の博物館(奇石博物館)学芸員 荻原美広

朽ちた鉄塊のようなこの標本は地球の年齢を私たちに教えてくれた隕石です。

古来から、自分たちの住む地球が何時頃からあるのかという単純な疑問に対して色々な考えが出されました。古代ギリシャではプラトン（BC 428～347）は失われた大陸アトランチスは9000年前に海中に没したと記し、アリストテレス（BC 384～322）は世界は永遠に続いていると考えていました。ヨーロッパではキリスト教がローマ帝国公式の宗教となって以降聖書の教えが人々の考え方の基本となります。聖書の創世記の記載を遡って出来事の年代を決める“聖書年代学”が始まり、この研究から宗教改革を推し進めたルターは地球創世の年を紀元前3961年、英国の大主教アッシャー（1581～1656）は紀元前4004年10月22日としました。以後18世紀までこの地球年齢が普及しました。

19世紀になると地層と化石の研究から相対的な時間の前後関係が明らかになり始めました。ダーウィン（1809～1882）は「種の起原（第2版まで）」の中で地球の年齢について第三紀（6500万年～180万年前）だけでも3億年を超える時間が経過していると述べていました。

科学的に地球年齢を測る方法は地質学でなく物理学からもたらされました。1902年英国の物理学者ラザフォード（1871～1937）はウランなどの放射性元素は線などを出して別の元素に変化して行くこと（放射性崩壊）を発見し、その後この崩壊速度は温度や圧力影響を受けずに一定であり岩石の年代測定に利用できる事を発表しました。ウランは放射性崩壊して鉛に変わります。

米国のバターソン（1922～1995）は隕石と「方鉛鉱」という鉱物から地球年齢を導きました。米国アリゾナ州北部にあるバリンジャー隕石孔から見つかる「キャニオン・デアプロ隕石」はウランを含まず僅かに鉛を含んでいます。従ってこの鉛の量は隕石が出来たときの最初の鉛の量です。隕石は太陽系形成時に出来た微惑星の破片で、微惑星が集まって地球などの惑星が出来たとされています。この鉛の量比と地球上の方鉛鉱中の鉛の量比を比べることで1953年に地球の年齢を得ました。その結果は45.5億年でした。隕石が地球の初源岩と同じであることは地球のウラン-鉛系と隕石のウラン-鉛系の量比率配列が一致する事で立証しました。これによって地球の年齢が45.5億年である事が確定しました。

人類が古代から抱いていた自分たちの住むこの地球がいつ頃出来たのかという単純で大きな疑問が解決したのは約50年前の事です。



写真左：キャニオン・デアプロ隕石(鉄質隕石)アメリカ合衆国アリゾナ州産 1891年発見
写真右：方鉛鉱 アメリカ合衆国ミズーリ州産

アンリ・マティス《赤い屋根のある風景》一九二〇年頃

平成二〇年度新収蔵

上原近代美術館学芸員 土森智典



アンリ・マティス《赤い屋根のある風景》1920年頃 上原近代美術館蔵
©2009 Succession H. Matisse, Paris / SPDA, Tokyo

本作はアンリ・マティス（一八六九～一九五四年）が一九二〇年頃にニス近郊を描いた風景画です。マティスは一九〇五年に、原色を用いた自由な色彩によるフォーヴの絵画を展開し、当時の画壇に衝撃を与えました。その後一九一〇年代は《ダンス》（一九一〇年）などの大きな装飾画、また《茄子のある室内》（一九二一年）など装飾模様を大胆に取り入れた絵画を制作、マティス研究者のジャック・フラムはこの時期を実験的時代としました。しかし、一九二〇年代になると概して作品のサイズは小さくなり、主題や色彩も穏やかなものとなっていきます。とりわけ一九二〇年前後には、実験的時代より柔らかな色調による風景画がしばしば描かれました。灰色など中間色が基調となるこの風景画は、それ以前の絵画と比して主題や色彩においてかなり伝統的なものと言えます。実験的時代に絵画の限界に近づいたマティスは、風景画という伝統に立ち返ることで、絵画の根本問題に戻ろうとしたのかもしれません。マティスは、初期やフォーヴ時代に風景画を描くことで自らの芸術を大きく展開していますが、ここでも自然を深く観察することで、現代における油彩画の意義と可能性を再確認しているように思われます。画面には効果的に黒が配されていますが、中間色と黒の並置はエドワード・ムネの絵画を想起させます。この時期に描かれたマティスの室内画の多くにも黒が導入されており、マティスがこの時期、油彩画の伝統に戻る中で意識的、無意識的にしろ、マネを通過していたとも言えるでしょう。安井曾太郎はマティスの中間色について、フランス人特有の中間色の美しさ、マチスの平面描写の絵にても一九四〇年代の絵にても、感じられる中間色の美しさ、われわれの伝統的に持っていない中間色（安井曾太郎「画家の眼」一九五六年）と評しています。本作では茂みに広がる中間色と赤い屋根の対比が深い空間を生み出していますが、このような空間は人体の柔らかな陰影と装飾模様を対比させた一九二〇年代のオタリスクへと続きます。さらには安井が指摘するように「平面描写の絵」や「一九四〇年代の絵」にもその特質を見出すことができるでしょう。上原近代美術館では、本作を含めてアンリ・マティスの作品を八点収蔵しています。二〇〇九年度の展覧会「マティスの芸術とその影響 ポナール、ドラム、ピカソらとともに」（二〇〇九年六月三日～九月四日）では、これら作品とともに書簡や挿画本などを紹介し、マティス芸術の本質に迫ります。

口上
一開山寶藏院月清者生国出羽月山之者、御座候処廻国修行、千手観音之守り風を罷出、當国見付宿境松に返り只来、申所ヲ見立天王領神主西尾内記殿、御願、右之御本尊堂建立仕、則月光山神護寺申来り候所、時之御代官、少シ之御構御座候而、只来之立退見付近在上大原村久太夫之ヲ修行之節初落着候以縁右之者、十七夜観音之預々、西貝塚村名主大杉六郎右衛門殿大杉八郎左衛門殿、御願、右御兩人、御見立被下堂建立被遊只今迄右之通御座候

- 一開山寶藏院月清
- 寛永十八辛巳二月十六日相果當年迄百五年
- 二代寶藏院慶山
- 延宝二甲寅正月十三日相果當年迄七拾四年
- 三代寶藏院秀榮
- 享保二丁酉六月十七日相果當年迄式拾九年
- 右寶藏院八才之時開山相果申候由

- 一親類書之事者開山寶藏院妻ハ當国豊田郡野箱村星野善右衛門娘
- 二代寶藏院妻者同国豊田郡山東村善之丞娘
- 三代喜宝院妻者同国山名郡和口村、天野清左衛門娘
- 四代寶藏院妻者當村大村次郎八娘
- 五代寶藏院妻者當国横須賀小笠山別當威徳院娘

右之通十七夜開基之先祖如斯、御座候、口上者前後申上候儀茂御座候、付書付ヲ以申上候以上

丑四月 同村 寶藏院
西貝塚村 御名主御衆中

【資料十五】

奉願上申候御事
一十七夜開山ヨリ有来り申候御事、代々表かさり仕候、前々拙僧方迄兩人物共相志たかひ申候様ニ先代通り被仰付候ハ、難有奉存候、代々之通り奉願上申候
亥ノ

〔宛名〕
泉屋 同
御店中様 出店
大急用

〔本文〕

- 一氣候□□時不拘、冷気甚敷御座候へ共依之御安養、被成御座、珍重奉存候、次ニ當方無異御座候ハ、左様御安念、思召可被下候
- 一此品縮緬早々御染下し被成候
- 一白縮緬志疋早々御下し被成候
- 一黒縮老反早々御染下し被成候
- 一次ニ色物染物段々候
- 其元様、内々御尋被成
- 断申上間敷候間一日も
- (以下切)

【資料二十】

寶珠院弟 八弥
院弟八弥兄弟ニ別當為勤申候前之別當職ニツニ分ケ院別家居二代龍寶院聞遣シ観音分之買取り其金子之以八弥郡中ニ遣シ龍寶院我俣ニ別當勤申候
開山隱居孫 二代龍寶院

一十七夜堂建立者、五拾三年以前大工九百五拾人、松木、老本龍寶院松木式本寶珠院出シ申候、上道具其外不足之松木寶藏院不殘出シ、一切入用茂宝藏院半分余出シ不申候事紛レ無御座候、大工之作料者寶珠院龍宝院出シ不申候ニ付、寶珠院計申候事難成三人共ニ出シ不申候、申年之台風ニ、堂村建木ヲ以三人立合取立

卯月八日 宝藏院
天學院様

【資料十六】

開帳之事
一寛政四年三月十一日、四月朔日迄勤上候
一夜燈控之村々帳くばり者村方若物庄屋処、帳面相渡し扣之村々差出ス事ハ寛政子年より初
一開帳之初夜燈竹立之事ハ是も若者取持ニ罷出取斗事
一夜燈料物村々檀家掛之院主引取事
一開帳中産物御手系銭之網等者ハ三院達合仕諸人用不足之時三院、仕拂、尤村中よりもすけ申候

寛政子年開帳入用ハ
永戸鳳閣寺金百疋御札 入用処
中泉蝸頭金百疋御札
日中老銭二百文
米式俵 其外野味噌将油ヨリ
(以下切)

【資料十七】

一札之事
一此度十七夜堂建立仕候然、寶藏院開山本家と申候ニ付出入ニ相成、當村名主組頭御衆中御立合、拙僧共三人被召寄御吟味、御座候、月清法印能面、開記之儀相知レ候得共何之證據無御座、本家寶藏院と聞傳斗、何連本家と難相定依之開山月清被相印棟札相納、其外古證文之通り急度相守、輪番ニ相勤候様、被仰渡奉畏候、然上ハ末々ニ至リ口論仕り仕間敷候、為後日連判依、如件

(以下切)

【資料十九】

書簡
可勤答ヲ龍寶院我俣申

【資料二十一】

- 一十七夜観世音御身体修繕料 金六円也
- 掛圖三幅表装料 金五円
- 卷物表装料 金五円
- 一金五拾銭 修繕上り菓子代
- 一金壹円 福王寺御札
- 一金壹円八拾銭 大工手間代
- 一金九拾銭 錠前二ツ
- 一金三拾五銭 かんぬき金具
- 一金貳拾五銭 掛金坪金乃針代
- 一金八拾銭 木代
- 一金貳拾銭 少錠前
- 一金壹円六拾銭 箱代
- 合計金四拾八円四拾銭

兵衛殿御一座^三被仰渡奉畏候、此上仲間として口論^二間敷儀一切仕間敷候、為後日仍^一如件

享保十六年

亥四月	西貝塚村	宝蔵院
	同 所	龍宝院
	同 所	善蔵院
	同 所	武兵衛殿

【資料七】

口上書以奉願候

一遠州山名郡西貝塚村月光山十七夜堂

開山	月清法院
二代	寶蔵院
弟	寶學院
月清法院弟子	觀音院

一右弟子觀音院別家^二置十七夜堂別當寶蔵院觀音院兩人^三相勸申候、月清法院印者寶學院召連隱居仕候、表役之儀者、正五九月共^二口口一切宝蔵院相勸候様^一と開山法印申渡シ隱居致候故只今迄其趣勸来申候

一二代目觀音院三代目宝珠院第八弟觀音院年罷寄候間宝珠院第八弟兄弟別當為勸申候処、右八弟勸之分觀音院龍宝院相談を以龍宝院方^二買取八弟者金子請取他国致申候^一付、龍宝院我^三勤拙者有々無甲斐^二仕候^一

一十七夜堂鑰之儀四十二年以前迄ハ宝蔵院方^二持来候、其時分ハむつましく御座候得者鑰入用之節^二兩院方^一遣シ申候処、段々末^二罷成候而兩人^一者不法成義申、只今^二者廻り持之様^一成申候ケ様^二仕候而者觀世音之御威光もなく近在之者共信向うすく罷成迷惑千萬^一奉存候

一先年五十五年以前十七夜堂建立仕候節、寶蔵院在々所々勸化仕候得共信心無數故か米錢之寄無之候得共建立之好立様龍宝院宝珠院相談仕候処^二不及力、宝蔵院借金仕漸々建立仕候、然所^二口口年甲八月大風^一堂ころひ申候^二付折木を以修覆仕候、尤其節入目之儀者前年寶蔵院借金相濟不申候^一付、三人相談を以三ツ割^二仕其故以龍法院我^一俵申候

一批者且那場^二正月一日より札をくはり申候、拙者儀者先年格式を以札納候所^一先^二廻り札くはり候様拙者方之札且中^一も先手様^二ハ請不申是又迷惑^一奉存候
右之段々被關召分御慈悲を以先年之通^二被為仰付被下候様^一奉願候以上

享保十八年五月三日

遠州山名郡西貝塚村

仕、当国見付宿境松^二留逗仕只来^一申処ヲ見立天王領神主西尾内記殿へ御願、右の御本尊堂建立仕則月光山と申来り候、見付近在上大原村久太夫之修業之縁^二此方落着十七夜觀音預置西貝塚村名主大杉六郎右衛門殿同名八郎左衛門殿へ御願右御兩人^一御見立被下候而只今之堂此^二二建立仕候、少も相違無御座候御事

一先祖開山宝蔵院月清者

寛永十八年辛巳二月十六日二病死仕候

一二代宝蔵院慶山

延宝二甲寅年正月十三日病死仕候

一三代宝蔵院秀栄

享保二丁酉六月十七日病死仕候

一四代宝蔵院

享保三年亥卯月廿五日

元和年中

百三十年四五年前

一十七夜御堂初建立

開山月清老人建立

一十七夜御堂次建立

六十六年以前三代寶蔵院

一十七夜御堂ころび

觀音二代目惣領宝寿院 兩人建立

一十七夜御堂三目建立六十以前宝蔵院方不如意二付是^二三ツ分

一十七夜御堂四ツ目延享元年建立三人して修造

【資料十二】

口上札事

一遠州山名郡西貝塚村月光山神護寺千手觀音ハ生国出羽国羽黒山之山伏風と出、同国見附

只来と申所^二天王領見立十七夜を守護いたし、時之御代官様少しさハり有之、同上大原

村久太夫^二老門^一も御座候得者西貝塚村大杉氏御見立堂建立仕候、開山宝蔵院と申候、

則^二口明月清と名乗り申候

一宝蔵院妻ハ同国野箱村善右衛門娘

一二代宝蔵院妻ハ同国豊田郡山東村善之丞娘

一三代喜宝院妻ハ同国和口村天乃清左衛門娘

一四代宝蔵院妻ハ貝塚村大村次郎八娘

一五代宝蔵院妻ハ城飼郡入山瀬村小笠山威徳院娘

延享二丑三月

當山風閣寺様御役人

不動院様

明月寺様

永昌寺様

願主 寶蔵院(印)

【資料八】

預り金申金子之事

一金合老向老分只今儘^二請取申候所実正也、此金子利足之儀者老分^一付式百文宛相定預り置申候、此金子月光山十七夜入用之時分^二口口、元利共^一急度御勘定可申候、為後日一札加判依^二如件

享保十九年

寅ノ拾月日

東華岡村

預り主 武太夫(印)

同 武八(印)

貝塚村

寶蔵院様

【資料九】

質物賣渡し申金子手形事

一十七夜御堂御普請^二付我等名敷内下やぶ老かまへ儘^一賣渡し申所実正^二御座候、一此代金子老向老分儘^一受取賄申候、但シ年季之儀ハ卯年^二申之年迄十八年季相定申候、若年季明ケ申暮^一本金ヲ以請出ス儀罷成不申候ハ、何年も永ク其方之名敷被成、其時我等子々孫々迄一言申間敷、為後日證人加判仍^二如件

享保廿年卯正月廿五日

同村

善蔵院殿

主 宝蔵院

證人 吉祥

同人 源兵衛

【資料十一】

乍恐口上書以奉願上候御事

一先祖開山宝蔵院月清者出生出羽国月山之者^二御座候処^一廻国修行^二千手觀音之ぞう奉拜

【資料十三】

[包紙]

山寺號

宝蔵院月慶

善蔵院秀堅

龍宝院清盈

[表書]

山號

月光山

寺號

神護寺

印

右古来之通弥

當山法頭御門主

御許容之處仍執達如件

文化元年二月廿九日 僧正法印定隆(花押) *

遠州山名郡西貝塚村

十七夜別當

宝蔵院月慶

善蔵院秀堅

龍宝院清盈

[裏書]

長門守源季保(印)

周防守源經明(印)

【資料十四】

西貝塚十七夜観音堂文書

Table with 6 columns: 番号, 年代, 表題(内容), 差出(作成), 宛先, 形態. Contains 22 entries of historical documents from the West Bayza 17 Night Kannon Temple.

西貝塚 星野家文書

Table with 6 columns: 番号, 年代, 表題(内容), 差出(作成), 宛先, 形態. Contains 14 entries of historical documents from the West Bayza Hoshino Family.

【資料一】

賣渡し申我等居屋敷之事

一我等成亥ノすま西ニテ茶園共ニ老反歩畑金子老両老分ニ賣渡し申所実正也、金子利息之義ハ老々年ニ老両老分ニ付老分子之勘定申候、但年季之義ハ子ノ暮ヨリ巳ノ暮迄中年四年季ヘ相定申候、四年過巳ノ暮ニ本金子老両老分ニ買返し申候ハ、無相違御返し可被下候、若本金子老両老分ニテ巳ノ暮買返し申義なり不申候ハ、右之畑之分の水上名田ニ可被成候、其時少しも違乱申間敷候、為後日一札依如件

西六郷村

寛文拾貳年

子ノ十二月廿九日

主 長兵衛(印)
證人 寶覺院(印)
同 人 ぎよく木いん(印)

喜寶院殿

【資料二】

預り申金子質物畑手形之事

右ハ當巳ノ年賄ニ差語り、金子老両式分儲ニ請取賄申所実正也、右金子質物として道ヨリ東老まき茶園共ニ只今其方ヘ相渡し置申候、但シ年季之儀ハ巳ノ暮ヨリ戌ノ暮迄中年五年季之御約束ニ仕候、年季明成暮ニ右之本金子老両式分相渡シ申候ハ、右之畑無相違御返し可被下候、若戌ノ暮ニ請返シ申義不罷成候ハ、則此手形ニ何年も御支配可被成候、則此畑重質ニハ無御座候、為後日手形依如件

巳ノ十二月廿八日

西貝塚村

畑主 貴寶院(印)
證人 寶十院(印)
同 山三郎(印)

同村 龍宝院殿

【資料三】

一札之事

一西貝塚村月光山十七夜観音堂、年久敷坊地ニ御座候、私共先祖四代以前月清法印所持致、則悴共三人御座候、門三間ニ致右之山年番ニ相構行申候、其節ヨリ口今三間ニ年番持来り申候、御尋ニ付如斯御座候相違之少、無御座候、後日如件

吉祥院

享保三戌十一月

【資料四】

一札之事

一大久保村伴助と申百姓、不勝手ニ付今度宝蔵院弟子山伏ニ相願申ニ付、向後若御本寺様御觸之通り御役銭御日限之通急度指上ニ可申候、自今以後師道帳本之御世話ニ少茂不相成候様ニ可仕候、右之趣キ一札之通り急度相守可申候以上

享保七年寅ノ六月

中泉帳本
天学院
師道
太れ

何村何殿

【資料五】

一札之事

一源六郎家敷請出シ申候付、證文相見ヘ不申ニ付其内證文出申候共本今ニ可仕候、此家敷ニ付構申間敷候為其一札如件

享保十一年

午ノ二月

同村本主 龍宝院(印)
又四郎(印)
中立衆 右同断 権三郎(印)
右同断 平四郎(印)

同村 宝蔵院

【資料六】

一札之事

一此度十七夜建立ニ付拙僧共出入仕候所ニ同村源兵衛殿武兵衛殿御兩人前度より内證ニ首尾仕候様ニ御中着被成候、然ニ宝蔵院同心無之旨申上候所ニ源兵衛殿武兵衛殿ニ三人共被召寄被分御聞被仰渡候、唯今迄之通年番ニ相勤正月松鋸之儀ハ先々通り寶蔵院ヨリ可致候、佛前ニ捧物之儀者年番方ヨリ供候様ニ可致候、惣諸相談有之候節者十七夜堂迄三人共致會合可申候、猶又十七夜堂ニ立置候能面之儀者開山月清之拜面計立置候様ニ源兵衛殿武

上ってきていることを、反映しているのではないだろうか。

資料十三は十七夜観音堂に対し、当山派修験の法頭である醍醐三宝院より文化元年（一八〇四）に寺号山号の認可を受けたもので、包紙には別当として宝蔵院月慶・菩薩院秀賢・龍宝院清盈の連名で下されていることが、年番制を継続している十七夜観音堂の特徴である（4）。この年は法頭の三宝院門跡高演の大峯入峰修行が行われる予定であり、山号・寺号認可に對する金子が半額とされ、一両三分と二朱七分の上納で済んだ。

資料十四は年不祥であるが、その内容は資料十一、十二の口上書と重複する。但し、資料十一では「三代宝蔵院秀米」となっているところを、資料十二では「三代寶宝院」、資料十四では三代寶宝院秀米」と記されており、混乱している。

資料十六は寛政四年（一七九二）三月十一日から四月朔日の御開帳のことを記したもので、当山派諸国総袈裟頭で当山派江戸役所の鳳閣寺に金百疋をお礼に、袈裟筋の触頭（帳元）である小笠山小笠寺には謝礼として同じく金百疋が支払われている。

資料十七は後ろが欠失して年号、差出先が不明だが、内容は注目される。このたび、十七夜観音堂の建立がなしたが、宝蔵院が開山の本家と主張することに対し、出入りがあつた。当村の名主・組頭衆立会のもと、三院が召し出され吟味を受けた。月清法印が開基としても、何の証拠も無い。本家宝蔵院と言つても聞き伝えばかりで本家と認め難い。ついでに証文のとおり必ず守り、輪番で別当を勤めるように。しかる上は後々口論にならないように。後日のため連判によつて替つていく内容である。

資料二十は前後が欠失するが、後半には十七夜堂建立にあたり、大工が延べ九五〇人、松木一本を龍宝院が、二本を宝珠院が出し、道具類や残りの松木は宝蔵院が残らず出し、一切の入用も宝蔵院が半分余りを出し、大工の工資は宝珠院、龍宝院は出さなかつたので宝珠院の言うことがかりでは成したが、という内容である。

（2）星野家文書

開山月清法印の末裔で惣領家にあたる星野家は、現在も観音堂の東に当初の位置のまま存在している（5）。星野家に残された古文書類は四点中、五点が補任状、衣体に関するもの、四点が「当山派方式誓約」で具体的な活動内容を知ることができるものは、残念ながら残されていない。

古文書の他には星野家に伝えられ、現在浅羽郷土資料館に寄託されている十七夜観音堂開祖の月清上人像が特筆される。縦八八・八〇、横三七〇、紙本着色のこの画像は、一見して当山派修験の開祖で醍醐寺を開いた理源大師聖宝の尊像を意識したものであることがわかる。

遠江では修験者の実に九九%までが当山派修験である。これは、全国的な組織化をいち早く進めた聖護院門跡を中心とする本山派修験勢力との均衡を図るため、幕府が醍醐三宝院門跡の当山派修験の地方組織化を促進させたことが反映している。

当山派では江戸・青山の鳳閣寺戒定恵院を諸国総袈裟頭と位置付けて当山派江戸役所として、浜松鴨江寺の鎮守白山権現と浜松秋葉権現の別当を務めた二諦坊を鳳閣寺住職の兼帯として、浜松鳳閣寺、その取り込みにも成功している。これにより東海道筋の末端修験の当山派への組織化が元禄年間に強力に進められた。

西貝塚十七夜観音堂は、中泉御殿の鬼門鎮守の性格を持つ三尻坊大権現の別当である当山派修験天学院山号は小笠山寺号は小笠寺を帳元とする当山派遠州中泉組に編成され、支配筋では小笠寺の配下派下（組み込まれて）当山派修験の一員となる。それは三代寶宝院の時代で江戸後期の中泉組には浜松市や掛川市など広範囲にわたり一八院の配下が確認できる（7）。組を統制する帳元や触頭クラスの修験者は村鎮守や仏堂の別当を務めて、広範囲に信者を獲得し経済的に安定したものが一般的で、彼らは江戸中期から醍醐三宝院門跡の直末寺院として、山号・寺号認可を受け、組織化が進められた。その第二波のきかけとなつたのが、文化元年（一八〇四）の門跡高演による大峯入峰修行で、この段階では力を付けてきた中堅クラスの修験に對して新たに山号・寺号認可に要する金子を普段の半額に落として、直末寺院化を進めた。

一月に寺号認可を受けた月光山神護寺別当は、資料が残されていないが同年七月に上京し、門跡の内裏参内の壮観な入峯行列に直末寺院として参加しているはずである。このように、修験者への山号・寺号認可は門跡による組織化の問題が背景に存在し、神護寺はその時流に乗ることができた事例である。

第三は月待講である十七夜・二十三夜信仰の問題。一般に東北地方には十七夜・二十三夜待の石塔が多く見られるため、この信仰は西貝塚十七夜堂の事例からまず、羽黒修験との関わりが想定できる。しかし、十七夜堂・二十三夜堂は遠江においては、「院内山伏」と呼ばれ、民間巫覡出身で近世期に修験者となる集団の中に高い頻度で存在する。例えば天竜院内（磐田市北島）には二十三夜堂が今も残り元禄五年の銘を持つ本尊の勢至菩薩像を確認することができる。これは萬歳六軒衆の結縁による。この他に榛原院内・大淵院内に二十三夜堂が、河村院内・大淵院内・飯田院内に十七夜堂が存在したことが判明しているが、羽黒修験との関わりを見出すことはできない。熊野地方にも古座川で十七ヶ峰（証成峰）に月待講の名残と考えられる月々瀬を確認でき、那智青岸渡寺観音堂では毎月十七日が観音の縁日であるため、今も御詠歌があげられているが、その系譜がいま一つ明確にできておらず、今後の課題となつてい

背後の嘴を尖らせた岩が突き出た窟は、大峯山中の最重要窟である笹ノ窟に隣接する鷲窟を表しており、修験道の開祖とされる役小角を画像で表す場合、一般的に用いられる窟である。月清上人像は役小角と理源大師聖宝の画像を組み合わせ、当山派の法脈であることを意識しながらも背中に羽を描いて独自性を主張しているところなど、実に興味のある画像である。かつて星野家では、正月にこの像を床の間に掛けて祀っていたという。



十七夜観音堂開祖 月清上人像

三 十七夜観音堂（月光山神護寺）の位置

断片的な資料しか残されていないものの、十七夜観音堂の資料は、遠江国における修験道史の一端を語るうえで重要な問題を提起している。最後に纏めておこう。

第一に徳川幕府の宗教者政策により生じた近世の里修験については、その出自と系譜が殆んど分かっていない中であつて、西貝塚十七夜観音堂は希少な事例である。しかも、開山の月清法印は羽黒修験の系譜から始まる。修験道社会における露場及び末派の分布では、真言系の当山派、天台系の本山派は全国的な広がりをもつが、箱根開から東の開八州と甲州及び東北地方は羽黒派のエリア、九州全域と吉岐対馬及び長門は彦山派のエリアとして棲み分けが確立している。こうしたなか、西貝塚に拠点を置いた月清の事例は特筆される。

遠江における出羽三山に出自を認めることができる宗教者の事例は、他に、周智郡森町飯田高平山（6）の木喰聖に見られる。特に開山の木喰秀海は湯殿山一世行人の系譜から出た修行者で、境内には入定塚として墓所が祀られている。旧竜洋町には湯殿山神社が存在し、概ね天竜川から東の範囲が、出羽三山系宗教者の活動エリアとして認識できる西限ではないだろうか。

第二に組織と寺号認可の問題である。東海地方は真言系の当山派修験が大勢を占め、特に

註記

- (1) 「浅羽の里修験 当山派修験遠州中泉組大学院の存在と活動」、『郷土誌 磐南文化 No. 11』磐南文化協会、一九九六年、「浅羽の里修験 当山派における俗修験の活動」、『郷土誌 磐南文化 No. 11』磐南文化協会、一九九七年、「地域における俗修験の活動 遠江国浅羽三十三ヶ村の事例」、『山岳修験第三号』日本山岳修験学会、一九九九年、「勝間田院内（修験者・陰陽師）とその資料」、『静岡県博物館協会研究紀要第二十九号』二〇〇六年、「天竜院内（修験者・陰陽師）とその資料」、『静岡県博物館協会研究紀要第三〇号』二〇〇七年など。
- (2) 周智郡森町村の村役人を務めた山中豊平によりまとめられた地誌で、天保四年にこの完成を見る。
- (3) 月清上人の三人の息子のうち、本家となるのが宝蔵院で明治以降遺俗して星野姓を名乗り、三院のうち唯一現存する。この、星野姓は遠江では珍しいが、出羽三山の修験道集落羽黒周辺では一般的な姓である。
- (4) 同じ遠江の当山派修験の組織と比較すると、年番制をとるのは、ほぼ均等な修験が集まり宗教者集落を形成する院内山伏の事例と旧秋葉山修験の組に見られるが、一堂の別当の事例は管見に及び限り、西貝塚十七夜観音堂が唯一の事例である。
- (5) 輪番制を構成した三院のうち龍宝院、延寿院は明治以降移住し、現地には星野家だけが現存する。
- (6) 高平山は袋井市春岡に所在する、真言宗御室派西楽寺の奥ノ院である。近世期には弘法堂が置かれ、これを拠点に木喰聖の勧進が行われた。
- (7) 「小笠寺並同社書上帳（大乗院三尻坊文書）」、『豊田郡中泉村和光院・同金洗村般若院・同牛飼村宇宝院・同見取村教室院・磐田郡見付宿大玉院、山名郡西貝塚村神護寺・同中祥院・同原川村妙覚院・同諸井村大学院・同中村花法院・周智郡長蔵寺村千命院・同村松村末宝院・同龍性院・佐野郡吉岡村貴明院・長上郡神立村常学院・山名郡川井村清宝院・周智郡下久野村金別院・同天寿院の十八院である。

当山派修験 遠州中泉組 月光山神護寺とその資料

袋井市立浅羽郷土資料館 山本義孝

はじめに

筆者はこれまで明治初期のいわゆる神仏分離令、これにより生じた廢仏毀釈、そして修験道・陰陽道禁止令という宗教改革を経て壊滅的な被害を受けた修験道・陰陽道などの諸宗教者に関する資料を収集・整理し順次紹介してきた(1)。

なせなら、地域史や地域に基いた宗教史を描く場合でもその多くは社寺が主体となり、これに関わる神主、社家・寺僧の記載に留まるのが一般的で、地域に根付いて多様な活動を行っていた諸宗教者の動向にまで踏み込んで語られることはほとんどないからである。

しかし、地域において彼らが果たした役割は予想以上に大きく、現行の民俗行事や地域文化の基層部分に深く関わっていたが、殆んど見逃されている。当稿は当山派修験で、文化元年(一八〇四)に当山派の法頭である醍醐三寶院より山号・寺号認可を得るまでに成長した「月光山神護寺」とこれに関する当山派修験三寶院(現星野家)に残された数少ない資料のうち古文書を中心に紹介し、基礎資料とするのが目的である。

一、月光山神護寺の概要

西貝塚十七夜観音堂の通称を持つ月光山神護寺は、近世期の西貝塚村の本村内に所在する。この村は元禄以降には旗本長谷川氏の知行地で、天保年間には城崎五〇戸、本村一五〇戸、安久路五戸の計一八〇戸、元禄高帳での収穫高は九六一石と周辺村落と比較して規模が大きく収穫高も多い村であった。村内には曹洞宗風祭山福王寺(朱印地一八石八斗)・永福寺(朱印地一石五斗)・隣浦院(朱印地三石)が所在するが、観音堂は除地ではなかった(『遠淡海地志』(2))。

十七夜観音堂が特筆されるのは、開山の月清上人が出羽国月山の出身で羽黒修験の系譜に属することが認められ、近世初頭の里修験化にあたり、その出自と系譜が確認できること(3)。この後、三人の息子がそれぞれ修験者として一院を起し、父の残した観音堂を中核に一年交代の輪番制で別当を維持し続けた存在形態であること、文化元年七月に実施された三寶院門跡高演の大筆入筆に伴い山号・寺号認可を受け、三寶院門跡直末格の修験者として上昇に成

1 十七夜堂の開山は月清法印(二代)が宝蔵院、弟の宝覺院、これに月清の弟子観音院の三院が存在した。

2 月清の弟子観音院は別家に置き十七夜観音堂の別当は宝蔵院と観音院の両院が勤めていた。月清は弟の宝覺院を連れて隠居となった。別当の公式の役目は正月・五月・九月にそれぞれであった。

3 二代目観音院、三代目宝珠院の弟八弥が兄弟で別当を務めていたが、八弥の務め分を観音院・龍宝院が相談して買取り、八弥は金子を受け取って他国へと追いやりました。龍宝院は我儘に勤めを行うので、張り合いがなくなってしまう。

4 十七夜堂の鍵は四十年前(元禄三年)一六九〇年()には宝蔵院が管理し、そのときは三院が仲良く、鍵が人用のときは両院に遣いを出して借りていたが、段々と不仲になり、今では廻り持ちのようになつてしまつた。このままでは観音の威光も無くなり、信者の信心も薄くなつて迷惑の上ないことである。

5 五十年前(延宝六年)一六七八年()より十七夜観音堂を建立したときには、宝蔵院が近郷近在に勤化をしたが米銭の寄付も少なく、龍宝院・宝珠院と闘つたものの力及はず、宝蔵院が借金をして漸くの思いで建立した。ところがこの年の八月の大風で堂が倒れ、折木を用いて修復を行ったものの、その時の経費は宝蔵院がまた借金を返済し切れておらず、三人が相談をして三等分することにしたが、龍宝院が我儘を言っている。

6 旦那場へは正月二日より配札を行う。昨年には札を納めようとしたところ、先に回つて配札を行い先方でもこれを受けず、迷惑のうえない、というもので、これら諸問題に対し、御慈悲をもつて、先年のように糺してもうたいたい内容である。開山月清上人が亡くなって半世紀以上の月日が流れ、子孫の間に様々な問題が生じていることがうかがえる。

資料十は延享元年(一七四四)に行つた観音堂修復時の棟札の写しである。大正十三年に行われた本堂屋根葺き替えの際に発見された棟札を写したもので、中の柱を挟んで西の棟木から東の棟木に及んでおり、かなり大型のものらしい。梵字悉曇は理解できず形だけ写しているため見づらいが、千手観音三尊の種子で、主尊にキリク(千手観音)右脇侍にカ(地藏菩薩)

不具一切功德慈眼視衆生
天下悉乎國土安全五穀成
御堂奉建立延享元年羊工人
當村中氏子繁榮檀家安全祈

開山月清法印
寶蔵院
龍寶院
延壽院

寶蔵院
龍寶院
延壽院

資料10 棟札写

功した。数少ない修験道寺院の一つであることである。

袈裟筋は当山派十二正大先達の二つ伊勢世義寺で、地域における組織では遠州中泉組に属し、帳元天学院(現大乗院三仍坊)の配下であった。

二、資料の概要

神護寺に関する資料は、十七夜観音堂が所有する古文書、大般若経、軸類、札類と本尊千手観音立像(曹洞宗福王寺に保管)があり、このうち古文書は二点、他に御神名を記した軸物中身の一点と、宝蔵院の末裔である星野家に伝わる古文書一四点、他に軸類がある。

(1) 西貝塚十七夜観音堂文書

ここでは十七夜観音堂所有の資料の中から、活動内容が何われるものを取り上げ、概要を紹介しよう。

資料三は享保三年(一七一八)の時点、山号寺号認可を受ける以前には「月光山十七夜観音堂」と称していたことがわかる。開山月清上人には三人の倅があり、それぞれが吉祥院・菩薩院・宝蔵院と称する当山派修験として位階を授かり、十七夜観音堂の別当を年番で務めていたことがわかる。

資料七は当山派諸国総袈裟頭で江戸役所の青山戒定恵院鳳閣寺に対し、宝蔵院が差し出した享保一八年(一七三三)の六カ条にわたる口上書である。その内容は



十七夜観音堂の周辺 S=1/50,000



現在の十七夜観音堂

左脇侍にカ(不動明王)を配し、その下に真言であるオンバザラタラマキリクソウカ(意訳 金剛教法具足尊(観世音)に帰命し奉る成就吉祥)と記している。

下には開基月清法印の下、傘の中に、大工 大原宇右衛門・大原想七郎・大原弥助・鎌田喜三郎・鮫島喜十郎・南島半七郎・鎌田久太米・川井木挽 甚四郎、八名の名を連ね、最後に宝蔵院・龍宝院・延壽院の連名となる構成である。

資料十一は文末が欠失のため、どこへ充てた口上書かは不明だが、十七夜観音堂の歴史を伺うことができる内容が記されている。その内容は

1 先祖である開山宝蔵院月清は出生が出羽国月山で、千手観音を拝しながら諸国を修行し、見付宿境松に逗留、領主である見付天王領の神主西尾氏に願ひ出、その観音像を祀る堂を建立し、月光山と称していた。のち上大原村久太夫との縁で今の地に落ち着き、西貝塚村名主大杉六郎右衛門、大杉八郎左衛門両人の見立てで観音堂を建立することができた。

2 開山宝蔵院月清は寛永一八年(一六四一)に病死、二代慶山は延宝三年(一六七四)に病死、宝蔵院が惣領家である。三代秀栄は享保一一年(一七三六)に病死、庶子の隠居方が宝学院である。四代宝蔵院は開山の弟子観音院が享保三年(一七一八)に継いだ。

3 十七夜観音堂は最初、元和年中(一六五二一四)に開山月清が一人で建立し、三代宝蔵院の時(延宝六年八月倒壊)観音院(一代)の惣領である宝寿院、庶子の龍宝院の両名によつて建立、三度目(貞享元年)一六八四()は宝蔵院が思いのままにならず、三院で建立、四度目が延享元年(一七四四)で三院で建立し、現在に至っている。

資料十二は延享二年(一七四五)の口上書で、ここではじめて開山月清が「羽黒山の山伏風」と記され、羽黒派修験の系譜であることを記している。次に歴代の妻の出自が列記され、開山月清は野箱村善右衛門の娘、二代慶山が豊田郡山東村善之丞の娘、三代秀栄は和口村天乃清左衛門の娘、四代清養は地元貝塚村大村次郎八の娘、五代尊清は城飼郡入山瀬村の小笠山威徳院の娘である。

特に、五代目は同じ当山派修験で横須賀藩主西尾家お抱えの修験の家から妻を迎えている。しかし、同じ修験の家としては威徳院の方がより家格が高く、宝蔵院家の位置が相対的に浮